

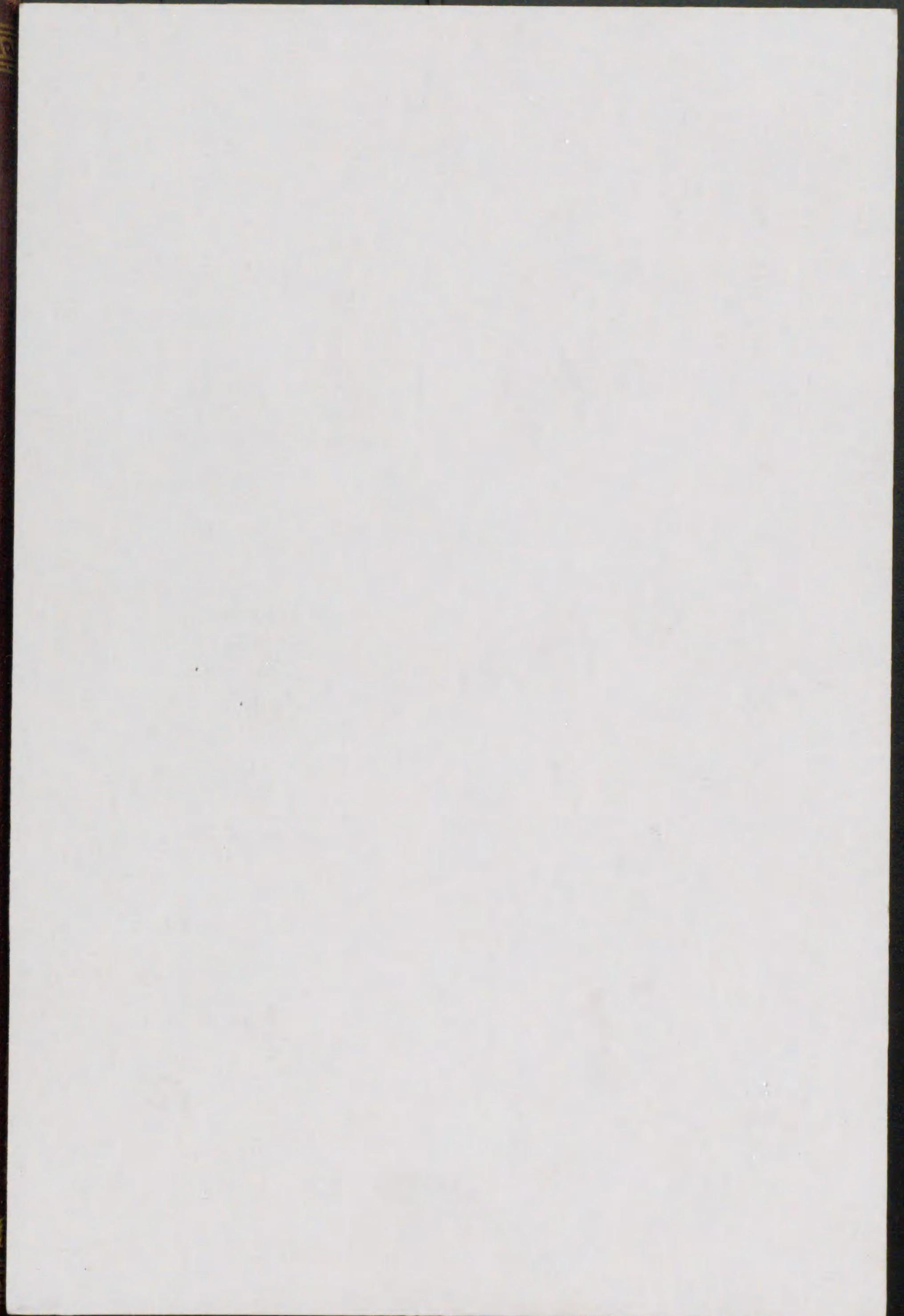
613

3

613-13



1200501535049





6. 1. 7



支那から

前田河廣一郎

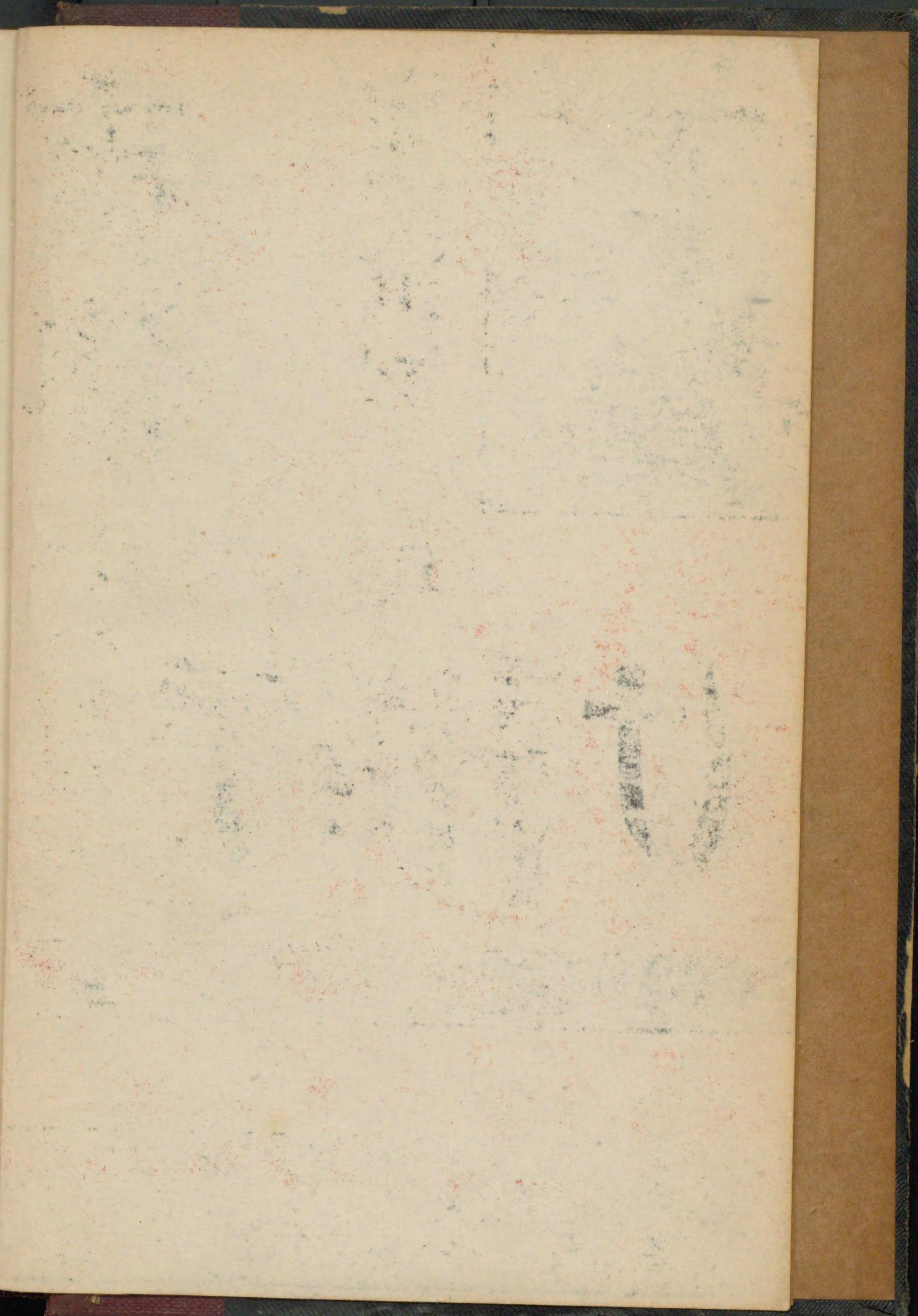
手引き

新作家長篇小説選集



218

功  
八







前田河廣一郎

支那から手を引け

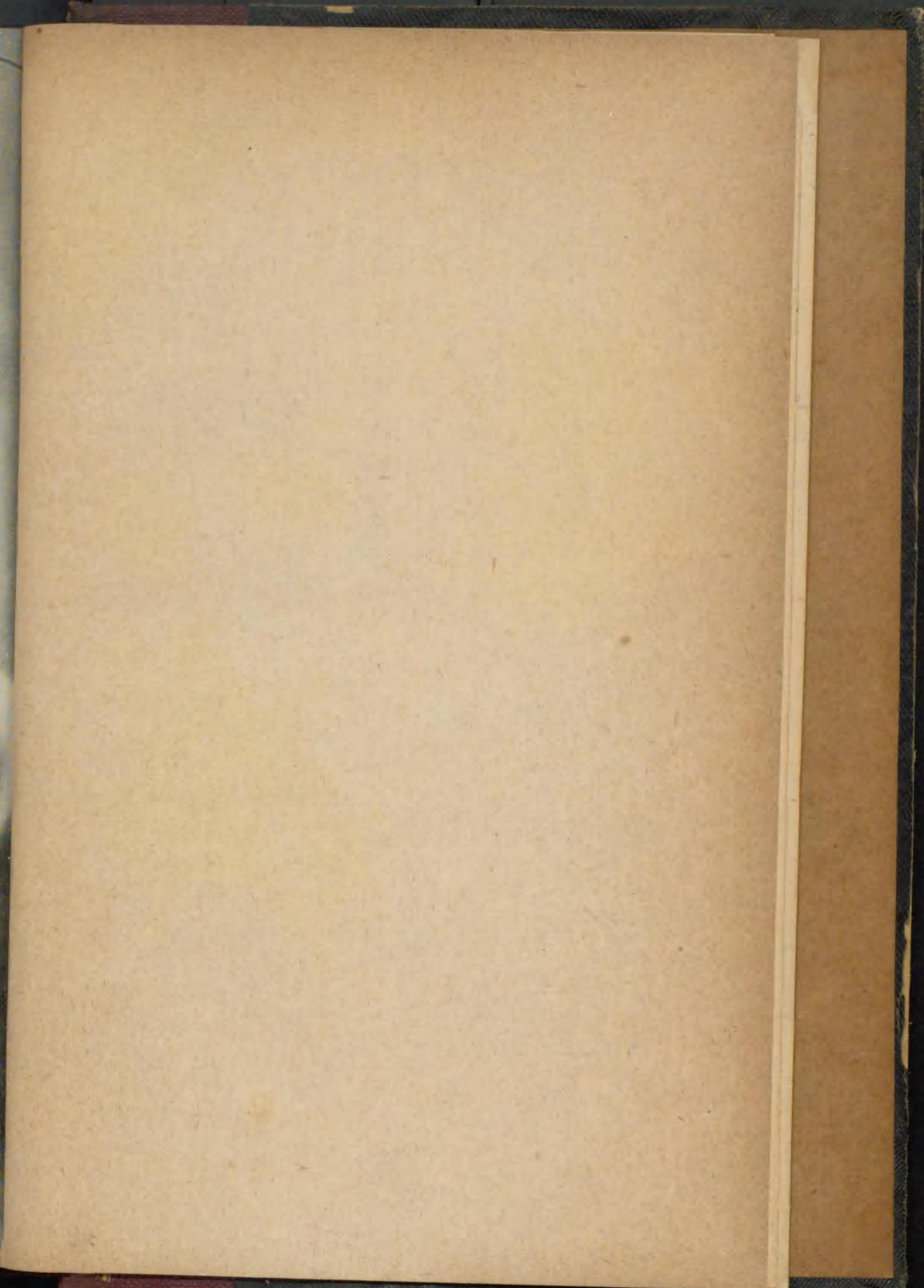
小新  
説作  
選長  
集編

日  
本  
評  
論  
社  
版





H. Wadako





## 序

この小説『支那から手を引け!』は、次のやうな順序を経た、同志里村欣三と私との共同製作である。――

一九二九年四月、前後三日に亘つて、里村欣三の舊稿『スパイ』を解剖し分析した。その結果、全然新しい構成の必要を認め、人物、事件、背景等の再創作を行ひ、大體の筋書を立て、里村欣三がその執筆に當つた。約三週間で出来上がった百二三十枚の原稿を通讀して、私はその數十枚に改稿を薦めた。それが完成すると、一晝夜、私は單獨にその仕上げを行つた。そして、『假面』と改題して、これを『福岡日々』紙上に掲載し、稿料は折半した。たしか、その脱稿と共に同志里村は北海道へ旅行した筈だ。それが六月である。

『假面』は失敗であつた。それには共同製作の特質よりも、むしろその反對のものがより多くのさばり出た。既に支那に關する題材を、やや書き荒らした二人の作家が、半ば技術上から結びついて作製したといふ感じがしないでもなかつた。たしかに努力だけを折衷した傾向があつた。



一九三〇年、三―四月に亘つて、再び里村と私とは、『假面』を中心として、三四回の打合せを行つた。その結果、新しくスタートする意味で、里村は多くの参考書類を携へて歸へつた。

いづれの場合にあつても、本来のテーマは、北伐革命軍上海入城前後の支那革命の轉換の動機にあつた。が、小説はテーマだけで書けるものではない。我々は、もつと日本の無産大衆にわかりいやう、支那革命に理解を持つやうに、生きた具體的事實と藝術的表現とから出發しなければならぬ。六月までに、里村は、百枚ほどの原稿を書いた。そして、その大部分は再懇談の結果訂正されなければならなかつた。七月上旬、同志里村は、必要以上に物議を醸した代作問題の喧しい折柄、遂に私との合作を斷念する旨を通知して來た。しかし、私は如上の經過を見ても、この小説が『代作』でないことを知悉してゐるから、みすみす里村欣三君の努力を、一時的な風説の下に葬り去ることを潔しとしなかつた。

そこで、この小説の最初五六十枚の彼れの書き出しに加へるに、滿洲放浪時代の同君の悲痛な經驗を取入れて、その他は全部新しく私が書き足すといふことにして、合作の意義を全ふすることに決意した。

私の起稿は七月からであつたが、思ふやうにペンが進まず、殊に最近持病の腎臓が再發したので、長時間の勞役に堪え得なくなつたことが、この小説の刊行をすこし遅らせた原因となつた。茲に同志里村欣三の勞を謝し、この小説に與へた數々の暗示に對して彼れの作家的天分の豊かなることに敬意を拂ふ次第である。

猶、この小説の出るまでには、知友古野丁一郎君を一方ならず煩はしたことを記して置かねばならない。

一九三〇・九・二〇

東京市外・高圓寺・六二〇

前田河廣一郎



目次

序

1 ビラが撒かれる……………一

2 デモに参加させられる……………二四

3 不思議な旅客……………二六

4 逃げさせられる……………四〇

5 淫賣の宿……………四六

6 ユーカリのとみ子……………六二



7	街へ出る……………	七四
8	日本人倶楽部……………	八九
9	回顧の日……………	一〇一
10	不意の出来事……………	一〇八
11	義 豊 里……………	一三三
12	林幸作といふ男……………	一四八
13	擾 亂……………	一六七
14	影となつた男……………	一八七
15	地下室の銃聲……………	二〇一

16	コレヴァイツチ氏……………	二二二
17	人間の洪水……………	二三六
18	田中功と林幸作……………	二四三



1、ピラが撒かれる

欠呻をしかけた田中は、不意に、肉刺のある足を、いやといふほど踏みつけられたので、むきになつた。誰かぞ、左を駆け抜けたのだ。

「うは——畜生ッ！」

振りかへつた途端に、灰色な服が二つ塊り合つて飛んだと思ふと、突然、田中の眼の前で二人の間が開きなほつて、魚のやうにはくんと口をあけた。労働服を着た若い者だ。一人の蒼白い蜂谷に、横文字のやうな脈がはつきり見えた。

何か云はうとした風に、その一人が片手を舉げると、田中とその男達の間を、うすい肩先をベンのやうに尖がらせた、斷髪の女が、つかつかと遮ぎつた。

そのモダン・ガールと、労働服の間に、どこから噴き出すとも知れず、數百枚の紙片が、勢ひよく上方にふつ飛んで、ばらばらと田中の鳥打ちを木の葉のやうに敲いた。

1、ピラが撒かれる



1、ピラが撒かれる

二

すると、もう一人の労働服が、これも誰かの肩蔭から、同じやうな紙片を、銀座の群集にむかつて  
敲きつけるのが、一瞬間のフラッシュになつて眼に映じた。

銀座の群集は、はつとなつて、この不意に投げつけられた紙片を瞞めた。銀座に住んでゐない種類  
の失業者である田中功には、その一瞬間の躊躇が眼に見えてわかつた。尾張町四丁目と竹早町との間  
である。この邊の人間は、ピラを受取る用意を始終してゐるわけではない。紙片には、さまざまな色  
と光と影とが閃いて散つた。

と、數十本の手が、それらの紙片を、硝子窓の前で、鋪石の上で、電柱の蔭で、むさほるやうに抑  
へつけた。たしかに、銀座は、用意してゐないだけ、かういふ不意に撒かれるピラには飢ゑてゐるの  
だ。

『——ピラだ。』

『廣告か？』

『主義者のピラだ！——』

あつけにとられた田中は、異様な人達の動きに面喰つて、その一片を掴む機会を失つた。

すると、眼の前に、太い脚をひろげて立つてゐる斷髪の女に、いきなり紳士風な一人の男が、どこ  
からともなくつつかゝつて行つて、女の手にした紙片をびしりとステッキで敲き落すと、つひ今紙片  
を撒いた二人の姿を追ひかけて、氣狂ひのやうにふつ飛んで行つた。

『まあ……』

女は、手許にちぎられた紙片を持つたまゝ、眼のまはりに血の氣を漂はせて、紳士風な男の姿をぐ  
ツと睨んだ。田中は、鋪道に落ちた、片隅のちぎられた紙片を素早く拾つた。

『支那から手をひけ！』

對支出兵に反對しろ！』

ピラにはさう書いてあつた。こまかい活字の一部分が、女の手に残つてゐた。

ふと、香水と腋臭の匂ひが、彼を押しむやうに近づいた。

『對支非干涉運動——まあ、勇敢ね！ しつかりやつてよウ。』

女は、田中の持つてゐる紙片と、自分の手許にある紙片とをつぎ合せながら、素早くピラの文章を  
讀みはじめた。

1、ピラが撒かれる

三



『こりや、貴女のもんだよ。』

田中は、氣恥しさでちつとしてゐることが出来なくなつたので、ピラの残りを女の手へ捻ぢこむと  
 弾きかへされたやうに人ごみの中へ紛れこんだ。

暫く、女の化粧をした横顔と、スカートの下の太つた脚とが眼にちらついて、小氣味のわるい冷汗  
 が顔ぢうに湧いた。『對支非干涉運動』——あんなこまつちやくれたハイカラ娘が、あんなことを吐  
 かしてやがる、世の中も變つたもんだ！『支那から手をひけ！』——いつたい支那には、この頃、何が起  
 つてゐるのか？ それにしても、あの勞働服を着た二人の若い者と、紳士風な男と、モダン・ガ  
 ルと、……田中功はすつかりわからなくなつた。

しかし、芝浦の安宿から、時折銀座へ出て来るほど好奇心の發達した田中には、勞働服の二人がど  
 うなつたかを知りたいぐらゐるの冒險心がないわけではない。彼は、面倒くさいので、今度はサイドウ  
 オーク傳ひに、出雲町から汐留の橋のへんまで、大股に街の兩側を眼で漁りながら歩いてみた。この  
 場合、一つの手掛りになるのは、先刻のピラであるが、それはもうどこにも落ちてゐなかつたし、銀  
 座の群集は平常と同じやうに、戯れつくやうな足どりで、シヨウ・ウキンドウからシヨウ・ウキンドウ

へと流れてゐるだけだつた。二人の勞働服と、ステッキの紳士とは、呑まれたやうに姿を消した。

田中は、橋の下の溝泥へ、ベツと臭い唾を吐きながら、もと來た方へとつてかへした。まだ宵の口  
 である。彼には歩き足らなかつたのだ。

かうやつて、銀座の爛れるやうな電燈の下を、いろいろな服装をした、まつたく自分とは關係のな  
 い人間達にまじつて、たゞほんやり歩いてゐることは、近ごろの田中にとつて、活動寫眞を見るより  
 もずつと樂な氣がするのである。この町に立つてゐると、誰かゞ、ひとりで自分のからだをどこか  
 へ運んで行つてくれるのである。こゝには、苦勞してゐる人間はなくて、皆賑かな、のん氣な、色つ  
 ぽい人間だけが歩いているらしかつた。この連中といつしよになると、一と晩中大通りを流されて  
 るたつて、ちつとも疲れなかつた。又、ここを離れると妙に淋しくもなつた。

自分がお化粧をしてゐるのでもなければ、縞のズボンから札びらを切つてゐるのでもなかつたが、  
 さういふ人間達の大勢がやがやしてゐるところに來ると、田中の氣持は、まるで自分が金を使つたり  
 おしやれをしたりしてゐる時と同じ氣持になつてゐた。——ラヂオが、大口を開いた酔つぱらひのや  
 うにしやべつてゐる。カフェからは、百も二百もあるやうな、こまかいカチカチした物音が溢れて出



る。眼の前には、いつも夏の海へ飛び込んだ時のやうな光が揺れ動いてゐる。両側に立ち並んだ店はどれもこれも立派な安全な近代式な建物である。サイドウオークには、見てゐて氣持のいゝほど澤山の自動車、鎖でつないだやうに揃つて通る。こゝにゐる女で醜い女はない。こゝを通る男で金の無ささうな人間は一人もゐない。妙くとも、田中より汚い身装をした人間はゐない。……こゝを二時間も歩いてゐると、人間は眼と耳と皮膚の上だけで、酒に酔うたやうにほろつとするのである。ことに失業者の田中には、それがひどく來た。

で、一時間後には、私達は、この小説の主人公である、失業者田中功を、銀座の裏通りの、ごく安つほいカフェの一軒に發見することになる。

かういふカフェは、銀座の大通りとは反對に、一番暗い場所で、臆病たらしくさし出す悪い酒を、假面のやうに塗りこくつた女の顔を見ながら、素早く飲み下す場所なのだ。こゝでは、大通りの媚や、札びらや、派手な縞柄などは、一段と調子が低められ、一と蔭だけ暗さを増して取引されるのだ。女給の洋装も、遠くから見る時だけ洋装らしく見える。そのくせ、薄暗がりの中から出て來る彼女達は、その脂臭いからだを、いつまでも容の眩へねばしつけて置くことを忘れない。こいつらは、

チップを呑む鱈だ。

田中は、本来の含羞性から、さういふ女達を遠慮した。と云つて、さういふ女に居られないことも淋しいので、何かと註文をしては、女の注意を惹いた。何かを註文するとなると、かういふ店では、甘くもない西洋料理のことではなくて、酒である。彼は、隅のテーブルへ凭れて、碟のやうな鹽豆を前歯で噛みながら、三本ほどの酒を平けた。四本目の酒を註文して、女が差向ひのベンチから、腐つたものを包んだやうな安香水の匂ひを漂はしながら立ち上つた時、入口のドアがすうつとあいて、蒼い電燈の下に、女とばつたり顔を合せた新來の客がある。黒い、妙な鳥打を、うしろへぐいと引いた勞働服の二人の若い者であつた。

『まあ、H Aさん、いらつしやい！ Oさんもごいつしよ？』

二人は、女の言葉を拂ひ退けるやうに、無言で光の下をすりぬけると、次のテーブルから、踏切のシグナルのやうに二本の指を突出した。

『コーヒー二つ。急ぐぜ。』

『おコーヒーをお二つ？』

1、ピラが撒かれる



女は、洋装の臀肉を大きい頬つべたのやうに振つて奥へ消えた。

田中は、労働服の横顔を振り仰いだ途端、その蒼白い蜂谷に横文字のやうな血管を見て、思はず杯の手をとめた。

次の席では、鳥打の庇の下で、寒さにストーヴへ縋りついた人間のやうに、二人は鼻をつき合せながら、何かひそひそ話をし始めた。

酸っぱ味のある酒を二三杯ぐいぐい飲みつづけた田中は、しまひに、むらむらと起る好奇心を抑へることが出来なくなつて、よろよろと立ち上りながら、

『よう對支非干涉運動、——お前達ア、女子にもてるぜ！』  
と云つて、二人へ近づいた。

針で刺されたやうにびくんとした労働服は、二人とも中腰になつて、田中の顔をすかして見てゐたが、片手に持った銚子と、指の間に圓めてある杯とを見くらべると、やつと安心した風に、軽い喉聲でケツと笑つた。一人の方の金齒がちらりとする。

『君は、何ですか？——』

田中はちよつとてれた。

『まあ、そんなこと云はずに、一杯飲みたまへ。』

『酒ですか？——失禮します。僕達は、酒で痲痺するやうなことはしてゐませんからね。』

『今日の働きは偉かつたぜ。俺あ、あれを見てゐて、胸がすうツとしたよ。刑事の野郎は、うまくまいたかね？ あの元氣でなきあ、何も出来ねえな。俺のわきにゐた鬚の惚れつぷりと來たら、見せ

たかつたな。——ま、そんなこと云はずに、一杯交際ひたまへ。俺だつてすぶの素人ぢやないんだ。』  
二人は、何かしら眼顔で合圖してゐるらしかつたが、金齒の方の男が、しまひにその結果をかういふ言葉で表現した。

『ルムベンだね。』

そこへ、珈琲のコップ類をかちやかちや鳴しながらやつて來た女給が、頭からかう田中を咎めた。

『まあ、この人、お客様の邪魔ぢあないの！ あちらへ行つていらつしやい、すぐ行つて上げるわよ。』  
田中は女を一言のもとに撥ねつけた。



「やかましいやいッ！ 酒をこゝへ、どしどし運んで来い！ 今夜はこの連中へうんと飲ましてやるんだ。」

女給は、何も聞かなかつたやうに、急に無愛想になつて、珈琲のコップを二人の前へ置くと、足の裏の痛みさうな靴を踏んでもとへ引返した。

「畜生ッ、人ウ馬鹿にしてやがらあ。」田中はどかりと一方のベンチへ掛けて、手にした杯を干すと反対のベンチにゐる金齒へ突きつけた。

「やれよ！」

苦しいやうな、怒つたやうな、輕蔑したやうな、蒼く尖つた對手の顔は、腹立たしげにソーサーへコップを落すと、正面から田中の酔つた顔へ、嘴で突き刺すやうに、かう云つた。

「僕は酒は飲まんです。どうして君は、僕の自由意志を曲げようとするんですか？ 先刻から君は僕達に對して、何か呼び掛けようとして居られる様子ですが、どういふ立場から僕達に興味を持つてられるんですか？ ——階級的に、ハッキリと答へて下さい！ 僕達は、遊蕩氣分でここへ來てるんぢやないんだから。」

田中は、詮方なくて、差出した杯をぐつと手許へ引いて、その糸底でテーブルを小づきまはした。「對支非干涉運動——と云ひア、滿更俺たつて關係のないこともないわけだからな。俺あ、つひ先達までハルピンに居たんだけぜ！」

もう一人の方が、顔の筋肉一つ動かさずに、まつすぐを向いたまゝかう訊ねた。

「ハルピンに何をしてゐるんですか？」

「ハルピンは、森田洋行、その雜貨部に勤めてゐた俺だよ。三月前に首になつて、何かいゝ仕事がないかと思つて内地へ歸つて來たんさ。お前さんがやつてるやうな運動なら、北京あたりでさんざ見て來てるぜ。支那の學生のな。」

「支那の革命運動について、何か御意見が御ありですか？——」

まつすぐを見てゐる方の勞働服は、田中の方を向いてゐる勞働服を、この時慌て、遮つた。

「よせよ、こゝはどこだと思ふ。」

「いや、僕達は、あらゆる場合でアヂる必要があるんだ。かういふ未組織大衆に、どんな場合でも政治意識を吹き込むことが僕達當面の任務ぢやないか。——で、君は、失禮ですが、何か組織運動に屬



して居られますか？ 支那の政治運動の目下の状態はどうなつてゐます？』

田中は、かうきびきび畳みかけられて訊かれると、どう答へていゝかがわからなかつたし、第一、今までさういふ質問を誰からも受けたことがなかつた身の上なので、徒らに言葉を選らばうと焦心ただけだつた。彼に、この二人の小生意氣な若い者ほどの妙な運動者らしい口がきけたつたら！

『お前さんは——一體、労働者か、それとも何だね？』

足場を探ぐるやうに、彼は眼をきつく睜つて詰めよせた。

『プロレタリアートですよ。』

まつすぐを向いた方が無表情に答へた。

『すると、何だね、無産階級とでも云ふことかね？ ぢア、俺だつて同じことだよ。同じ無産階級が仲間同志で話しよつとすると、手前らは、まるでけんつくを喰はせるやうな恰好をするなア、どういふわけかね？——俺は、今夜銀座でお前らのピラ撒きを見て感心した組だよ。俺の氣持はお前らに手を差伸べてゐるんだ。その俺に、まるで木で鼻を括つたやうな挨拶をするたア一體どうしたことか、聴かして貰はうぢやないか！』

と、ま向ひの金歯が折れて出た。

『組織運動に従事してゐると、われわれは、貴方のやうなブチ・ブル的な興味的立場はとれないんですよ。それに、酒などといふ麻醉劑を飲むことは、われわれの運動を麻痺させるだけではなく、さういふ人と話をするのでさへも非常に危険な立場にあるものと認めなければいけないんです。ですから——』

『異議なアし！』

無表情が、それに賛成して、陰險に壁の方を向いた。

『さあ、お酒ですよ！ こちらへいらつしやいつてば。しよないね、酔つぱらいは！』

次のテーブルでは、女給が咬みつくやうにせき立てて、仔馬のやうに床を蹴つてゐた。

田中は、蓄膿症の鼻をくづつかせながら、二人の青年が挑戦的に投げつけた一つの言葉を即座の報復のつもりで口に繰り返しながら、ベンチを立ち上つた。

『未組織大衆——へッ、支那も知らねえで、對支非干涉運動と來てやがらア。チャンチャラ可笑しいぢやねえか！』



## 2、デモに参加させられる

對支非干渉運動——は空気にあつた。世の中の大新聞や、帝國議會が騒ぐやうな問題ではなかつたが、それは誰が考へるとなく、貧乏人の間に根強い反對の形となつて流れてゐたものだ。それがはつきりした運動であつたかどうかはわからなかつたが、いつとも知れず、誰かがこつそり撒いて行く撒きビラや、電柱に貼つてある手札形のビラで、どこかにその抗争の激動してゐることがわかつた。

一三日経つて、就職口を探しに出た田中が、骨の折れた洋傘の間から、築地河岸の一本の電柱に、赤インキがにじんで、黒インキといつしよになりかけた『對支非干渉示威演說會』のポスターを發見した時に、咄嗟に思ひ出したのは、あの灰色な勞働服の青年のことであつた。

たしかに、あの二人は失業者田中に、高いところから脅しつけるやうなことを云つた。ありありと二人の氣持には、自分でビラを撒いてゐる組織運動者の矜持があつたのだ。その矜持は、組織運動者以外に、運動の喜びも痛快さも分たないための高い壁のやうなものであつた。そして、その壁の上か

ら、二人は、少しなりと支那に興味を持つた田中を、冷靜な言葉で擲擄つた。排斥した。

『どうも、俺にはわからねえ。……無産階級運動なら、無産階級運動らしく、なぜ俺等がものを訊ねていけないのか？——さうだ、彼奴等、書生つぼだからだ。學生だよ！』

かう考へながら歸つた彼も、無意識に、示威演說會の日取だけは覚えてゐた。

その晩になると、何かしらじつとしてゐられない氣持が、からだ中痒いものにたかられた時のやうに、彼をせき立てるのである。

場所は、本郷。佛教青年會館といふ——かういふ運動には何の關係もなささうな名前の會場だつた。田中は、六時の開會といふのに、公設食堂の時計を氣にしながら、六時少し前に、銀座から神田へ、神田から本郷へと、のろくさい電車にあせりながら現場へ馳けつけた。佛教などといふから、定めしお寺の隅にでもあるかと思つたら、電氣會社のやうな建物で、建物の前には夏服を冬服に着代へたばかりの多數の警官が、まるで警官の示威運動でもあるかのやうに、二重三重の列を作つて往來を見張つてゐた。警官の一人一人は、帽子の頰紐をしつかと頬の肉へ喰ひ込ませ、闇の中に寒い光を反射するサーベルは、白い紐で括りつけられてあつた。夕ぐれの、いつもの東京の街を通つて來た田



中には、そっだけ平常の社會生活から截り放された、非常警戒の區域のやうに思はれた。

『どうしたんだらう？』

田中は、何氣なく警官の列へ紛れ込んだ。

『演説會はないんですか？』

弾機仕掛けのやうにきつとふりむいた一人の警官は、田中の一生の悪事をすつかり見抜いてしまふやうな眼付で、帽子から靴までを二三度見上げ見下して、顔紐に縛られた口から、低い唸り聲をあけた。

『演説會——演説會がどうしたといふんだ？ 貴様、この演説會に關係があるのか？』

かう反問しながら、警官は、もう田中の上衣の襟を掴んでゐた。

『わしは、唯、聴きに來たばかりですよ。べつに、その——關係なんてありませんよ。電柱の貼り出しを見たんです。』

この際、田中の一番ひけ目を感じてゐたことは、すうつと以前に、誰かが自分の顔が或る主義者に似てゐると云つて、ハルピンの領事警察へ密告したので、ひどく刑事に小突きまはされたのを思ひ出

したことである。その嫌疑は、間もなく本國からの通譯で解かれたが、かうして警官と面接した時に同じ拷問が眼の前へ迫つて來さうな本能的な惧れが、何時も彼をそはそはさせた。——たしか、林幸作とか云つたのがその主義者の名前である。

そこへ、ほかの二人の警官が近づいて、いきなり彼れの肩へ手を置くと、鼓膜が裂けるほど大聲で叫んだ。

『會は、解散だッ！——用の無い奴は、うろろしてゐるな。ぐづぐづ云ふと檢束だッ！』

いよいよやられるのかと思つて、上衣の襟をどう振りほどいてやらうかと考へてゐた田中は、かう突きのめされるやうに云はれると、ほつとして頭をぺこんと下げた。

『解散でございますか？——始まらないうちから、解散になつたんでございますか？——』

逃げ腰で云つた彼れの手には、頭を下げる時脱いだ鳥打ちがぶら下つてゐた。一人の警官は、輕蔑したやうにその汚らしい鳥打ちの裏を眺めながら、もう一度聲を張り上げた。

『歸れ！』

田中の歩いて行つた方向に、これも會場から突彈ねられた連中と見えて、店の軒下や、停留場の



角などに、眼を光らした群集が、三々伍々肩をすほめて立ち並んでゐた。普通のラッシュ・アワーの  
通行人でないことは、會場の方を残り惜しげに瞞めながら、ほそほそ囁きあつてゐる様子でもわか  
つた。當ての外れた田中は、ほんやり交叉點の一角に立つた。

『不當解散だ！』

『成つちあ居ねえな。——いくら反動内閣だつて。』

二人の労働者らしい男が、田中とすれすれに立ち止まりながら、黒いラシヤ地にサーベルを光らし  
た、不穩な警官の群れを睨んでゐた。

『こんなことつて、あるもんでせうか？ 會を開いてからなら、解散も一應は聞えるが、馬鹿々々し  
いね……』

田中の言葉に、労働者の一人は、交番の方へ向つて唾を吐いた。

『馬鹿にしてやがらあ、まつたんだよ。』

そこへ、まだ執念ぶかく追跡して來た警官の一人が、白い手套の手を舉げると、唳鳴り立てた。  
『歩け、歩け！——往來に立つちやいかん！』

明かに電車を待つてゐる通行人と、演説會へ來た群集とは、この警官のどら聲で二つに分離させら  
れた。それは階級的な分裂とでも云ふべきであらう。動き出した群集を、崖端で馬に鞭打つやうに、  
あとからあとからと數を増した警官が、四方八方へ追跡し始めた。

『おい、一つに塊つて歩いちやいかんぞ！ 散れ、散れッ！』

『塊つてゐるけりあ、電車賃でも出してくれ！』

田中の側に歩いてゐた誰かがなり返した。それに、嘲笑が交つた。

『おい、司會者がやられた。』

『高山がやられたか……？』

『嘘だ、始めから解散を覺悟だつたので、奴、出て來ないんだよ。』

『馬鹿云ふな、會場の届出に行つて、そのままあけられたんだ。』

『ひどくいぢめやがるな！』

警官達は、大學の横手を北へ流れ出したこの一と群集を目がけて、どこか定まつた場所へ追ひ込  
まねばならぬといふ風にあとからあとからと押しこくつて來た。何の理由もなく右や左から、歩行を妨



害される一と塊まりの群集の間には、その嫌味つたらしい、馬鹿丁寧な干渉に對して、次第に反抗に似たやうな空氣が膨脹して來るのであつた。その空氣は、歩けば歩くほど一同の中に爆發力を強めた。ちよほちよほと黄ばんだ木の葉をつけてゐる銀杏の並木の下にさしかかると、群集の一人はまばらな枝蔭から向ふ側の灯を見やりながら、低い聲で隣りの男へ囁いた。

『デモだ！ デモをやらう！……』

『よし來た、デモだぞ！』

二人の囁きが、かれこれ三十人ほどの人間の間を傳はつて、田中の耳へはつきり落ちた時には、かういふ言葉に變つてゐた。

『おい、兄弟、腕を組め！』

田中の横の菜つ葉服は、對手にさういふ意志があるかないかを確めもせず、強制的に彼れの腕へハンマーのやうな固い筋肉を、がしつと嵌めこんだ。その筋肉の奥に、田中は青年の鐵筋のやうな骨を感じた。

『それッ、デモンストレーション！』

と、同時に、群集も警官も、萬遍なくばらばらと亂射するビラの襲撃に會つた。どうしてこの連中が、どこへどういふ風にこれほどのビラをしまつて置くのかが不思議に思はれたほど、ビラは走り出した田中の顔を掠めてはうしろへうしろへと吹飛んだ。その一枚を田中が片手で掴み取ると、うしろから押される力で、思はずひよろひよろと前のめりにつんのめつた。田中の頭は、したたかに前にゐる學生服の腰の蝶番をどやしつけた。

田中功は、はッとなつた。胸の中が熱苦しくて、肋骨に閉ぢこめられた内臓が今にも外へ破裂しさうな氣がした。步調を取り直した彼は、強い菜つ葉服の腕を右の手に感じて、熱苦しい興奮で眼頭と鼻柱が急に痛んで來るのをおほえた。

『デモだ！ デモだ！……』

田中は、涙ぐましい感情から、誰とも知れぬ菜つ葉服の左の腕を、永遠に離すまいと決心した。

『誰だ、ビラを撒いたのは？』

警官隊は、尖つた兇器のやうに、隊形を三角形に立て直して、横あひから楔になつて割り込まうとした。うす暗闇の中に、まつ黒い制服と、そうでない服装との、烈しい絡みあひが始まつた。掌で



殴る音がする。向ふ脛が、したたかに靴で蹴られる。踏みこたへる靴の音、板裏草履の裏。その上を息せき切つた聲が響き渡る。

「引っこ抜かれるな！」

「そら、押せ、押すんだ！」

「やれ、やれ、弾壓を蹴つ飛ばせ！」

腕と腕は、チエーン・アンカーの大鎖のやうに堅かつた。肩が外れるまでは、匍くまで膠着した團結の腕の力であつた。それを外づさうとしてあせる警官隊は、いたづらに群集を壁の方へ押しこくるだけに過ぎなかつた。押しこくられながら、三十餘人の鎖は、負傷してあばれ始めた闘牛のやうに、ずるずると警官隊を曳擦つて突進した。

ものゝ一町も進んだ頃には、もう敵も味方もはつきりしなくなつた。足下に空間が生じると、そこからは僻の悪い馬のやうな靴がむやみに空気を蹴つてゐるのが見えた。他人のからだと自分のからだとが、これほどに一つになることがないと思はれるほど、痛みも、打撃も、壓迫もそこには感じられなかつた。そして、複雑な暴力の交錯から、群集と警官隊とは、互ひにどちらを攻めるでもなく、敵

烈な暴動と暴動との中和状態で、せわしく息を喘ませながら、進んで行つた。

不意に、田中の頤の骨が外れるほど殴りつけた者がある。ベースボールのバットのやうな拳であつた。暫く殴られた局部は、鐵の扉を閉めたやうにびんと反響した。

「この野郎ッ！」

ふりむくと、田中の上半身に、懐中時計の蓋のやうにしがみついた警官が、蒼くなつて齒を喰ひしばつてゐるのであつた。

「引っこ抜かれちやいけないぞ！」

先頭に立つた一人は、がちやがちやサーベルを鳴らす警官を押しこくつて高らかに叫んだ。それに續いて、あとの幾人かは、わつしよ、わつしよと、彼のやうにすべてを凌つて押し出し、押し進んだ。

田中は警官の粗い髭を感じた。頤のあたりを、警官の金釦が妙な感覺で擦つた。制服の下から、荒い呼吸が感ぜられた。

突然、苦勞人である田中の頭のどこかに、

「可哀さうにな！」



といふ感じが起つた。

しかし、その感れみは、ほんの一瞬間の生命をしか持たなかつた。

次の瞬間、田中はコンクリートの壁へ、したゝかに上半身を叩きつけられたと思ふと、人間の意識も何もなくなくなつた材木の胴ころのやうに、鋪石を踏み外して、何やらの深い穴のどん底へ落つちてゐた。たしかに溝にちがひない。泥水はなかつたが、泥は膝のへんまで深かつた。それだけを感じただけで、次の瞬間には、腕を組んだままどさどさ自分の上へ落ちて来る他の群集を防がねばならなかつた。その間、忠實に、時計の蓋のやうにしがみついてゐる警官は、まだ田中を職務的な抱擁から解かうとはしなかつた。ひやりとしたサーベルが手に觸る。その觸覚は、電気仕掛のやうに田中を飛び上らせた。誰かのぐんにやりしたからだを、靴の底に感じた。そのからだから、氣味の悪い太い息が洩れた。田中は、洋服の裾をひつばる磁石のやうな強い力を感じた。磁石に抵抗するために、彼は十本の指の爪が剥けるほど土を掻き、泥を掻いた。最後に、何物かをしたたかに蹴つ飛ばした力で、機械體操の場合のやうに、ひよいと地平線の明るみへ上半身を浮かした。それを、あはてて逃すまいとして、一人の洋服が上からのしかかつて來た。殆ど同時に、猛烈な勢ひで田中は、その男をめぐけて

横飛びに全身を投げ出した。突き出した田中の左足が横杆となつて、洋服はまつ逆様に穴へ落つちた。

やつと路面に足を踏み出した彼は、彈ね飛ばされる覺悟で、今、疾驅して來る電車の間ほど手前を、蠅のやうにけし飛んだ。凄まじい突風で、電車は彼を吸ひこみさうにしながらゴーツと背後を擦過した。間もなく露店の賑かな、狭い赤門前の向ふ通りを、田中は大意をついて人混みの中に立つてゐる自分を見出した。

燕樂軒の横丁まで來ると、始めて自分の洋服の片袖が引き裂いてあり、ズボンの方々に生々しい泥の附いてゐるのがわかつた。彼は、通行人に氣づかれないやうに、陰影の中に立つて、臆病たらしく大學の方をふりかへつた。もうそこからは、格闘の場所は見えなかつた。

『評議會の連中だつてね?』

『對支非干涉運動の演說會が解散されて、さつきもするぶん檢束されて行つたんだ。……凄まじかつたぜ。』

角に立つてゐる學生らしいのが、二三人でそんなことを話してゐた。



田中は、街角の交番を思ひ出して、燕樂軒の坂を、傾斜に運ばれるやうに、くたくたと降りて行つた。

が、突然、彼は坂の途中で踏み留つた。

「喰らひ込んだつて、どうするツて云ふんだ。——お前、臆病だな！」

今度はわざわざ交番前をすりぬけ、その向ひ側の交叉點へ立つて、電車を待つた。

しきりに往來を睨みながら電話を掛けてゐた交番の警官は、田中の泥まみれな姿に眼を留めると、ひよいと受話機を離れかけたものの、折から地響を打つてやつて來た電車に、一瞬間からみ合つた二人の視線は遮斷されて、それつきり、ものわかれとなつてしまつた。が、實際のところ、田中は大急ぎで、間違つた電車に飛び乗つてゐたのである！

その晩、田中功は、いつものとほり銀座へひやかしに出たであらうか？……

### 3、不思議な旅客

「君は、林君ぢやないかね？——」

何氣なくCデツキから午後の海を眺めてゐると、見も知らぬ男が背後からかう呼びかけるのであつた。

聲は、殆んで囁きにちかゝつた。びつくりしてふりかへつた田中の眼の前に、黒い太枠の眼鏡をかけた、顎の角ばつた、始終齒がみをしてゐるやうな顔の男が、穴のあくほど自分の顔を覗めてゐるのである。

「わしは、そんなものぢやありませんよ。人違ひだね。」

かうきつぱりはねつけると、對手は急に狼狽へて、きつく結んだ唇を辯解的な笑ひにほぐした。

「や、さうでしたか？ これは、どうも、私の知人の林といふ男によく似ていらつしやるものですか。どうも失禮いたしました。——支那も、内地とちがひましてこれからは大部寒くなるでせうな？」  
「う、その——わしは、支那のことはちつとも知りませんよ。上海の新聞社にゐる友達に呼び出されてましてね、内地にござるしてゐるよりは、雜貨店の口が空いてるからやつて來ないかと云はれたもので、——實は始めての旅行なんです。」



これだけを、へどもどした口調で云ひのがれたのが、田中の精一杯であつた。

何やらまだ對手が話しかけるのを振りきつて、彼は、そのままあたふたと二等船室へ駆けこんだ。田中の生涯で、林といふ主義者に間違へられたのが、これで二度目である。黒枠眼鏡の男も、つつきり自分が林幸作だと思ひこんでしまつたのだ。一體自分はどこがそんなにその男に似てゐるんだらう？：一度、ハルピンの領事館警察で、高等係に突きつけられた寫眞、それには、長髪の、骨のがつしりした、あまりからだの均衡のとれてゐなさうな、自分の同年輩ぐらゐの男の上半身が出てゐた。どこが自分と似てゐると云つて、一つ一つをとつて見れば、顔の道具立のどれにも似たところがありさうにもなかつたのだが、寫眞が眼の前からなくなつて、また薄暗い獨房の中に、雨もやうの空を鐵格子の向ふに眺めてゐる時に始めてわかつたのが、きつとその男の横顔と、からだの輪廓全體に似たところがあるのだらう、ひよつとしたら、後ろ姿などが似てゐるのではないかといふ懸念であつた。：：いい加減に忘れてもよからうと思つてゐたことが、今又いかにも主義者仲間みたいな口調で近寄つたあの男に、しかも、支那へ行く途中でかう耳許へ囁かれたのだ。

田中は、急いでもぐり込んだ自分のベッドに、考へれば考へるほど後頭部が熱して來るのを怵へな

がら、誰にも顔を見せまいとして、ボーイから借りた怪しげな蒲團を額まで引つ被つた。

蒲團の下で、鐵の棒でもあるかのやうに、一つの言葉が間斷なく彼れの腦髓を擲きつけてゐた。

「俺にはスパイが尾いてゐる！——俺にはスパイが尾いてゐる！——俺にはスパイが尾いてゐる！……」

飯時が來た。田中は、そつと蒲團を撥ねのけて、大勢の客が、がやがや長崎辯で話し合ひながら、いろいろな食器の物音を立てて、騒々しい飯を終るまで様子を見計らつて見た。

「あの眼鏡は三等にゐるのかな、それとも、ああいふスパイに限つて、どこか特別な室にゐるのかな？——いや、旅客に化けこんでゐるスパイなんだから、公然と俺は内地の何々警察署の高等係だなどと云ふ筈はない——それにしても、あん畜生、どこにゐやがるんだらう？」

食事があらかた濟みかけた頃、彼はそろそろとベッドを下りて、ぐるりとそのへんをひとわたり見廻はした。始め、大きい輪を描いた彼れの視線は、ひとわたり室内の寢床といふ寢床を眺め終つた時その輪の結目に當る左手の隅のベッドにびたりと止まると、そこで撥ねかへされたやうに別な方を見なければならなかつた。



居た！

何かの大きい實業雑誌を讀むふりをしながら、眼鏡は、陰險に上は眼づかひをして、田中の様子を覗つてゐたのである。

「糞ッ！ どこまで圖々しい野郎だらう！」

背後から、今にも筋だらけの腕が伸びて、ぐいと彼れの肩が掴まれさうな氣がしたのだ。食つてゐる飯もそこそこにして、あたふたとデッキへ驅けあがつた。

「どうしたらいいんだらう？」

海は、まだ薄明るかつた。

食堂と料理部との間を、忙しさうに、白い服を着たボーイ達や、金釦の黒い服の役人などが、一々重い扉をびしんびしん閉めながら、出たり入ったりしてゐた。たまにコックの見習ひみたいな薄汚いエプロンを掛けた青年が、食物の残り滓を、バケツから海の上へ叩きこんだ。それを、寧波人らしい支那人の一團が、がやがや云ひあひながら、惜しさうに水面を見下してゐた。軽いしぶきが、横なぐりの雨のやうにかかつて來て、甲板は、大きな幻覺でもあるかのやうに、總體で右と左へうねりを打

つてゐた。

自分の北清地方で覺えた支那語を、ものの試しにこの南方人達へ應用して見ようと思つて近づいた

田中は、

「おい——」

と片手を舉げかけて、急にびつくりして口を噤ぢた。

艙口から、又黒枠眼鏡が覗いてゐるのだ。

田中は、忌々しくなつて欄干からベツと唾を吐いた。しぶきがかかる。秋から冬へかけての、これからの支那の生活が、陰慘な戦場の跡のやうに、たまらなく淋しい景色となつて頭に浮んだ。——彼は、一時の興奮から、そして病みつきの放浪癖から、再び内地を棄てて、殆ど當て途もない旅に出た自分を、つくづく後悔し始めた。内地にゐたら、たとへそれが屑拾ひでも、田舎から田舎へ乞食をして歩いて、自由労働者の多い本所深川あたりで立ん坊をしてなりと、何とか食ひつなぎぐらゐるは出來たにちがひない。……

「いや、先刻は失禮しました。——支那はお始めてでいらつしやいますか？」



田中は、ぞつとした。その堅い歯で食いちぎつたやうな言葉を聞くと、もうそれだけで澤山であつた。彼はべつにふりむきもせず、唸るやうに答へた。

「新聞ですよ、新聞記者をやつてるのが友達なんです。」

對手は圖々しくも葉巻を出して、その尖端を噛みちぎつた。何でも噛みちぎりさうな悍猛な歯並みが電燈の下にきらりとした。

「新聞とおつしやると?——」

田中は、思ひ切つて向き直ると、その男がマッチをともして、強く煙を吸ひ込むのを苛々した眼元で睨めた。

「どの新聞だつていいぢやないか!」

思はずかう唳鳴り立てようとした彼も、やつとその男の背後にある力を思ひ出して、最後の自制心を働かした。——ハルピンでの、角鉛筆を指の股に挟み込まれたり、髪を握つて床へ投げつけられたりした、十日間の死ぬほどの拷問を、忘れてしまふには、あまりに傷がなまなましかつた。

「上海新報つてえのでさあ。うまい仕事口があるかどうかかわかりませんがね、何しろ来いと云つて来

たもんだから——」

「内地とちがつて働くのは樂でせうよ。私等は、ちよつと變つた商賣なものですから、立入つてあちらの日本人の方とは深く御交際しませんのですが、見たところ日本人相手の御商賣の方は樂でせう。内地の店とあんまり違はないやうです。」

かう云つて、何やら底氣味悪く笑ひながら、眼鏡は二三歩フォア・キャツスルの方へ歩み出した。それをしほに、田中はのろのろと船口の方へとつて返し、急いで階段を下りると、何氣ない風に眼鏡のベッドの前へ立停まつて、その手荷物類へ捜ぐるやうな眼を潜らせた。季節ものらしい松茸の籠が二つ、上の寢床の柱へ括りつけてある手鞆には「山陽ホテル」のレッテルが一枚貼られてあつた。寢床の上には、読みさしの『實業之日本』が、主人の代りに伏せてあつた。外套や、靴など、通り一遍の旅客らしく無雑作にそのへんに散亂してゐる。

『悪ろくしたら、彼奴、刑事ぢやないかもしれないぞ。……しかし、待てよ、俺を林といふ男と名指して来るからには、警察の者のほかはない筈だ。すると、彼奴、よほど上手く化けたつもりでゐやがるんだな。』



自分の寢床へ歸つた田中は、ごろりと寢轉びながら、それでも左の方を向いて、蒲團の下から眼鏡が歸つて來てどんな事をするかを油断なく見戊つた。

翌る日も同じことだつた。

ただ、その晝飯に特別な料理を注文したかして、ボーイが眼鏡のところへ洋食を運んで來た時、

「岡部さん。」

と呼んだのを、田中はひよつくり小耳に挟んだのであつた。

「岡部さん」と田中功とは、その日一日、甲板や食堂、船尾の狭い遊歩場や、通路の間などで、體のいい隠れん坊をして暮らした。一方が散歩に出ると、片方は急に船室へ引込した。あまり長く一方を船室に留めて置くことが危険に感ぜられるので、時折引返して見れば、對手が自分の持物を調べてるのぢやないかと思つて、用も無いのに寢床へ立ち歸つた。双方とも、互ひの顔を見ないでゐても、それとなく各自の行動を警戒してゐた。あまり物音が無いので、不審になつて顔を上げると、對手の眼が自分の上に釘付けにされてゐるのを見て、はつとして顔をそむけた。見てゐる方も、その時は、氣まり悪るけにからだを急に動かしてみたり、急いで蜜柑を剥いたりするのである。しかし、その日

は、二人とも一言も交へずに終つた。

風が出て、支那の海へかかつた汽船は、一と晩がぶり通しで進んだ。

翌る朝になると、船客は、重苦しい灰色の曇天の下に、獸の皮のやうな黄色い楊子江沖の海を、船の周圍に發見した。船が進むにつれて、かすかながら水と同じ色の粘土質の河岸が、うつすりと水平線に現はれた。——支那。

まつ黒い、油紙のやうな帆を張つたジャンクが、幾度も汽船と擦れちがつて沖の方へ走つて行つた。船のあほりで、その古風なジャンクに乗つた支那人は、手を振り、大聲をあげて楫の柄に縋つた。ぶくぶくの青い綿入布子を着て、辮髪を頭のまはりに巻いてゐる。近海の漁夫達である。

「やつてるな！——支那は、やつぱり變らないや。」

田中は、甲板の右へ出たり左へ行つたりして、ジャンクの一つひとつを珍しいもののやうに眺めた。ここ三月ばかり日本にゐたことが、支那人の姿をすっかり懐しくしてしまつたのである。やはり、一度支那へ行つた人間は、一度で支那を思ひ切るわけには行かないのかも知れない。

「たうとう着きましたな。」



外套の襟を立てた眼鏡が、以前と同じやうな葉巻を喫ひながら、不意に背後から呼びかけた。

「これが——もう着いたのですかね？」

「え、あれが吳淞の砲臺でしてね。あそこへ来りあ、もう上海へ着いたも同然ですよ。」

鹿爪らしく葉巻の尖端で指さした個所には、拳を突き出したやうな赤裸の陸地がほんやりしてゐた。

その途端に、眼鏡は一枚の名刺を取り出して、田中の手の甲の上へ置いた。

「私は、かういふ者ですが。」

さし出された名刺には「岡部要之介」と洒落れた支那字で刷つてあつて、そのわきに、小さな活字で「上海、北四川路、日華洋行」と書き添えてあつた。

「いろいろお邪魔しました。船の上のお交際は、えてそれぎりで終り勝ちなものです。まあ、これを御縁に、上陸したらお遊びにおいでなさい。——私の店は、支那人と合辨でやつてますので、時どき内地へ仕入に行くぐらゐが私の役目でしてね、あとは季節々々の競馬や競犬の賭けをやりに来るぐらゐなものですよ。」

「御商賣なのですか？ わつしは、又、何か別な方面の御方かと思つて居りましたが。別に名刺だなんてものは持つたことのない性分ですから、戴いてだけ置きます。——」かう云つて、田中は、もう一歩進んで、こちらから積極的に出てやらうと考へた。「失禮ですが、御商賣は何ですか？」

「商賣ですか——別に商賣と云ふほどのものぢやありませんよ。まあ、来てごらんになればわかります。支那人對手のごまくわし商ひですよ。……」

目的地への距離が、一秒づつ縮まつて行くことは、船客の間の騒ぎと動きとでわかつた。殊に、久し振りで歸國するらしい支那人の一團と來たら、まるで半狂ひのやうだつた。

船室へ戻つて、小さなズツクの靴へ持物一切を詰め込むと、今まで徐航してゐた船が、ぴたりと船脚を留めて、頭の上では、圖太い汽笛が、船體全部を揺つて鳴り響いた。がらがらとウインチの鎖が鳴る。甲板の靴音が、不穏な騒動でも持ち上がったやうに、聚まつては急に散らばつた。舷窓の外では、女の穿く靴のやうなサンパンを操つた埠頭の労働者が、巨船をめぐけて不意の夜襲でもあるかのやうにむらがつて來た。苦しきやうな音を立てて、ギアング・プラングが釣りおろされる。ドンキー・ボイラーの音。水夫の合圖。苦力の支那語。……



船客は、總立ちになつて、二晝夜の寢室を土足に蹴つた。一旦着陸してしまへば、船はこの人達には、何の意味もない箱に過ぎないのだ。

田中も、こつそり人に紛れて、三等の降り口へ歩いて行つた。

汽船の煽りを喰つて、朱の剥けたサンバンが、木片のやうに波に揉みたくられてゐる。河岸に植ゑつけられた無数の工場の煤煙と、港内の軍艦と汽船から吐き出される煤煙が縋ひまじつて、港一面の空は黒い幕のやうに、穢れて、憂鬱に動揺してゐた。

上海だ。

田中は、是が非でもこゝでスパイをまかなければ、その機会が来ないものだと思つて取つた。棧橋では出迎への群集が、黒い縞を織りながら下船の時刻が待ちきれずに、甲板の方へ手をあけたり、ハンカチを振つたりして、センチメンタルな聲をあけてゐた。

すると不意に、人達の雑沓に押されてゐた田中は、自分のうしろに動物的な唸り聲と、煙脂臭い煙草の臭ひを嗅いだ。同時に、叫び聲の持主は、ひよいと猿臂を伸ばして、彼れの片腕を引捕へた。

『どうです、私といつしよに下船ませんか？——』

来た。

最後の来るべき瞬間が、たうとうやつて来たのだ。

『領事館へ御出でなんでしょうか？』

田中は、満腔の勇氣を絞つて、まつ赤な顔を岡部某へ振り向けた。

眼鏡はぎくりとして、田中の眼の色をうかがつた。鳶色の二重瞳の、柔和な眼ではあつたが、この際、その瞳の芯は、非常な決意に近づく恐怖で微顫してゐた。

『領事館に用はありませんよ。貴方の御出になる北四川路へです。上海新報は、北四川路と、魏盛里の角をすこし這入つた處にある筈です。』

田中は、腹立ちまぎれに、岡部の腕を力づくで引はづした。

『どうも、あんたはしつこい人だね。この俺に用があるならあるで、はつきり云つたらいいぢやないか！俺アそんなに淫賣みたいにひつつかれるの嫌だ！』

眼鏡の口には、鏝の外れたやうな笑ひがあつた。しかし、同じ唇から出た聲は隠険に、低かつた。

『心配はいらんよ。僕は警察のもんぢやないんだからな、林幸作君！』



田中は、あつけらかなとして、相手の威かつい顔を打戔つた。

その一瞬間の際に、三等旅客のギヤング・ウエイが開いて、雪崩れのやうな群集が、埠頭をめぐりて動き出した。

ぴかりと閃めく警察の金釦を俯瞰しながら、岡部は田中の腕をぐつと握つて、大股に降りはじめた。――

#### 4、逃げさせられる

雨になつた。

二臺の人力車は、型ばかりの幌をおろして、ごろた石の上を、ボールのやうに弾みながら走つた。幌は破れたゴム靴のやうにほころびて、遠慮なく乗客を濡らした。

幌の裂け目から、田中は、先頭に立つた不思議な男の車をじつと見据ゑた。街は、汚い支那壁に添ふて、幾つもの曲がりくねつた。

『あの野郎、俺をどこへ連れて行くつもりかな？――林幸作君！すこし、可怪しいな。こりや、ひ

よつとしたら、ほんとに俺を林だと思ひ込んでる主義者かも知れないぞ！』

俄かに氣づいた彼は、我知らず車の蹴込みに兩足を突張つた。

雨の下から、車を曳いてゐた車夫の眼が、何かの合圖をあたへられでもしたかのやうに、ぎよろりと客の方へ振りかへつた。

『さうだ。逃げる！』

心に定めた田中は、幌の裂け目から指を曲けて、横丁の狭い通りを差した。

『この町だ。中國館店へ急げ！』

『ホウ、ホウ！』

車夫は、素足の窪みを見せながら、楯棒を急角度に捻ぢ曲けた。

『あんなのといつしよに行つたら、どんなことになるか知れたもんぢやありやしない！』

車の中で、田中は、かう自分の氣持を合理化して考へた。

對支非干涉運動！――あの本郷での揉み合ひを考へただけでも、被はぞつとしたのである。やる當



人達は、真剣で、昂奮してやつてるものでも、まだその運動に這入つてゐないものにとつては一緒に昂奮して騒ぐわけには行かないのだ。——第一に、失業者田中は、めしを食はないと飢ゑたのだ。

車夫はがむしやりに走つた。町角ではぐれた前の車は、恐らく人混みに見失つて、どこかに紛れたものと思つて、今頃は、北四路とかへ正直に走りつづけてゐるものにちがひない。

兩側の家並は、この狭い支那町では、鬱蒼としたトンネルのやうに鋪石の上へしなだれかかつてゐた。人間の生き血をぶつつけたやうな大看板や、廂や、店の抽出などが、煤けた、古代からの壁の間から、威嚇するやうに視線を吸ひ込んだ。文字、文字、文字——何を見ても、支那人の生命である文字が、その上に烈しい筆の力で跳つてゐた。

暴力的な赤と、眼の痛む文字とが、ぷーんと線香の匂ひのする空間を、どこまでもどこまでも、はてしなくつゞいた。終ひに、この死のやうな單調さに、田中は堪えきれなくなつた。

「おい！」

どしんと車臺を蹴飛ばすと、車夫は、素足の踵を馬のやうに突張つた。

「幌を取れ！」

「ホウ、ホウ！」

車夫は、にやりとして又駈け出した。

「畜生ッ、俺の支那語がわからねえのか？」

田中は、幌の骨組を、破獄人のやうに揺すぶつた。ど、ど、ど、と、車がもう一度立停まつた。

「幌を取れ！ わからねえのか？——よし、車は要らん！ おろせ！」

「ホウ、ホウ！ 東洋人！」

無理解そのものである車包夫は、愚鈍な笑ひを含んで再び走り出した。

「ちよッ！」

田中は、舌打して、ポケットから、バットを取り出した。

不圖、妙な不安が胸の中へ湧いた。

「おい、降ろせ！ 降ろせぞ！」

「ホウ、ホウ。——今、すぐだよ。」

「澤山だ、降ろる。」



『もうすぐだ。』

車は、ブレーキの利かなくなつた機械のやうに、なほも走りつゞけた。健康そな支那人の足の裏を、田中は怒りに燃えた眼でじつと見据ゑた。

『この苦力め、どうしてやるか？』

咄嗟に彼は、バットの火を布製の幌の裂け目へ押しあてた。この即妙な工事は、怪しげな町を、車が氣狂ひのやうにぐるぐる廻りをしてゐる間、五六度マッチを摺りなほしながらつづけられた。幌がふすふすと燻り出する。田中は仰山な悲鳴を擧げた。

『火だ！』

河岸つづきの、むさぐるしい場末であつた。河には、ゴミのやうなジャンクやサンパンが、雨に打たれながら、びしょびしょ水の上をうろついていた。まつ黒い、眼ばかり光つた男達や、口を大きく開いた女達や、野良犬そっくりな餓鬼どもが、小さな屋臺店を圍んで、わめき散らしてゐた。

車夫は、車に異状があると見て取ると、びたりと轆を地端へおろした。

『火！——この東洋鬼！』

もう、田中の逃げ場はなかつた。

濡れた骨太な拳が、引剥ぐやうに幌を除けると、いきなり田中の洋服の襟へ突込まれた。彼は、意氣地なくも、石の上へ引降ろされて、雄辯に車夫が幌のちよつとした焼け痕を指摘しながら、周囲の無頼漢どもに訴へてゐるのを、蒼くなつて聽いてゐる外はなかつた。しまひに、車夫は、そのステッキの尖端のやうな二本指を、田中の眼球へ突刺しさうに思へるほど鋭く運んで来て、かう云つた。

『手前はべらべらと北方訛りを喋べりやがるがほんたうの東洋人か？……』

田中は齒の根も合はずに、がたがた震えながら答へた。

『日本人……』

『うわ、——高麗人だつて？』

どう聞き違へたのか、對手はほいと田中の眼先から指を引くと、ぐるりの苦力達に呶鳴つた。

『おい、おい。みんな、こいつは朝鮮人だぞ！』

『何んだ。さうか、朝鮮人なら勸辨してやれ。俺達の仲間だ……』

『さうだ。仕方がない。東洋鬼の野郎だつたら、決して許すんぢやないが、朝鮮人なら勸辨してやら



う。……だが、一元だけは置いて行くが、い。」

かう、無頼漢のうちの大男が云つた。

田中は彼等に氣どられないやうに、こつそりズボンのポケットから一圓紙幣を一枚掴み出して、垢だらけな車夫の手に握らせた。對手は怪しげに、紙幣を見守つてゐるが、大男が何かを説明すると赤銅色の獐猛な顔を崩して笑つた。

何やら、一群の間には、東洋人と高麗人との喧しい議論があつたが、追はれたら生命を捨てるまでは駈けるつもりで、田中がひと足そこを遠退くと、べつに追ひ駈ける風もなかつたので、彼はそのまま朝鮮人になりすまして、突當りの倉庫の横から埠頭の通りへ出た。車を降りて今は河岸がすつかり塞がつて見えないほど苦力の群が、霧のやうな埃を立て、セメントの荷積をしてゐる。港一杯が何かの大工場のやうな喧騒な音響に包まれて、穀物や、鹽や、石炭、材木、青物類の物凄い氾濫をめぐけて忙しく立ち働く群集が、口々に何かを叫んだり、走つたり、群がつたり、まるで暴動のやうな光景を見せてゐる。

田中は悪車夫の強迫からは危く遁がれたが、今度はこの物凄い群集からどうして遁がれ出るかに迷つた。スーツ・ケースをさけてブラブラ歩いて行けば、また執拗く人力車からつき纏はれて、同じ結果を見なければならぬ。うつかり埠頭を歩いて行つて、あの物凄い苦力の群に掴まつたら最後、どんなことになるか知れたものではない。

彼はいろいろと考へたはてに、すぐ眼の前を走つてゐる電車に飛び乗つて、危険区域から脱走することにした。電車なら安全だ。「革商電車」とある。

車掌からは、共同租界へ出る順路を教はつて、城内の新橋街といふので北砧停車場行きに乗換へた。またその電車では、北京語のありつたけを使つて、安あがりな支那人旅館を聞き込み、さんさんまだるつこい手数と時間を費して、やつと最後に見つけたのが、湖北路とある小路で世にもうす汚い「馬孟飯店」であつた。

上海の地理に不案内の人間が、支那宿へ泊まるのは大膽な冒険だと考へたが、日本人旅館に行けばそれ以上に大きい危険があつたので、思ひ切つて、その帳面へ「朝鮮人、金中功」といふ各前を記した。

年のとつた狸そつくりの小柄な番頭が、田中の慌しい様子をみて、阿片でただれた兩眼をラムネ



の玉のやうに睜つて、怪訝さうに瞶めてゐるが、やがて皺の多い微笑を見せると、  
『いらつしやい。』

と忘れたやうな胴馬聲で叫んだ。

5 淫賣の宿

田中の導かれた部屋は、支那式の寢房になつてゐて、見かけよりも綺麗な部屋だつた。

淡紅色の帳のついた寢臺の前に、茶用のテーブルがあり、部屋の隅には西洋式の洗面器が取りつけ  
てあつた。

『少し贅澤だ、高いかな？』すぐと金の不安が生じたが、それよりも當面のからだの疲れ切つた彼は  
いきなり寢臺の上へ靴といつしよに頭を投げつけた。しばらくほんやりと天井を瞶めながら、日本を  
出てから起つた異常な出来事を考へて見る。

何れも馬鹿け切つた事件である。殊に朦朧の黄包車から嚇かされて、一圓ふんだくられたへまさ加  
減に到つては我ながら呆れ返つた醜體だ。彼は口惜しいやら、情けないやらで、熱病患者のやうに  
熱くなつたり冷めなくなつたりした。しかしあの時、運よく朝鮮人に間違へられて助かつたのは生命  
拾ひだが、何故支那人がかうも日本人にむかつて敵意を抱いてゐるのか、それが不思議でならなかつ  
た。一應は支那革命から刺戟された何かの思想の現はれたとも考へられるが、何にせ先方は愚鈍な苦  
力共である。あいつ等がそんな思想によつて煽動される譯もなければ、またあれほど引きつり廻はさ  
れた市街の何處にも、格別それと目立つやうな支那流のボーコットも流行つてゐるとは受取れなかつ  
た。

すこし経つと、ボーイが茶を運んで来て、一日の宿泊料を請求した。一泊食事なしの一元半である。  
食堂も浴場もこの旅館に設備されてゐるが、それはそれで宿泊料とは別に金を取られる。内地では想  
像もされない不便な制度であるが、結局金のない旅客には宿泊だけで、食事を外でやれば必要以上に  
金がかゝらない便利がある。田中は、日本から使ひ残しの十圓紙幣を三枚だけ見せて、しまひに兩替  
屋のことを云つて、待つてくれと頼んだ。

ボーイがやつと納得して立ち上がると、その白い上衣と入りかはりに、肩をすほめた顔の三角な女



がドアに半身を挟んで、色つほい眼付をしながら口唇を鳴らした。よれよれになつた桃色のあさましい褂子が、見る者の陰惨な氣持を刺戟した。田中は飲んでゐた茶をいきなり床の上へ抛り出すと、起ちあがつて行つた。女の身體を荒々しく突き出した。

「不要！」

女はくすんだ笑ひ顔を見せて、胸元をすこしひろけながら、ぎんぎん仔犬のやうな聲を絞つた。田中は、やたらに頭を左右に振つて、へしやけた鼻先へドアをびしんと閉めきつた。

「うるせえな！ 蹴飛ばすぞ、野鷄め！」

彼は、せせら笑ひながら、ドアの鍵をぐいと廻はした。

洗面器に湯を張つて、汗みづくになつた顔や首筋を拭いてゐる間も、しきりに數人の女らしい拳がかはるがはるドアをノックするのを聞いたが、その都度、

「這入れるもんなら、這入つて見ろよ、おたんちん！」

といふ、擲擲半分の日本語が、そこから洩れるだけであつた。

氣持ちのさつぱりした彼は、やがて、ズツクの袋を携けて、もう一度帳場へ下りて行つた。逃けら

れでもするかと思つて、廊下附のボーイは、彼れのあとから、支那靴の音を忍ばせて、ついて來るのである。

狸のやうな老人が、又眼を睜つて怪訝さうに「高麗人」を瞞めた時、その金中功は、

「錢莊！」

と叫んで、日本紙幣を見せると、ズツクの鞆を老人の手元へ押し遣つた。

狸は、骨つほい手に鞆をちよつと持ち上げて見て、無言で頷いた。

そこを出かかると、白い上衣のボーイが、あわてて腕を攔んだ。

「You.—Come backie ?」

英語である。さすがは、何と云つても上海だ。

「Yes—yes !」

田中はやつとこれだけ答へて、漸く行き來するほかの旅客の間を潜り抜けると、廣ろい電車道の方へ切れる、旅館の小路を逃けるやうに飛び出した。

小便臭い小路に、洗濯盤を出して、濡れるのも平氣で赤ん坊の黄ろい襁褓を洗つてゐる女がある。



鼻を塞いでそこを切り抜けると、大道の角に、一軒の兩替屋があつた。

田中は、要領深く周囲に氣を配つたが、誰も彼を見てゐるらしいものがないので、店先へつかつかと入つた。眞鍮の格子をまはした臺のうしろには、黒光りの金庫に凭れて、鳥の嘴のやうにのびた指で、鼻毛を抜きながら、一人の番頭が掛けてゐた。錢莊は、煙草屋をもちねた。

『これをくれ！』

田中は、斷髪の支那美人を描いた五十本入のシガレットを、帳場越しに指さした。

『これか？』

象牙細工のやうにつるつるした額越しに、人の悪るさうな眼をあけて客を見た番頭は、『スリー・キヤッスル』の緑色の罐を指さした。

『それぢやない、これだ。』

『美麗——か？』

棄てるやうに煙草の罐を客の前へ投げ出した支那人は、それでもまだ商品から何かの嘴のやうな指を放さないで、片手で金を受取る準備をしてゐた。客は、ポケットをもごもごさせながら、煙草

の棚の上にある塗板の太平洋相場を讀むふりをした。かうして置けば、先方に間違ひを起させないだけの手續きを踏んだも同然である。「小角」何の某などといふ相場は、時の銀の上り下りできめてあるので、いきなり日本から驅けこんだ素人には、どのぐらゐの利率であるかがわかる筈のものではない。

田中は、もの慣れた手つきで、無雑作に一枚の武内宿禰を投げ出した。

番頭は、モヒ患者が注射をうけたやうに、急に活氣ついて、一枚の紙幣を三度裏返しして見たり、マークを透かしたり、最後はばんばんと長い爪の先で弾いてみたりして、それに満足すると、從容迫らざる態度で、金庫の上の木箱から封をした洋銀の棒を取り出すと、ざくりと二つに割つて、その一枚一枚を、三度掌に數へながら、ざくりと疵だらけな帳場の板の上へ投げ出した。續いて、片わきの小箱から、小洋銀貨と、五六十枚の銅幣とを、印度人がカリー・ライスを食ふやうな手つきで揃へて、そのすべてを、損をしたやうな顔をして客の前へ羅列した。——總體で、ものの一貫目もありさうなお剰金である。どこで、誰がかういふ相場を操つて、一枚の紙片と、これだけの銀や銅の塊を取り換へる仕組みになつてゐるかわからなかつたが、正直な田中にとつては、ひどく儲けたやうな氣持になつたのである。年來の習慣から、彼は太平洋の一枚一枚を取り上げて、左の指先にバランス



しながら、右の手の一枚で、ちりりん——ちりんと鳴らして見た。かうするのが、錢莊での儀式で、かうしなかつたら、時に飛んでもない鉛の一元を掴ませられることもあるのだ。

いかにも、支那へ来たやうな氣持である。

重い貨幣でポケットを膨らますと、田中は煙草に火をつけて、頗るいい氣持ちさうに店先を離れた。

その鼻先へ、十本ほどの人間の掌がぬーつと突き出された。

それは、このみすほらしい日本の失業者が、大人のやうな氣持ちで、紙幣と貨幣を交換した一部始終を見成つてゐた乞食の群れである。

「……東洋人！」

十本の手は、口々に人間として最も悲しい場合の悲鳴をあげながら、どうして田中のポケットから出来る限りの貨幣を切り離さうと苦悶するやうに、烈しく眼の前で揺り動かされた。

「やい、乞食め！ しようねえ奴らだな、退け！」

大洋の持主は、眼を瞋らして、乞食の知らない言葉で嘔鳴りちらした。しかし、その言葉のわから

ない十本の手持主達は、やはり對手にもわからぬ悲鳴をあげながら、どこまでも追ひ縋がらうとする意志を表現して、田中の旅館の小路の角へ出るまで、ぞろぞろとつながり合つて尾いて来た。かうなると、給料を拂はない兵隊を連れた將軍のやうなもので、恥しくてその上一步もあるけるものではなかつた。むしやくしやした田中は、ぶつと煙草の吸ひ差しを吐き出して、ポケットへ手をつつこんだと思ふと、いきなり二三十枚の銅幣を引き摺むや、無軌道電車の走つて居るサイドウォークをめがけて、ばらばらと小石のやうにばら撒いた。

何かの掛け聲が發せられたと思ふと、今まで尾いて来た乞食のほかに、そのへんに油を賣つてゐた奴らが加つて、かれこれ十五六人の乞食達が、一齊に電車道へ獵犬のやうに驅け出した。一個の銅幣を拾ふごとに、彼等は動物的な唸り聲をあけた。街の人達は、何事が起つたかと思つて、店から飛び出すと、乞食と田中を見比べながら、わんわん喚きたてた。

自動車が止まる。恐しい勢ひで走つて来た電車が、怪たたましいベルを鳴らすと、しようことなしに、乞食の一人の前でブレーキをかける。印度人の警官が、棍棒を持つて驅けて来る。十五六臺の人力車が、物好きに車を止めて、不思議な競争を見物する。支那人の警官がやつて来る。



——田中は、ぞつと寒氣を感じた。

『しまつた！ 見つかつたら大變だ。』

彼は、あたふたと見物人の間を縫つて、横手の小路へ切れこんだ。

『俺といふ奴は——なんて、へまな野郎だらうな！』

旅館の玄關から、そつと背後をふりかへつて、幸ひ誰も追跡して來ないのを見ると、ほつとしなが

らも、彼は唇を噛みながらかう考へた。

約束通り宿料を拂ふと、ズツクの鞆を受取つて、帳場の横にある電話を借り受けた。

『ノース・スリー・ノー・ファイブ・ツー——上海新報社ですか？ 大友つてえ男がゐる筈ですが、ちよ

つと出していただけませんか？……』

大友が出て來た。

二三語押問答があつたあけく、大友記者は、やつと電話の主がわかつたらしく、鼓膜へはねかへる

ほどのきんきら聲で笑つた。田中には、いかにも支那浪人らしく、まだ三十になりもせぬ彼が、いか

めしい關羽髯を生やして、年中帽子を被らないで歩いてゐる姿を、電話線の向ふにはつきりと見受け

たやうな氣持ちがした。

『よろしい、行つてやる。湖北路の馬孟飯店だな？——悪い事をしないで、おとなしく待つとれ！』

朝鮮人金中功だな？』

五時半といふ約束であつた。二人、何處かで夕飯を食ふ筈である。田中は、帳場の古風な時計を見

ながら、又三階の部屋へとつて返した。同じ淫賣婦が、四五人の先頭に立つて、籠のやうな顔を突き

出した。

『ああ、うるさい處だな。このぶんなら、俺あ支那にゐてどうなることかわからねえぞ。』

両手に女達を拂ひのけながら、部屋へ入ると、ドアの鍵をかつて、どしんと寢臺の上にふんぞり返

つた。

ひどくドアを續けさまにノックする音で我に返ると、一つしかない窓の外は、カーテンを下したや

うにまつ暗で、裏町の黄昏の騒ぎが海嘯のやうにざわついてゐた。聞きなれない言葉だと思つたら、

『金中功』

といふのは、先刻大友へ話した自分の匿れ名であつたのに氣がついた。



『オーライ！ 今開けるよ。』

押し込まれるやうに入つて来たのは、大友鶴三郎であつた。見れば、廊下には、三四十人の淫賣婦が、暴動でもあるかのやうに犇き合ひながら、關羽髯の大友を取巻いて大騒ぎをしてゐるところだつた。

『大變な淫賣宿へ御投宿召されたな！ 怪しからんぜ。——で、いつ来た？』

椅子の一つへ掛けると、寢臺に靴穿きの足を伸ばした田中を見て、大友は僻のやうに長い髯をしようした。その手つきを眺めてゐて、支那芝居を思ひ出さない人間は、支那通とは云はれないかもしれぬ。

『今日だよ。何しろ内地は不景氣でな、俺あ仕事にありつくどころか、少しばかり持つて行つた金も使ひ果し、すつからかんになつて、又支那へ舞ひ戻りさ。——何かいい仕事はないか？ 俺、とても困つてるんだよ。今度といふ今度あ、内地もすつかり見限りをつけてやつて来たんだ。——没法子さ！』  
大友は、油ぎつた手で、今度は長くのばした頭の毛をしようした。  
『うまかこと、澤山あるけん。まあ、一番先に、この腐つた淫賣宿から出るこつちやのう。——とも

かく、ここちあ話がでけん。飯食ひに行かう。やつぱり、相變らずの田中だな。——だから、俺がやつた手紙の通りに、ハルピンからまつすぐにここへ來とれあ良かつたぢやないか？』

『うむ、どうもこの南の方は始めてだからな、勝手がわからないんで、まごまごしてゐるよ。さつきもこんな事があつた。——』

田中は、人力車のこと、それに乗つた理由、錢莊で換へた金を乞食に投げてやつた事件などを、ネクタイを結びながら話し出した。友人は、子供のやうな咽喉聲でけらけら笑ひながら、エピソードの一つ一つが終るごとに、りうりうと髯をしようした。

突然、話半ばで、田中は友人へふりむいた。

『北四川路に、かういふ店があるかな？』

さう云つて、黒枠眼鏡のさし出した名刺を友人へ見せた。

『日華洋行：番地がないな。はて、岡部だなんて、俺も上海で二年間新聞記者をしてゐるんぢやから、大概の日本人は知つとるが、こんなのはちよつと聞いたことはないぞ。どんな人物ぢや、云ふて見い。——』



田中のおほつかない描寫によつて、大體の人相書を得た大友記者は、忙しく頭の毛を掻り立てながら、しまひに云つた。

「そりあ、臭いな。——實は、碼頭巡りは俺がせんものでな。——と目この大友天來の眼で睨んだら、大概の人物はその正體を現はすんだが——我輩遺憾ながら政治部なんぢや。」

二人は、鍵をおろしてそとへ出た。

「おい、久しぶりぢや、すき焼で豪傑酒でもあほるか？——それとも、すこしハイカるか？ おお、え、とこがある。あすけえ行かう。こりや、上海での流行のトツブぢや。——ユーカリのとみ子よ、何ちうか、一流のシャンだね。但し、そのシャンが曰く付なんぢや。まあ、來い、今夜は我輩が案内するわ！」

大友は、殊の外上機嫌らしく、支那に放浪してゐる日本人特有のがらがらした口調で、ひとりでしやべりながら、からだよりも長さうなステッキを揚げて、がらがらと聚まつて來る黄包車のうちから、乗心地の良ささうなのへ軽く飛び乗つた。

街の上には、惡諄い綾織の裾を、底冷えのする風にはためかしながら、夥しい賣春婦の群が、職業

的な「流町」を送つて二人を見かへつた。

「東洋、オール・ナイト、三弗よろしい。……」

街路樹のない、むやみと古風な蕙の簞えた夜の空には、支那人のゐるところには附きものの、銅羅の響や、頓狂な物賣りの聲などが無限の騒音の上に際立つて反響した。その上に、遠く訝えて、十月末の星がきらめいた。大陸の冬は、眠に見えて近づいて來てゐる。

「おい、大友、離れるなよ！」

前方の車から、洒々とした笑ひ聲が聞えた。

「お前こそ、逃げたりすると、きかんぞ！ 對手がちがうわ！」

6、ユーカリのとみ子

ホテルの玄関の下がカフェになつてゐた。

うす暗らい廊下を曲がつて、地下室の階段を降りると、ぱつと金色に近い黄ろい灯が顔に映つた。



蓄音機のジャッズと、もやもやした話聲と、毬のやうにはづむ女の笑ひ聲、焦ける脂肪の臭ひ、酒氣と煙草の煙とが、極端に引掻き廻はされたやうに濃く混和した一團のものとなつて、二人の客を包んだ。それらを縫ふて、青い線のやうな人工香水の匂ひだけが、際立つて嗅覺を刺戟するのだ。地下室と云つても、高く天井を取つた、紙西洋風の造りで、右手の奥のバアに、カクテルをミックスするサーカアが、石切場のやうな音を立ててゐた。

『こりや日本人がやつてるのか？』

『あ、お主婦が、お前、とてすごと來てるんぢや。』

席へ掛けると、大友は髻をしごきながら、その下でにやにや笑つた。

『いらつしやいませ。』

女給の一人が近づいて來て、註文を取つた。一日支那の娘々ばかり見てゐた田中の眼には、もう日本女の帯が不思議に見えるはじめた。それに、束髪である。

『銀座の方が、もう少し開けてるな。』

『柄にないことを云ふぜ。お前、銀座ア知つとるか？』

『いや、最近は入り浸りよ。』

『笑はせるな、満洲ゴロが！』

『銀座と云つても、俺のは裏通りだよ。』

『いづれそんなこつちやらう。』

二人は運ばれたウイスキーのユップをかち合はせた。

『まあ、御久し振りですこと、大友さん！』

まつ白い齒並を見せて、二人の前に笑つて立つた女があつた。田中は卓に置いた自分の手が、友人の脇でぐいと押しこくられたので、眼を睜つた。

『とみ公か、もつとウイスキーを持つて來てくれ。——序に、俺の親友を紹介しよう。これが田中ちや。ハルピン以來の悪友でな。これがユーカリのとみ子君だ、えらい別嬪ぢやらう、田中！』

田中は、いつもの含羞性から、すつから顔を赧らめて、挨拶とも咳拂ひともつかぬことを二た言三言述べた。

『お初めまして。どうぞ、よろしく。大友先生には、御毎度最負に願つて居りますので。——上海は



始めてでいらつしやいますの？』

『今日着いたばかりで。』

『さうでいらつしやいますか。思つたより田舎町ですわね。でも、人様によつては、北京などより居心地がいいなんて仰向いますけど——まあ、自由なんですわね。ずうつとこちらに御住ひになるんでございますの？』

『——いや、ソノ、まだそこまでは定まつてないで。』

先刻の女給が、エープロンの筋も亂さずに、しづしづとウイスキーと炭酸を運んで来た。とみ子は、音もなく椅子を引いて、二人の向ふへ掛けると、その女給へ命じた。

『あたしにも、一つ下さいな、千代さん。』

それから、向きをほると、じいとその青白い透き徹る眼を田中の上へ置いて、しばらく何かに耳を傾いてゐる風だつた。

『お前んとは、ウイスキーだけは本物ぢやからな。はッハ、はアはア。——そりやさうと、近頃は面白い客も来ないかね？ 大部廣告をしちよるやうだが、英字新聞などへも？』

『さうですね、お淋しい方ですわ。やはり、日本人經營の店ですと、西洋人の方でも客種がちがふやうですわね。この間も、面白いロシア人の方が見えましたのですが、すっかりウオツカの講釋を聴かして戴きましたね、揚句のはては、ウイスキーだけ召上がつて手前どものウオツカは匂ひを嗅いだだけでおやめになりましたの。——これでも、ウオツカは目慢のつもりですのにさ、すこしさうなると氣が咎めますわね。』

田中は、いつまでも自分の顔がこの女に直視されてゐるのに、すっかりきまりが悪くなつて、ぐいぐいコップを乾しては、あらぬ方角に眼を轉じた。

とみ子の前にウイスキーが置かれて、それを彼女が力ななさうな指さきで取り上げた時である。

『おいッ。田中は大友の腕をぐいと力を罩めて握つた。——俺ちよつと失敬する！』

さう云つたと思ふと、彼は、矢庭に鳥打を手にして立ち上がった。大友は、口を開けたまま、何一つ云はずに、田中の顔を瞻上げ、それから、田中の視線の轉じた方向を見て、刹那に友人の心持が解せたやうに、髻を動かして口を噤じると、

『うむ、歸へるとしよう！』



と頷いて、一弗銀貨を三四枚置くと、あとからつづいてホテルへの階級をのほつた。

田中は、ホテルの女關で、足ずりをして待つてゐた。

『おい、突然に、どうしたちうんぢや？』

『ま、歩かう。もつと別な通りへ出よう。あとからやつて来るかも知れない。』

二人は無言で横丁へ切れて、次の大通りまで小便臭い丸石の上を、ガツガツと歩いた。

『誰かゐたのか——？』

大友は、ここは大通りだと告げる風に、ステッキをとんと突くと、明るい電燈の下で、あらためて

田中の顔を振りかへつた。

『ゐたとも——あの野郎だ、スパイだよ。あすこのバアに立つてやがつた。あいつ、しきりに俺等の方を窺いてやがつたが、しまひにどうやら俺を探がし出したらしいんだ。妙な顔をして、急いでウイスキーを飲みはじめやがつたよ。』

『スパイちうと、その、なにか、北四路の店とかの？』

『これだ。』

田中は、もう一度名刺を出して、大友に見せた。

『岡部要之介か——どうもわからん名だ。こりや始めて上海へ来たんぢやなかる、この男は？』

『店を持つて、支那人といつしよにやつてると云ふからには、始めてではなからうぢやねえか！』

『うむ、ともかく、もう少し委しく話して見い。え——と、ここは、四馬路か、その源茂軒へ行かう。こりや、この邊の大親分ぢや。ええか、この料理屋へ飛び込んだら、假令どんな支那人に追ひ駆けられたとしても、絶対安全ちう家ぢや。』

『胸糞が悪るい、一杯飲みなほすことにしようや。』

うす汚い、日本なら私立學校の昇降口とでも云ふべき種類の階段をあがると、突當りが帳場になつてゐて、例の通り五六人の給仕や會計がゐる、狭い鳥の巢のやうな卓上から、一應這入つて来る客の風體を眼で調べると、一人の男が立つて特定の室へ案内する。これは、北京もどこも變つてゐない。大友の關羽髯は、ここでは馴染と見えて、案内された室も手廣ろい二人ぎりの部屋で、注文を伺ひに出た男も懇懇をきはめてゐた。

暫らく沈思してゐた田中は、騒がしい次室への仲仕切を眺めながら云つた。そこでは、支那人が、



大勢で拳をしてゐるらしかった。

「あいつは、やはり警察の廻はし者だよ。——どうも、俺の行く先々へやつて来るなんて、腑に落ちないぢやねえか？」

大友は、給仕の持つて来た蒸したオルの下から、髯面をまつ赤にして笑つた。

「田中——お前にスパイが！ うはッはは、何かスパイに尾かれるやうな事でも内地で仕出かしたんかい？」

「實はかうなんだ。對支非干涉運動といふ奴が持ち上がつてゐるからに、俺はそのビラ撒きの場合と演説會に妙な關係から引掛つたものさ。演説會が開かれもせぬうちに解散されたから往來を歩いてると評議會の連中だといふのが、デモをやる中へ捲き込まれつちまつたわけよ。あゝなると、どうとも出来ねえもんだ、人間は。大勢の力でわつしよわつしよやらかしたもんだで、しまひに巡查の一人と抱合心中みたいに孔ん中へ落つこちたわけさ。——それからだよ、どうも、俺もいつまで不景氣な内地にごろごろしてゐたつてしようがねえと思つて、まアお前を當にしたといふわけぢやないが、やつぱし支那の味を忘れかねてな、かう手當金の残りでやつて来て見ると、チャンと俺の船の先へ廻つて

待つてやがつたのが、あの眼鏡よ……」

「對支非干涉運動と云ひや、支那から手を引けつていふロシアの運動の出店だな。そいつア勿論主義者の運動だ。それに捲き込まれたんなら、お前も、多少は尾行ぐらゐつつかも知れんが、もとを洗つて見りや、警察にだつてすぐ判る筈ぢや。——うむ、まア、わしの見たところでは、その眼鏡の人物は、たしかに何でもなせ。全然人違ひだ。——どうぢや、そんなこと心配せんで、久潤を舒するんだ。一盃掬め！」

二人は、小鳩の丸煮へ朱塗の箸を伸ばした。酒も紹興ものらしい。

「時に、どうだつたか、あのわしの懇意にしてるとみ公は？ ユーカリのとみ子は？……」

「あの女か？——凄ごい別嬪だな。俺、あの眼には、何て云はうかな、すつかり極まりが悪くなつちまつたぜ。」

「ははア、あの眼か？——ありや、お前、盲人なんぢや。」

「め、盲人？」

「さうよ、あれで何も見えないんだから嘘のやうな話さ。尿毒症ですつかり失明しとるんぢやが、外



見はあの通りなんだ。」

「へいえ、こいつは驚いた。それで、あんな片輪が、あの酒場で何してるんかね？」

「ところが、お前、彼女の凄じいところはそこから始まるんぢや。昔から盲人はかんが高いと云ふだろ、我々にしてからが、ものを考へる時ア目を瞑らア、それだよ——つまり、眼あきの感じないことをちやんと知り抜くんぢや。偉らいもんだぜ。この間も我輩がそれとなく立會つてからに、内地の新聞のすばらしい特種になつた阿片密輸入者の一團を引捕へたんだ！」

「すると、つまり、警察の手引といふ風なもんだね？」

「いや、支那人や、共同租界の警察ぢやないんぢや。云はば國の爲めに、領事館の方の手傳ひをしてるやうなもんだな、自分で進んで！」

「……わかつた、それで、あの眼鏡の野郎も、あすこへ出這入りするんだな。それから、大友、お前もやはり領事館警察の方かな——？」

「なアに、我輩のは、職業として、こんな植民地では、どうしても領事館とは密接な關係があるのさ。——弱い商賣さ、新聞記者なんて。」

大友は暫く機械的に盃を充たしては乾し、乾しては充たしてはるたが、何か急に領きながら、手を伸ばして田中の盃へオレンヂ色の液體を注ぐと、かう云つた。

「ときに、お前、一と働きしてみたいんなら、明日にでも紹介する人間があるんぢや。仕事といふのは、ほかでもないが、日本國民としてお互ひにかう海外にゐる以上、決して恥づべき事ぢやないんだ。否、寧ろすすんで行ふべき義務の一端とも思はれる仕事よ。名前も知られてゐないし、お前がこの上海でやり出すからには、かへつて好都合だといふもんだが。——」

「と云ふと、いやに小むづかしいやうな前置きだね？」

「いや、萬事はこの我輩の方寸にあるんぢや。どうだ、昔なじみのなじみ甲斐として、一つ働いてみるか？ 多少の金は轉がり込まうといふものさ。」

「次第によつちや、一口乗せて貰つてもいいとは思ふが、お前も知つての通り、俺アなるだけ樂をしたい性分だな。」

「うむ、知つとる。——ざつと打明けてもいいが、こりあ日本の資本家を擁護してな、チャ、ンコロのストライキの調停みたいな仕事さ——」



『ストライキの?』

『それがさ、近頃は、廣東派が偉い勢ひで盛り返して來てゐるので、浙江方面の産業はどれもどれも不安な状態にあるんぢや。現にこの上海の紡績業にしてからが、日本人のやつてゐる十大工場近くの大資本家が、戦々兢兢として支那人労働者のストライキに脅かされてゐるんだ。それを、俺達で取り鎮めようとする魂膽なのさ。——どうだ、やつて見るかい?』

『ふむ、どうせ遊んでゐるわけにはいかないし、金にさへなることなら、ちつたあ骨が折れても仕様が  
あるまい。』

『よろし、然らば、明日お前と日本人俱樂部で會ふことにしよう。ええか、その前に、お前はあんな淫賣宿を引き上げるこつちや。萬事は我輩が見てやる。明日の午後五時半、文路の日本人俱樂部ぢや。僕の名前を云へあ、ボーイが案内してくるわ。』

二人は無言で運ばれて來た料理を味つた。しまひに、杏仁の粥が出て、ボーイが勘定書を持つて來た時、大友は大きな皮の財布から、三枚の十弗紙幣を引出して、それをテーブル越しに田中の掌に握らせた。何か云はうとした田中が口を開きかけると、思はず隣室の方に當つて、筒抜けに空間を劈いた銃聲がしたので、彼は反射的に、口を開けたまま立ち上つた。

『ピストルか?』

勘定を待つてゐたボーイが、蒼くなつて室外へ飛び出した。暫く廊下の四方から集る支那靴の音が聞えた。かういふ場合の支那靴の音は、なまじい騒々しくないだけに底氣味が悪い。

『珍らしくもない。上海にア、ピストルの音は毎晩だ。——何か青帮同志の喧嘩でもあるか。』

大友ほ、髯をすごいたままさう云つた。

稍長い間、隣室のどさくさが續いた。そこへ、靴音重く、武装した支那人の警官がボーイに案内されて入つて來た。警官は無患子のやうな眼を睜つて、室内をぎろぎろ見廻はした。ボーイがそのわきから、雄辯に客人の東洋人であること、常々見知り越しの人間であることなどを立證した。

『何かね?』

大友の間に對して、警官が何かとどくと両手をひろけながら説明した。

あとで、そこを立ち去つて、街へ出た時、田中はかういふ説明を聞いたのである。

『共産黨の一人が、あそこへおびき出されて、計画的に暗殺されたんださうぢや。』



7 街へ出る

街を歩いてゐる時ほど、人は、自分の姿をはつきり他観することは無い。  
 いろんな人間に行き當り、擦れちがひ、同じ道を並んで歩く、その通行人が、自分をどんなに見るか、同じ見るにしても、全然見ない振りをするか、それとも永い間じつと瞞めるか、一度見ては又見なほすか、或ひはじろりと流眇に見ただけで終るか——これだけでも、見られる方にとつてはちがつた内省を起してゐるのだ。それが、誰一人知つてゐない外國の街であつた場合には、殊に自己反省がするどくなる。

旅館を引拂つて半日を街の上で暮らした田中功は、自分が上海といふ都會でどの階級に屬してゐる人間であつたかが、だんだんわかつて來た。

あきらかに、金持ではなかつた。縞目のわからぬ小豆色の古洋服を着、それが、すこし温もつた場所へ行くと、ふ——んと垢と脂肪の酸っぱい臭ひを滲み出すのだ。靴といふほどに形の整つてゐない

獸皮の團塊は、ここ二ヶ月ほど靴墨を塗つてゐなかつた。ズボンの膝は、犬の後脚のやうに曲がり、烏打は、後も前もないほどだくりと頭に載つかつてゐるだけだつた。ブルジョアの誰がこんな身装をしてゐるものか？

さうかと云つて、素肌に木綿の青い布子一纏、裡足で帽子もかぶらずに、どこかに音を立てて銅貨の落ちるのを捜がして歩く苦力とははつきりちがつてゐた。

若い女や、金のありさうな人間には、ちつとも注意されず、人力車と乞食と警官とだけに、剗るやうな眼付で睨められる自分であつた。

彼は、鋪石へ斜に突出てゐるショー・ウインドーへ、のそのそと歩み寄る自分の恰好を遠くから見て、ひどく自分だけがこの都會の中で獨りでおちぶれて、不安で、淺間しい、仕事を持たぬ人間のやうに思はれた。——特別に、彼れの憎みは、その家鴨の足のやうな靴と、曲がつたズボンとに集中された。

それに、馬鹿々々しいシャツや浴衣を入れた、下等移民のやうなズツクの手靴！

「馬鹿や——い！ あの野郎の、うすのろな姿を見ろい！」



街の人間は、皆無言でかう擲擲つてゐるかに思はれた。

彼は、何とも云はれぬ屈辱から追れるやうに、ひろい通りへ向かつて、無茶苦茶に歩いて行つた。

東京の丸の内よりも高い大きなビルディングの建ち並んだ、谷底のやうな通りを抜けると、ぱつと明るい大通りへ出た。電車が通る、無軌道が通る、自動車も、間断なく疾驅する。無数の人間が、それらの機械に押出され吸ひ込まれて、絶えず動き廻はつてゐる。——その向ふには、ゆらゆらと頭を振つてゐるマストが見える。白い汽船の巨腹がある。赤い煙突。

『黄浦灘』

と、街角の鐵板にはつきりしたペンキで、支那語と英語の名が出てゐる。

ここは、高い崖の下に歩いてゐるやうなところだ。

崖の腹には、石の窓がある、鐵格子がある、外國の國旗がある、そして、銅像のやうな印度人の巡查が、高い石段から通行人を瞰おろしてゐる。田中は、小さくなつて、この崖の下の道をどこまでも迎つた。

不圖、びつくりして立停まつた。

サイドウォークを、一小隊ほどの日本の水兵が、百足のやうに匍つて來るのだ。

先頭には下士官らしい、ちよび髯の男が、短かいからだの割りに、大きく手を振つてゐる。あとから、静かな鐵砲の列が、楊子を植ゑつけたやうに揃つて進んで來る。方々に立停まつた支那人や外國人が、それをじつと見送つてゐる。水兵隊の木の假面のやうな顔は、見物人のために一層と緊張してゐる。

ぞくぞくぞく……と一行は、田中の傍を行進した。

自動車が除けて通る。人力車から、支那の肥つた紳士が、大きい眼鏡越しに、自分よりずうつと小さい日本軍人の姿を横眼に見ながら通る。

『東洋鬼！——』

一群の赤銅色の苦力の群から、つと立離れた番頭風の青年が、鋭どい聲で罵つた。田中は、苦力達が、口を腕のやうに開けて笑ふのを目撃した。

『支那から手を引け！』

昨晚、大友がロシアから出た言葉だといつたこの文句は、どうやらこの場合、支那人の中から出て



るる本當の氣持らしく田中には思はれたのである。  
橋がある。

そのまん中に、ロシア人と英國人らしい五六人の兵隊が立つてゐた。別に二人のロシア人らしい兵隊が、橋の上で歩哨をしてゐる。造りつけの生人形のやうに、睫毛一本動かさずに、二人の兵隊は、橋の前と後とをじつと瞞めてゐる。

何かされるのかと思つて、こわごわその傍を通ると、日本人だと見て取つたのか、歩哨は赤い楊子髯をピンと聳やかしたままに、やはり地平線の一方を瞞めてゐる。

嚴めしい馬鹿々々しさだと思つて、振りかへつた途端に、鐵橋のまん中を、橋袂の高さに弾みを打つて一臺の自動車、そのまま滑走して歩哨の間を疾驅しようとする、

「ストップ！」

生人形が、俄かにまつ赤な人間になつて嗷鳴つた。

自動車は、ブレーキの悲鳴を聞かして、そこから二間ばかり先で停まつた。ばらばらと、つけ劍の鐵砲を構へた外國の兵隊が、その高級車を取り圍んだ。

恐る恐る近づいた田中は、群集の肩越しに、自動車内から引出された四人の支那人が、一々兩手をひろげて身體検査をされてゐるのを見た。最後の一人が、何か身悶えして、兵隊の手から追れようとした。

「ヒア・ルック・アウト——ユウ・ブラデイ・チンク！」

英國兵が銃劍をその男の腹へ構へた。手早く搜がされた支那腹の下から、一挺のピストルが露はれた。——田中はひやりとした。

車内へ這入つてゐたもう一人の兵隊が、何か叫んだと思ふと、座席の下から取出したらしいもう一挺のピストルをほかの兵隊に見せた。

忽ち、三人の兵隊が自動車の横へ同乗して、一同はそのまま橋を渡つて、大きいビルディングのある街へカーヴを描いて消え去つた。あとには、以前の生人形が、直立不動の姿勢で、又橋の兩方を瞞めてゐた

「共産黨かな……？」

田中の眼の裏には、暫らく、軍人のカーキー色の服地と、赤い線と金釦とがちらついた。



すこし歩いてから、一人の日本人に行會つた。霜降りの洋服を着た紳士らしい男である。

「ちよつと伺ひますが——一體日本人街の方へはどう行けばいいんでせうか？」

「吳淞路の方かね？——それなら、ここを真直に行けア郵便局がある。その廣場の三本路のまん中を行くと電車道になるからね、そこを右へ二丁ほど行けア文路へ出ます。文路からは、すぐだアよ。」

横柄な言葉ではあつたが、わりにわかりよく説明してくれた。

教へられた邊まで來ると、日本人が支那人よりも多く歩いてゐるので、もう一度訊ねることも必要でなかつた。

田中は、一枚の上海地圖を、日本人の本屋から買った。

朝から何も食はずにぼうつき廻はつてゐるので、急に空腹を覺えた彼は、軒並に日本語のサインの出てる店の間を、めし屋を探がすことにした。内地とちがつて、繩納簾のめし屋も、這入りよさうな飲食店もなかつた。どの家もどの家も、それらしい屋敷の家は、四角な氣取つた軒燈が出てゐる支那家屋のコンクリートの段々があつたり、壁をめぐらした中に待合のやうな格子戸がきちんと閉めきつてあつたりした。それに、どれもこれも「料理屋」めいた名前なので、氣輕るに戸を開けて這入

るわけには行かなかつた。

彼は、同じ吳淞路を、三度ほど往つたり來たりした後、やつと横丁にあたつて、わりに安値さうな家の開いてゐる戸口から、思ひ切つて、中へ飛び込んだ。

「地圖を見るんだ——」

これが、最初の目的であつた。

彼は、人の子一人ゐさうにもない格子の奥へ向いて大聲を出した。

「おい、誰もるねえのかい？——めしを食はしてくんな！」

振り向くと、表の浪に鬮を描いたガラスの箱には、「江戸家」と書いてあつた。

「おう、誰かゐるかかね？」

吼えるやうな聲に、やつと誰かの應へがして、左側の階段の上から、濕つた草履の音が傳はつて來た。

「いらつしやいまし——どうぞお上んなさいまし。」

「二階かね？——俺ア又下で食はせるんかと思つた。」



「どうぞ、お二階へ。」

伊達巻をした女が、軽い言葉で、土間に立つた客と表通りを等分に見くらべながら、兩腕を上り段の棟へ支へた。昨晚のとみ子のカフェの女給などは、桁外れのするほど見劣りがした。

「上がるのもいいが、一體、このうちには、めしアあるかね？ 腹が減つてるんだ。」

女は、どうぞの一點張りで、たうとう彼に靴の紐をほどかさせた。

上がつて見ると、焼け焦けのある煎餅のやうにへしやけた餉臺から、女中はあわてて鏡やら化粧道具などを浚つて、大急ぎで次の間へ逃げて行くのである。田中は、昨日の煙草を、罐のまゝポケットから取り出して、地圖を窓の下へ持つて行つた。

昨日、銅錢を撒いた通りは、たしか湖北路と十字になつた漢口路といふのであらう。その角から、二丁北へ行くと有名な太馬路であつた。たしか、源茂軒といふ人殺ろしのあつた料理屋はその邊である。それから小路を一つ二つ越して、賑かな通りに、何かのホテルがあり、その地下室にユーカリのとみ子がゐるのだ。

彼は夢中になつて、小さな繪圖面の、横に縦に英字と漢字との入り亂れた中を、何か重大な物でも

発見しようとするやうに探がし始めた。不思議と、そこへ出て来る知らない町名や、工場や、役所などが、一つ一つ自分と十年も前から關係のある場所のやうな氣がした。それらが、これから持つてあらう關係が、順序を逆さにして、過去のものでもあるかのやうな懐しさを持つてゐた。

「何にいたしましたせう？」

女は、伊達巻をメリンスの帯に變へて出て來た。

田中は、どこかでこの女を見たことがあるやうな氣がした。

「酒はあるかね、姐さん？」

「ええ、ビールでも何でも。」

「ビールは不要ん、酒は——日本酒だよ。」

この妙な問答を繰返してゐながら、彼は、不圖、これから自分が用件で大友天來に會ふ約束だつたのを思ひ出した。

「あ、酒はやめた。めしだ。肴は何があるんだ？」

「——でも折角仰日つたのですもの、一本ぐらゐいかが？」



植民地なみに、女は執拗かつた。

「うむ、ぢや、一本だ。刺身に何か——見つくりつて持つて来い。」

「おみつくりい、はい、かしこまりました。」

女はうす汚い田中の身装へ最後の觀察を放つて裏階子へ降りて行つた。

田中は、ポケットの、昨夜大友から渡された支那紙幣と、使ひあまりの銀貨や、まだ替えてゐない日本の金とをそつと撫でて見た。

「畜生ッ、口説いてやらうか？」

窓の外の廣ろい道路では、誰かが日本語で號令をでもかけてゐるやうな聲がした。つづいて、セメントの道路へ鐵のバーでも打込むやうな音が、びんぐびんぐ——と響いた。

女は鹽豆と酒を運んで来た。

「ここでも鹽豆か——？」

田中の意味を解しかねた女は、微濫い酒を、どびりと盃を洗ふやうに注いだ。その手を、田中は、しつかと握つたのである。

「幾何かね？」

女はどこを風が吹くといふ表情である。

「何云つてんのさ。さア、お酒でも飲みなさい！」

仕方がないので、田中は、舌を出して笑つた。

一本が二本になり、それが弾力を持つて、五六本に殖えた頃には、田中の周圍は、わけのわからぬ小さな鉢や皿で埋まつてしまつた。もう一人の、したたかに酒を啖ふ女が出て来て、敗けずに客の盃を引受けては、長崎辯ではしやぎ廻はつた。

「よかばつてん！ よかばつてん！」

田中は、面白づくでその女の眞似をしては、酒の註文をした。かうなると、すこしでも眼の前の徳利の空らであることが無性に不合理な氣がした。そして、その不合理性を聲に出して叫ばないと、何かしら男が立たないやうな氣にもなつた。

「もう何時かな？」

「只今見て参りますわ。」



女の一人が立つた。彼も、不圖、便所へ行かうとして立ち上がった。表から、階段が、一間ほどの板敷になつて、今度は逆に裏口の方へ同じ高さに下つてゐる。その山のやうな形の裾に便所があり、その横手にこの店の勝手元があつた。田中が降りて行くと、店の主人らしい板場と今降りた女中とがしきりに自分の噂らしいことを云ひ合つてゐた。

「この前も變なのに引掛つたからな……。」

「大丈夫ですよ、親方。身装こそ汚らしいが、あれでちゃんと持つてんのよ。あたいた見たわ。」

「う、そんなら良いが——」

田中は便所と板場の間の障子をがらりと開けた。

「おい、親爺、金がないとでも思ふのか？ 畜生ッ——ふざけんない。俺さまが無銭飲食だと云ふんだな？——よし、金アねえ。無かつたらどうするつてえだ？ さア、錢アねえぞ！」

彼は、二段ばかりの踏み段へ大股に掛けてふツふと臭い息を吐いた。

「あら、この旦那、こんなところへ來ちや困るわ。——あんたのことぢやないのよう。さア、お二階へ行つてらつしやいつてば！」

主人は身動きのならぬほど肥つた男で、じわじわ燻る小魚の煙の中から、水つほい眼を客の方へ向けた。

「じよ、冗談、旦那さまのこつちやないんで。へえ——その、話は全くちがひますんでな。」

セルロイドの玩具のやうな聲で悲鳴をあげた彼は、女給に胸せしながら、魚の皿を手渡した。

「御容様をお二階へ御連れしな、すま子や。」

格子になつた臺所の向ふの小部屋から、しわがれた主婦らしい聲がした。

「ほんとに、旦那、あんたのことなんかここで申上げたつてはじまらないぢやないの、一體。さア、いらつしやい。」

「そんなら俺も文句はないが、貧乏つたらしい身装をしてゐたつて、金はこんなに幾何でもあるんだからな。あんまり馬鹿にしちや貰ふめえぜ、え、親爺。——おつと、俺は小便だ。それから何時かつて訊いてゐたのだが？」

格子の向ふの聲が、煙管を叩く音といつしよにした。

「四時二十五分でございますよ。」



「四時二十五分——か。よし、もつと酒をつけろ！ いくら上海だつて、あんまりけちけちするなよ。」

したたかに酔つて、文路への道筋を訊かされて、そこを出たのは、もう六時近かつた。廣場へ出ると、暮れかかつた大道に、びつくりするほどの照明燈を照らして、日本の陸戦隊が鑛條網の工事をやつてゐた。

先刻からのびんぐびんぐと響いた音は、アスファルトへ支柱を打込むためのハンマーの音であつた。蟻のやうな一群の兵隊が、憂鬱な表情で、鐵線の巡らされた空間へ、重い砂囊をどしんどしんと墜してゐた。

海軍士官の短かい劍が氷のやうな照明の中に、鈎にかかつた魚のやうに煌つた。

「支那から手を引け、だい！」

何とも云へぬ衝動から、醉漢田中は、工事の全體へむかつてから大聲で叫ぶと、ふらりふらりとツクの靴を振つて歩み出した。

8、日本人俱樂部

クラブなどといふものは、田中のやうな人間のために造られてゐるものぢやない。

それがつきりするためには、左程むづかしい順序を経るには及ばなかつた。

「大友はりますか？」

牢屋に磨きをかけたやうな女關で、かうタキシドとか何かを着込んだ、油のきれたやうな若い男へ

田中が訊ねるだけで澤山だつた。

「居ませんよ！」

受付の青年は、撥ねかへつた鞭のやうに答へた。

「ナニ居ない？——冗談よせよ。俺ア大友と今夜ここで會ふことになつてゐるんだ。」

「ここは何處だとお考へになりますか？ 下宿屋ぢやないですよ。」

「あた、當り前さ。東洋人クラブだ。領事館でもなからう。威張らない！ さア、大友の部屋へ案内



しろ！」

「何です、貴方は？——紹介がなけりやこのクラブへは這入つて來れないのがわからないのですか？

見たところ、失禮だが、貴方がたのお出になる場所がちがふやうですがね——。」

先方には、同じやうな服装の男がもう二人殖えて行つた。田中は、蚯蚓のやうな蟻谷の筋を動かした。

「紹介——おいおい、用があるからこそわざわざこの田中さんが御出になつたんだぜ。ふざけるのもいい加減にしろ。貴様ア何だ、一體。ここの番人だろ、この瘡せ犬め！ 用がなけりや、こんな長春の女郎屋みたいところへ誰が來るもんか！」

かう云つて、彼はベツベツと床の絨緞へ唾を吐いた。

「この乞食野郎！」

一人が横手の小さい扉を押して、いきなり突かかつて來た。田中は、胸板を押されて踵で全身を支へながら、よろめきよろめき、階段の手摺へ來て、どさりと仆れた。

「この瘡せ犬、殿ぐつたな。——よし、さア來い。この田中さんを、どうとでもして見やがれ！ や

れ、殿ぐれ！ さあ、勝手にしろッ！」

田中は、扇のやうに股を開いてふんぞりかへつた。

「おい、どうしたんだ？——先刻から待つてるんぢや。馬鹿、酔つてるな！」

階段の上から友人の長い髻が、ものを云ふごとくにふさふさと束になつて動いた。

「うむ、この瘡犬どもがあまり俺を馬鹿にしてるからな。——威張るない、なんだ、こんなコケおど

かしのクラブなんか！」

手の塵を仰山に拂ひおとしながら、田中は立ち上がった。

「まあ、酔つとるから勘辨してやつてくれ給へ。」

大友はボーイ達に斷つて、階段を振りかへり振りかへり先に立つた。

一つの部屋へ這入ると、彼は、いきなり田中の肩へ手を置いて、けらけらと笑つた。室内には牛鍋

の匂ひが籠つてゐた。大友も多少酔つてゐたのだ。

「この男ですよ、松山さん。豪傑、上海の二日目に、もう李太白を定め込んでるからね。」

大友は可笑しくもないのに、しきりに喉でうがひをするやうに笑つた。



卓の向ふに、大きい眩椅子へ悠然と構へたのは、大友の紹介すると云つた人間らしい、五分刈頭のゴムのタイヤを重ねたやうに、頭から顔まで四つほどの括れのある四十男であつた。

「よう、これは。――すばらしい機嫌ですね。松山です、どうぞよろしく。」

男は、金鎖を見せながら、胴衣のポケットから名刺を取り出した。受取つて見ると、卓の酒がべつとりと裏についた。

「時に、宿は引拂つたのか？」

盃をすすめながら、大友が訊ねた。

「あア、今朝引拂つた。どうも上海といふところは、黄包車のうるさいとこだね。こつちは歩きたいんだが、奴ら歩かせアしないよ。」

「そこで、話は早いがいい。――實は、この松山さんが、何と云ふかなあ、一切支那の工場關係の方を見て居られる方なんぢや。君も知つてのとほり、現在支那には北方と南方と二つの政府があるんだが、その南方政府は、七月に北伐を開始して、もう九月には漢陽を陥し入れ、さすがの、吳佩孚將軍も慘敗遁走と來て、曹錕第二世も見られたざまぢやない。この分なら、北伐革命軍の九江占領も間

もあるまい。九江が占領されるといふことは、支那の富の咽喉を扼する江蘇浙江兩省へ、楊子江筋を傳はつて、南方の軍隊が亂入することぢや。北方では、孫傳芳と張作霖が頑張つとるが、この分では楊子江南岸一帯が革命軍の手に陥つた日にア、勝敗はもう自明の理さ。ところで、日本などでも、在來までの對支政策が斷然變らなけりやならんことになる。現に、列國の外交團では、今度武昌へ移轉する國民政府を承認しようちう議論が勝つてるやうな内報もある。この間の廣東國民黨全體會議では武漢に首都を決定するちう決議が通過してらんぢやが、この前の中山艦事件以來、國民政府にも左派と右派がわかれてからに、だんだん分裂の徴候がはつきりして來た。蔣介石派が武昌に陣を構へると、ボローヂン一派は武漢三鎮を首都とすることになつたわけさ。――差し當りこの上海なんだが、ここでは總工會といふ労働者の組合が威力を張つとらんぢや。この總工會は、事實上陳獨秀一派の中國共產黨の指揮の下に動いてゐる奴でな、現にこの八月廿日、内外綿の第五、第七、第八、第十二工場でストライキをやらかしてからに、一萬人からの無智無能なチャンコロ共を罷業させ、この先月半ばにやつと解決したわけさ。それには、總商會の虞洽卿が仲へ這入り、總領事やここに居られる松山さんなどいろいろと斡旋された結果、米の手當を一人分一日で大洋三分を増す、それからア工場



内に警官だけは入れないといふ協定条件で解決したのさ。だが、一旦和議は結んでも、この共産黨の無頼漢どもは、日に日につけ上る一方でな、こやつ是が非でも徹底的に敲きつぶさんと將來恐るべきことが起るのぢや——。』

ここで大友は、話を切つて、二三杯つづけさまに盃を乾した。ハルビン以來、この男も妙な政治通になつてゐた。

無言で葉巻をふかしてゐた松山といふ男は、これを區切りとして、肥つた下唇から煙の糸を曳いて葉巻を離すと、眼だけで近づくやうに田中の顔に向きなほつた。

『長講一席だね、大友君、御苦勞。あとは、わしが續けよう。——大友天來君の話で、大體、今上海がどんな事情にあるかがはつきりとされただらうが、わしらが貴方に折入つて頼みたいことは、一つ支那人苦力の間に潜り込んで、奴らといつしよに運動へ手を出すなり、ストライキを起すなりして、思ふ存分に働いて貰ひたいこつたね。——とだけ云つたんぢやわかるまいが、月々定まつた月給は差上げる。宿もちやんと定つてゐるし、なすべき仕事の段取もはつきりして——つまり、わしらは、貴方といふ人が上海へ來られるのをチャンとお待ちしてゐるのも同然なのだ。これも、實に偶然

な結果であつて、幸ひ大友が貴方といふ御仁を知つてゐて、わしに推薦してくれたからこそである。どうだね、男子緊禪一番してからに、この近代支那の舞臺に冒險して見る氣はないか？』松山の瞳はこちらがうっかりでもしてゐるようものなら油断の際に、鋭利な刃物を忍び込ませるやうに煌かつた。そいつは、普通の商賣人や役所の屬吏などのガラス球のやうな瞳ではない。言葉の一句ごとに大きくなつたり小さい點になつたりする眼だ。田中は嫌な氣になつた。

『でも、わしらには上海語が話せないのでね——』

『いや、君はたしか北京語がやれる筈だ。それに、支那人の眞似なんかせんでよろしい、どこまでも日本人であつていゝのだ。仕度は、全部わしの方でやる。——どうですな？』

『さア、一體どういふ仕事ですか、ちつともわしには見當がつかないのでね。』

『ふむ、わからんのも無理はないな、』

松山は、すこしむつとしたらしく、ちれつたさと自製心の内証した顔を赧らめて、ぐいと金鎖を曳いた。

『早い話が——ストライキのブローカーみたいなのをやるんだね。』



大體そんなところだ位は感ぐつてゐた田中であつたが、酔つた時の氣持として、相手にさうまで口に出して云はせて見ないと物足りない氣持がのさばつてゐたのである。

「つまり、スバイをね、」彼は、嘲笑つた。

「大きな聲をするな！」

大友は大きい聲で、田中を取つて伏せた。

「あんまり感心しないな。お断りだよ！」

田中は、他人のことでもあるやうに、にやにやしながら返事を投出した。

と、大友天來の口が、朱を含んだ支那劇の花面でもあるかのやうに、ぱくりと開いて、深く息を引いた。

「ば、思鹿ッ！——貴様、酔つてるな！ 忘れたか、この我輩が昨日何を云つたかを！ 貴様、俺に背負投を喰はしたら承知せんぞ！」

これまで罵られるには、田中の額に汚らしい唾が二三度飛沐いたのである。田中は、案外酔つてはゐるなかつた。

「——金のことか？」

その冷笑に出逢はすと、さしもの大友も、はたと行詰らざるを得なかつた。彼は、低い、鼻にかつた動物的な呻き聲を擧げただけで、暫らく隙を狙ふやうに、田中の顔を睨んだままでゐた。

「この、野、郎——！ なめるなッ！」

田中の顔には、生温るい水が弾き飛ばされた。頭上一二寸のところを、白い物がすつ飛んで、どこやらの壁にびしりと碎けた。田中は、笑つて左手を伸ばして、もう一本の徳利を握つた大友の手を掴んだ。右手は、眼にしみる酒の滴を撫でおろすのに急がしかつた。大友は掴まれた手の向ふに、烈しく上半身を震はして立ち上がらうともがいた。

「よせよ、俺アハルピンこの方お前と喧嘩するわけはないんだぜ。何がそんなに癢に觸つたのか？」

「貴様、我輩の顔をこれ以上潰せると思ふかい！ この、ごろつきめ！」

「お前の顔……」

二人の押問答を體を引いて聞いてゐた松山は、この時、腕を伸ばして、双方の手首をたぐりよせるやうに握り締めた。少々の力づくにはめけない田中であつたか、この男の力で二の腕がタオルのやう



に絞しぼりつけられたには意外いざいだつた。

「痛い、松山さん！」

大友おほともは酸すつばいやうに口くちをすほめた。

「つまらんことで仲間喧嘩けんかするなよ！」

松山まつやまは、かう云いつてほいと二人ふたりの腕うでを投なり出した。「わしも一旦いつたんあ打明うちあけて頼たのんだからには、田中たなか君くんに是非せひ聽きいて貰もらふ心算つもりでゐるんぢや！ 不肖ふせう松山覺次郎まつやまかくじろう、かうと睨にらんだら、人間じんげんの鑑定かんていにかけちやまだ失敗しくじつたことはない。で、先まつ、田中君たなかくんがどうしてこの仕事しごとが嫌いやだと云いふのか、その理由りゆうから聽きかせて貰もらはうぢやないか？」

震ふるへる手先てさきに盃さかづきを持つた大友おほともが、柄がらになく泣なきさうな聲こゑで云いつた。

「田中たなかは、前からちつとばかり赤あかくなつてゐるんですよ。」

「赤あかく——ふむ、面白い。ぢや訊たづねるが、君きみ、この支那しなの革命騒かくめいさわぎから、結局利益けつぎよゐを占しめる國くにはどこだと思おもふとるかね？——日本にほんか？——アメリカか？ ロシアか？ それとも英國えいこくか？——わしは、この首くびを賭かけてもよろしい、このアメリカの資本しほんと、ロシアの煽動せんどうで騒さわぎ出した支那しなの革命騒かくめいさわ動どうから、

斷たんじて日本帝國にほんていこくはこれッほちの利益りえきも得えやしないんだぜ！ 君きみは、日本人にほんじんとして、むざむざアメリカの金權支配きんけんしはいの手の動うごいてゐるこの革命騒かくめいさわぎに乗のせられて平氣へいきで居ゐれるつもりなのかい？ さあ、それが聽ききたいもんだ！ いや、待まて、ロシアのプロバガンダの成功せいこうした曉あかつきに、アメリカとロシアとが、日英兩國にちえいにこくを引擦ひきり込んで、この支那しなを舞臺ぶたいに、又々東洋とうやうに一大戦争だいつせんそうを起おこさうとしてゐる矢先やさき、君きみは、どういふ立場たちばから支那しなの赤化運動せきくわうんどうに賛成さんせいする氣きかね？」

田中たなかは可成おほしさを慄こらへて、松山まつやまの胸むねに鞆ぶらんこしてゐる金鎖きんざりの一環いっくわんを眺ながめた。金鎖きんざりといふものは、大概たいたい滑稽こっけいなものだ。

何かしら、それに答こたへなきあならぬ氣きがしても、思おもふやうな返事へんじが浮うかんで來こなかつた。黙もくくともこの松山まつやまの切り札ふだらしい『國際關係こくさいかんけい』の知識ちしきに對抗たいこうすべく、あまりにも自分じぶんが國際的こくさいてきであり社會主義的しゃかいわいしゆぎてきであることが、はじめてはつきりした。彼はわざとかうした手てに出でた。

「さア、さういふことになる、わしにはちつともわからないんで……。」

松山まつやまは、かすかに笑わらつた。

「——物事ものごとは、宙ちゆうぶらりんが一番ばんいけない。すべて、徹底てつていすることだよ。赤あかなら赤あかで、どこまでも押お



し通す。わしは、國家主義だ。帝國主義だ。が、わしの帝國主義は、多年第三インターの活動方針や、中國共產黨の成立の組織工作を研究した上、東洋人としての立場から世界文明の歸趨を考へたあまり、たつたこれしかないといふ民族的自己防衛の手段なんだ！」

ここで彼は、もう少し前に使用した拳を、全く別な用途から、二人の若い者の鼻先へぬうつと突き出して見せた。その拍子に、卓の端へ置いた葉巻が、獨りでにころころと、床の上へ顛落した。しかし、自分の議論に熱中した松山は、すっかり葉巻の存在を忘れてゐた。——妙な場合に、誇張した感激性を發揮する男であることが、田中には始めてわかつた。と、一段と聲を低めた松山は、前躡みになつて、田中の服の襟をそつと押へた。

「——實はね、わし等がかうやつて、君を大騒ぎする所以といふのは、君自身では氣がつくまいが、その君の顔が借りたいからなんだ。君の顔は……」

と云ひ差して、松山は意味ありげに大友の方を覗き込んで、やりとした。

「今モスコオに行つて林幸作によく似てるからちや！」

大友は、ここで得意さうに關羽髯をしごいた。

突然、田中功は、鐵板を蹴飛ばしたやうに笑つた。

「よせやい、二人とも！ わざわざ小金を掴ませといつて、こんな與太俱樂部へ呼び寄せたとおもつたら、へん、いけ面白くもねえ。俺を何だと思つてるんだい！ 馬鹿にするない！ 大友、手前も、ハルピン以來暫らく會はねえうちに、コケな奴になり下がりがつたな！ さア、錢は返へす。べら棒め、友達だと思つて相談すりや、昨日から親切ごかしに、この俺をへんな處へ賣り込もうつていんだな、畜生ッ、かうなりや、手前ともサツパリとお別れだ！——したが、昔の好誼だ、別れる前に一言忠告してやる。天來といふ乙な號のヘツボコ記者よ、人間は黙つてふむふむ云つて聽いてる奴を用心しろよ！ そいつア心の知れねえ奴だ。肚の中ちや、手前の面へ唾をヒツ掛けながら笑つてるかも知れない。アバヨ！」

それ以上を云ふことは危険であつた。その危険を知つてゐる彼は、靴を持つと手當り次第の椅子を撥ねのけ、ドアにメリケンを呉れて飛び出した。

あとから大友が海象のやうに髯を振りながら玄關へ追つて來た時に、田中の姿は、俱樂部の角の燒栗屋の蔭になつて、上海を複雑なものにする夜の通行人の一人となつてゐた。



『けつたいな好ぢや！』

大友は、猫のやうな舌打をした。

9、回顧の日

翌る日の田中は、支那人の貨二階に納まつて、『美麗』をふかしながら、義豊里の袋小路に、糞桶を洗つてゐる長屋の女達や、物賣りの群を見おろして、やや回顧的な時を過ぎてゐた。

私達も、彼れの氣分に從つて、この一日を頗る平和に過ぎてみよう。

これからの田中功は、どういふ冒険に出遇はすか計り知られない。しかし、この日だけは、小便臭い敷石と、やたらに赤い紙片を貼つた壁と、憂鬱な洞穴のやうな長屋の列と、門の向ふに光つてゐる稍ひろい街とを視界に取り入れながら、ゆつたりこんな思ひ出に耽つたのである。――

朝鮮の瘦せた、草つ氣一つない、石ころだらけな土地が、古い地圖のやうに、するすると眼の前に展らける。

春であつた。

釜山から三時間で行ける三浪津といふ小田舎町へ、彼れの前身を知つてゐる友達をたよつて、田中功といふ青年が疲れた足を運んでゐた。――大正十三年の三月、まだ日本には大震災の龜裂がなまなましかつた。

たよつて行つた宗像といふ男は、やはり昔は船乗で、いつしよに善い事悪い事の限りをつくした仲間なので、相當な世話はしてくれるだらうといふ豫想の下に懐ひ出されたのであつた。

その豫想はずつかり外れた。

昔の船乗は、警官のやうな髭を生やして、一町あまりの果樹園を経営し、はるばると放浪癖にかられて來た仲間を、朝鮮人勞働者と同じ小舎へブチ込んで、林檎の枝を剪らせたり、施肥に扱き使つたりした。

『田中、今時お前みたいな破浪漢根性を持つてるんぢや、一生頭が上がりねえぞ！』



かう云つて、宗像は田中を頭からおどかした。そこへ行つた三日目の晩である。ろくにその後の話もせぬうちから、かう云はれた田中は、この男と昔は二度も印度洋を越したことを思ひ出した。

「よせよ、満更お前だつて、あかの他人ぢやなからうちやないか。——俺を鮮人と同様に扱き使ふなんて、昔を考へて見ろよ！」  
とたしなめた。

「昔は昔、今は今さ。俺だつて、朝鮮へ渡つて一と通りの苦勞をしたからこそ、二十人やそこらのヨボを使つてるんだ。昔話は通用しねえよ。ともかく遊んで歩く奴に俺は用はないんだ。が、まあいいや。——俺はヨボ以外には備はねえことにしてるんだが、かうやつてお前が飛び込んで来て見りや、すけなくも出来ねえから、一つみつちり手傳つて貰はう。京城へ飛ぶ旅費ぐらゐは俺が拵へてやる。」

一町何反かの果樹園が、横柄に物を云はせるのである。田中は、言葉一つわからない、朝鮮人勞働者と働きながら、口惜しさに齒咬みをし、自分で頭を殴ぐりつけて泣いた。船乗上りで薄情な奴ほ

ど、薄情な奴はない。三ヶ月やつと煮え湯を嚙む氣持で働き通すと、いつもの横柄な呼び捨てから、大喧嘩になつた。幸ひ田中の腕つ節の方がすこし強かつたから、宗像の持つてるだけの小金を全部吐き出させて、眼を圓くして小舎に隠れてゐる勞働者達へ、わかつてもわからなくても、大聲で、

「ストライキしろ！ ストライキだ！」

と手眞似で嘸鳴りながら、その田舎町を飛び出した。これは豫定の復讐だつた。

それから、田中の朝鮮の旅がはじまる。——

雨が降る。雨は禿頭のやうな山を洗ひ、恐るべき滑走力で、盆地の水田に氾濫する。稻は根こそげ下流へ押流される。住民は右往左往して、雨の降る朝鮮を捨ててどこかへ遁け出す。しかし、どこへ行つたつて、生きる慾望さへ去勢されたこの植民地の貧民群を、慈悲深かくかばつてやる國などは、まあ東洋にはないと云つていいのだ。雨がやむと、太陽が照る。日光は、銅羅を敲くやうな烈しさで朝鮮全道を焼き立てる。禿山も石ころの原も、熱病みたいにカサカサになつてしまふ。これで五穀がみのれとは無理だ。おまけに、人工の耕地整理とか灌溉とかの設備は、餘計な投資みたいに考へられてゐるので、土釜のやうに乾いた土からは、毛糸ほどの稻がちよほちよほと生えるだけだ。この朝鮮



の農村状態を見たことは、放浪者田中功の思想にとつて一つの革命であつた。それだけで彼は、世の中を二つに見た。――搾る奴と搾られる奴と！ 彼は大きい決心を持つて、京城へ向つた。京城！

これは乾からびた人參のやうな都會だ。少數の日本人を除いては、人口三十萬の殆どすべてが永遠の失業者であつた。工場に煙の出る煙突も見當らなければ、客を載せた自動車の姿もなかつた。だだつびろい白い道に、むやみと素足に物乞の掌が動いてるだけだ。のろのろと、一個一錢位ひで荷物を背負ふ『チゲ』が、幽霊の群のやうに街を満たしてゐるだけだ。この『チゲ』と呼ばれる陰惨なセミ。プロレタリアほど、世界で屈従と掠奪に慣れた貧民はあるまい。彼等は大きい聲一つ立てるではなかつた。稗の團子と、粥で生命をつないでゐる彼等は、どこへでも眠り、どんな最低賃銀にも甘んじた。冬は土を掘つて、動物のやうに寝るのだ。

この生産力も購買力もないうす氣味の悪い首都には、店もホテルも、電車でさへがらあきだつた。ただ歴史の怨靈のやうな宮殿が、白い埃りを被つて、朱が剥け落ち、葺の毀はれた廢墟を、市街のどこどころに曝してゐるだけだ。

田中は、泊り込んだ宿の周旋で、何とかいふ公園に新築中の『乃木神社』の大工の下働きを三日間した。満目索落とした『死』の都に、軍神乃木の山だけは、まつ青に木が茂つて、櫻の花が咲いてゐた。山から眺めると、京城の市街は、おんほろのシャツの縞柄のやうに見えた。

何とも云はれぬ悲惨な氣持から、田中は、櫻の木の下でぎりぎり歯を食ひしばつた。三日目の晝であつた。すると、近くの叢から、

『働けど働けど……』

と聴き覚えのある石川啄木の歌を唄ふ聲がした。

はつとして振りかへると、小さつぱりした洋服姿の、烏のやうに口の尖がつた若い男が、草の上に寝そべつて、ほんやり櫻の梢を眺めてゐるのであつた。

昔の悠長な人間なら、その歌の續きを早速こちらから繼ぎ足すぐらゐるの教養とやらを持ち合はせるところだらう。しかし、田中は、一種の反感をさへ抱いて、その醜い青年が歌の終りまで口誦むのを聞き流さねばならなかつた。



「人が働いてるのに、なんだあんな歌なんぞ得意さうに歌ひやがつて！」

彼は、そのまま職場の方へ行かうとしたのであつたが、折悪しく彼れの姿が先方の眼に留まつてしまつた。

「やア、貴方は日本の方ですネ。——どうです、京城つて、いやに寂しいところぢやありませんか。」  
年齢よりもませた口調で云つて、ぐるりと肱枕に向き直りながら彼へ話し掛けた青年は、田中の知つてる限りの男で、最も醜い人間であつた。——本當のところ、それは醜悪といふよりも、蒼黄ろい憂鬱さであつたのだ。

二人は何氣なく話をした。

海となく陸となくほうつき歩いて來た田中功の生涯で、この可怪しな青年と京城のここで出遇つたことは、最もローマンティックな出來事の一つである。この青年と、それから暫らくの間の田中は、朝鮮から滿洲へかけて最も無責任な放浪の旅を、伴にしたのである。

名前は岩田平三郎と云つた。文學狂ひで、青年期の煩悶を抱きながら、大阪の家からぶらりと飛び出して、あてのない旅をしてるのだと云ふ。話してゐるうちに、生氣のない土色の顔に、興奮した色

が浮かび、眼は人なつこい光で輝いた。岩田青年が、口を極めて日本の軍國主義を罵倒するのは、根據は曖昧であつたが、田中の淋しい氣持を惹き立てるにはいい刺戟だつた。

田中は、職場を捨て、山を降りた。

「どうです、ロシアまで行きませんか、二人で？」

青年のホテルへ行くと、田中はそんなことを薦められた。

「あんたは、何かロシアに目的でもあるんですか？」

「別に研究の何のといふことはないんですが——トルストイ、ドストエフスキー、ゴルキーの國です。行つて見たいですよ。金は旅費になる位は、家出する時持つて來たんです。」

この大阪青年は、不思議と大阪辯を使はない。その筈だ。早稻田の豫科を出たのだと云ふ。二人はその晩から翌る日まで、文學の話や、思想の話や、御互の氣持などを打明けて、普通の人間なら三年もかゝるほどの友情を、一夜のうちに作り上げてしまつた。

田中は、結局、ロシアへ行くことに同意して、青年にホテルにある三つのトランクの文學書類を賣り飛ばすことをすすめた。かういふ經驗にかけては、田中の方が一枚上は手だつた。青年は苦がい顔



をしたが、たうとう思ひ切つて、京城の古本屋を呼んだ。

二人は奉天行の切符を買つた。

文學といふものがこんな若い者でつち上げるものだとすれば、それは悪いものである。岩田は汽車へ乗つても、すぐ疲れて、次の大きいステーションで下車しようと云ひ出した。眞面目な話となると文學と文學者と文壇のことしか興味がなかつた。それに、物を考へる暇もあるまいと思はれるほど、鳥のやうに尖がつた口から啄木の歌が涎のやうに流れ出るのであつた。そして、この文學狂ひの若殿様は、蛭が血を慕ふやうに、女の肌を欲しがつては、しきりに同伴者とその周旋を頼んだ。

どうせ一方は金を持つての上の話だ。田中は、遊んでやれといふ氣で、降りる驛ごとの都會で、この青年の満足を計つてやつた。平壤では、細い指の妓生を買つた。安東の野鷄を、岩田は無性に悦んだ。鴨綠江の川幅を眺おろしながら、二人は土地のアバズレ藝妓を揚げて騒がせた。それが又黴いハムレット君の氣に入つた。

二人が奉天へ着いた時は、ちようど奉直戦争の最中で、城内には戒嚴令が布かれ、通行は殊の外やかましかつた。吳佩孚の旗色がよかつたので、奉天票は慘落し、市街は上を下への騒ぎだつた。取引

停止、錢莊は閉鎖される、市場は混亂、その底に張作霖がむやみと焦心つてその景氣を恢復しようとして試みた。

塵埃つほい街角には、兵隊募集のポスターがべたべたと貼りこくつてあつた。軍用人夫の拉夫が行はれて、軍警は支那人の苦力を大衆的に捕虜にした。白軍殘黨のロシア人が、血を嗅ぎつけて鼠のやうに都會へ雪崩れ込んだ。

ステーションには、夥しい赤毛のロシア女が、素足の娘や子供達や、銅壺のやうに眼だけ光らした婆さんと連れ立つて、西瓜を頬張る、黒パンを奪ひ合ふ、眼の玉を引掻き合ふやうな喧嘩をする――野獸のやうな食物の爭奪戦を、夜となく晝となく繰返した。

ツルゲネーフの戀物語や、紙の上の罪惡だけに想像したドストエフスキーに育てられた岩田青年は、この襤褸屑のやうなスラヴ民族の大群を見て、悉く失望したらしい。

『僕はもう内地へ歸へる。君も一緒に歸へるんなら旅費は出しますが、でなけりや、三十圓ばかり上けるから、ここでお別れしよう……。』  
かう云つて、彼はべそを掻きながら日本へ歸つた。



それからの田中は、どうかしてロシアへ脱け出たいといふ決意で、一路長春へ向つた。道々、滿洲の隅つ子に内地から茫漠とした夢を追ひかけて吹き寄せられた、あらゆる帝國主義國日本のルンペンと落ち合つた。

長春では、十ヶ月ばかり過ぎた。冬は再び春になつた。大陸の春は、飽くことのない田中の放浪心を唆つた。——ロシアへ、國境を越えて！

四月、田中功の乞食のやうな姿は、ハルピンの街に見受けられた。その時である。不圖した運命から、田中が大友鶴三郎と知り合ひになつたのは。大友もその頃は善かつた。妙くとも、あの支那ゴロのやうな長髪、關羽髯などははやしてゐなかつた。彼は、土木建築の請負師の下で帳付をしてゐた。食へなくなつた田中が、外套を質に入れたりして、たうとう轉ろけ込んだのは、長谷川といふその土木請負師のやつてゐる北滿電氣の工事場だつた。彼は苦力と一緒に寢起きして、同じ物を食ひ、同じ力業をやつた。ものの半月も働いてると、長谷川組の親方に發見されて、今度はその事務所で働くこととなつた。

大友と二人は、よく小錢を貰つては、鐵道線路に添ふた、日本人料理屋のごたごた立列んだモストワヤの淫賣窟へ出掛けた。ハルピンでは長い冬を過ぎた。土木建築の請負と云つても、主に滿鐵官舎宅のテニスコートを造るとか、二重窓を嵌めるとか、網戸を取附けたりする仕事なので、重い大工の仕事と云つてはあまりなかつた。時には、せいぜいトタン屋根のコールター塗りとか、東拓や朝鮮銀行の重役の邸の修繕ぐらゐが關の山だつた。

はじめ、實際つてゐると、大友といふ青年は、何を目録んでゐるのか一向に得態の知れぬ人間であつた。ここへ来るまでは、長春で反動新聞の購讀料をあつめて歩いてゐると云つてゐたが、そのせいか恐ろしく脅嚇的なところもあり、その癖妙に弱い者に同情して見たり、遊びの金に困ると應場に貸してくれたりした。言葉も、上海へ来てからはへんな壯士みたいな口調になつたが、その頃は同じ渡り者口調であつたが、わりにしんみりものを云つた。——金を貯めて支那で一と商賣するといふのが彼れの目的らしかつたが、それにしては道樂が過ぎた。

いよいよ田中が、自墮落な植民地生活を切り上げて、もつと大きい冒險に出よう、世界に渦巻く階級戦の中へ飛び込まうと決心したのは、ハルピンの單調な二冬を焦心り抜いて過ぎたあとであつた。彼を呼び醒ましたのは、彼自身の發奮からではなくて、寧ろその周圍の事情にあつたと云つてもいい



のだ。

露支協定があつてから、東支鐵道はソヴェート・ロシアと支那との共同管理に移されて、多数の赤色東支鐵道従業員がハルビンへ入り込んだ。赤色クラブも建つた。赤いネクタイのピオネールの男女が、棍棒を組んで日曜ごとに街額を進行した。その頃から、帽子をかぶらずに鞆を抱へてステッキを持つた、共産黨員らしいプロレタリア役人の顔も見えた。何となく支那官憲とソヴェート代表者達との間に、深い溝のやうな距りが生じて来た。新聞が『赤化』事件を捏造して報告する。支那官憲が無断でロシア人の官舎や家宅を検索する。メー・デーは禁止される。フーザテンでは、婦女工會の茶話會が斷壓される。——と、突如として、全世界のブルジョアを震撼させた五・卅事件が上海の一角から勃發した！

續いて、廣東の沙面事件！

上海紡績工の大ストライキ！

田中は、じつとして、わけのわからぬ大友の女の惚氣などに耳を傾けてゐられなくなつた。彼は、計畫的に方々から借金をして、百圓近くの金を持つて、ハルビンを脱け出すと、線路傳ひに滿洲里を

目ざして遁走した。曠漠として東支鐵道西部線の原野を、ものの一週間も徒歩した彼は、昂々溪に着いた。

驛には西瓜の山があつた。モンゴリア人の牧夫がうようよしてゐた。疲れた彼は、黒パンの固塊と牛乳を買ふと、ステーション前の公園へ行つてゆつくりと休みしようとした。

と、そこへ一團の支那人學生が襲ふて来て、物をも云はず田中を蹴倒して、前後不覺になるまで殴りつけた。

彼が正氣にかへつたのは、ステーション前の支那人巡警の小舎であつた。そこで、彼は不應なしに、再びハルビンへ逆戻りさせられた。腰掛のない苦力列車に積み込まれた田中は、もう一度ハルビンで下車すると、その夜發車するボクラニーチャナ行の切符を買つた。それは滿洲里とは反對の東部線で、そこから浦鹽へ線は聯結してゐたのである。

翌朝ボクラニーチャナに着くと、もう一と驛でソヴェート聯邦社會主義共和國といふ處で、一人の怪けな朝鮮人が彼に近づいた。

『もし、もし、貴方は何處から御出テすか？』



呼び留められたので振り向くと、その青年は意味ありけにやにやしなから、

『これからロシアへ御出テすか？』

と急所を突いた。

むつとした田中功は、

『お前は誰かね？——おいらはお前に呼び留められるわけではないんだ。』

と突撥ねた。

しかし、朝鮮人はどこまでも柔かくした手に出た。

『……もしあんたがロシアへ行かれるんテしたら、親切に御忠告して上ケたいと思ふんテすが、旅券も査證もない、日本人は、ロシアへ這入つたつて一歩も身動きは出来ないんテすよ、それに、この黒龍江沿岸のロシア人は、日本人のシベリア出兵以來、日本人と見りあ誰でも非道い目に會はせるから危険テすよ。この間もクー・ペー・ウーに捕まつた二人の日本人が、素性が怪しいといふ廉テロシア内地へ送られました、スパイの懸疑テすよ！ まあ、悪るいことは云ひませんから、引返して、本當に手續をなすつてから御出になつたらいいテせう。……』

田中は、その時の朝鮮人が、どこの廻はし者であるか、果して朝鮮人かどうか、何の目的であの荒涼とした驛に立番をしてゐるのか——それらの疑問を解決せずに、たうとう又ハルビン行の列車で逆戻りしなければならなかつた。……もうその時分には、大友はどこかへ行つて居なかつた。

窓の階下で、どつたんばつたんするので、窓から顔を突出して覗いて見ると、家の主人である支那人の家具屋とその嬢が、大聲で喧嘩をおつばじめたところであつた。支那人の喧嘩は正味よりも聲の方が大きい。

近所の女子供が、遠巻にして夫婦喧嘩を見てゐるが、一人の肥つた婆が田中の顔を指さして、何か大聲でわめくと、

『東洋——東洋人！』

とほかの女達も聲を揃へて、騒ぎ立てた。

『東洋鬼！』



10、不意の出来事

一一八

無花果のやうに蒼黄ろい小僧が、女達の間から憎々しげに叫んだ。

もう一度、田中は昂々溪で殴られた學生のデモンストレーションを懐ひ出し、皮肉な微笑をもつてひとかたまりの群集を瞰おろした。

10. 不意の出来事

びつくりして、田中の足は、石のやうに硬くなつた。

眼の前に丸太のやうな物がころがつた。誰かが駆けつけた。これが、と思つて、自分の足を踏み出して見る。それは動く。安心した。前に、人間の唸り聲がする。——すべては、ほんの一瞬の間に、一、二、三と號令をかけたやうに續いた出来事である。

眞晝の日光が、この不意の騒動を、わりに自然に、何でもないことのやうに見せてゐた。

『危いところだつたな！』

ほつと息を吐いて、田中は上海地圖を疊むと、ポケットへ入れて、用心深く眼の前に斃れた人間を

見た。

田中の記憶が正確であるとすれば、その人間は、今までごく平凡な馬褂兒を着て、普通支那人の歩くやうに、心持ち長めな兩袖口から指をあらはした手をやゝ放縱に振りながら、急用でもあるらしくさつさと先方を歩るいてゐたのである。てかてかした小帽と云へ、羅紗の支那靴と云へ、この人通りの多い街では、ほかのどの支那人とも見わけのつかぬ通行人の一人でしかないのだ。

その男は、一端どしんと倒れて、今度はごろた石のサイドウォークへころけ落ちて、はげしく全身で何かへしがみつかうとするやうに悶えたと思ふと、

『………萬歳！』

と叫んで、片腕を空の方へのばし、眼をその支那墓へ遣つたと思ふと、もう一度寢がへり打つて、静かに斃れたまゝになつた。まるで、崖からあやまつて滑べり落ちた人間が、枯草か何かに手を差し出して、そのまま顛落したやうな恰好である。

夥しい血が、男の胸部から湧いた。

『誰だ？』

10、不意の出来事

一一九



一人の男が、もう一人の男に鋭い聲で訊ねた。

訊ねられた方は、暫らく無言で、前踏みになつて、斃れた男の胸へ手をやつてゐた。やがて血みどろな手に、彼は一個のぴかりとする物體と、無数の紙片とを引摺んで立上がつた。

「洪震だよ！」

彼は、相手に、書類の束を見せて云つた。

「洪震——？ 井産黨の洪か？」

「さうだ。」

「ど偉い奴を仕留めたな！ 千元だ！」

云はれた方は、無表情な支那人特有の肥つた頬に、大きい唇を見せてけらけら笑つた。二人とも官服を着て、腰に革帶をしめてゐる。巡警である。

見る間に三四十人の群集になつた人垣を、二人は優越的に見廻はしたのち、橋の方から疾驅して來る一臺のタキシシーにむかつて手を舉げた。タキシシーは、群集を二つに分けて、巡警のわきで停まつた。二三語の押問答があつたあとで、巡警の一人が威嚇的に運轉士の頭を毆ぐりつけた。

運轉士は、ちよつと眼に角を立てたが、やがて、捨鉢な手付で背後のドアをぐいと開け放つた。

肥満した二人の巡警が、人間の動作を營まなくなつた人間を、無雜作に押しこめて、タキシシーの奥へ詰め込んだ。そして、一人がその側へ乗ると、他の一人は自動車のサイドに立乗りして、何やら町の名を呼んだ。

次の瞬間、その自動車は、きらりと車體に日光を反射して大通りを横へ見えなくなつた。——パンの背をならべたやうなごろた石の上には、糊のやうな濃い血が流れてゐて、ひとりでに石塊と石塊との間に、赤い糸になつて低い方へ傳はつた。

自動車の影が消えてから、田中は急に、斃れた男の「む、む——」といふやうな唸り聲を、はつきり懐ひ出した。そして、「これが、上海かな？」と考へた。

何を萬歳と云つたのかわからなかつたが、いづれ共產黨員であつたとすれば、叫ぶことは一つしかないと思はれた。

田中は、俄かに複雑なものに考へられた、日光の下の群集を、蒼い顔で見廻はした。或る者は、眼だけ爛らして、口をだらりと開けてゐた。或る者は、眉根に八の字をよせて、群集の



一人一人を眺めてゐた。二三の若い者は地端に踢んで、血の痕を噴めてゐた。すこし離れて、舗道の上にある四五人は、その壁に貼つてある白い紙を讀んでゐた。白い紙には、大きい活字で、  
「格殺勿論」

といふ字だけがはつきりした。

田中は、酸っぱい液がこみ上げて来るやうな氣がしたので、そのまま涉るき出した。すこし行くと、背後から、誰かが日本語で呼び掛ける氣配がした。耳に這入る音響が、どれもこれも支那語である時、よしそれがどんな不明瞭な言葉でも、母音の多い日本語は滅多に聞き違ひすることはなかつた。

「どうも良く似てゐると思ひましたが、やはり貴方でしたな。」

かう云つて、笑ひながら追ひついて來たのは、黒枠眼鏡の岡部であつた。ぎよつとして、田中は赧くなつた。

「今人殺ろしがありましたね、」

彼は、狼狽を紛はすために、あはててそんなことを云つた。

「見ましたよ。仲々支那の警察もやりますな。何も云はずに、ずどんとぶつ放すんですから、すこし野蠻ですね。」

歩るきながら、岡部も相槌を打つた。いかにも、對手を釣り出すやうな話振りである。

それから、二人の間に氣のつまるやうな沈黙があつた。

「今日はどちらへ？」

ものの五六間も歩るいてから、岡部がかう云つた。來たなと、田中は思つた。

「どうも、思ふやうな仕事がないので、かうして上海見物をして居ります。」

「おや、貴方は、何か新聞社とかの就職口が御有りだつた筈ぢやないですか？」

田中は、はつとして、繼ぎ足した。早いものだ、直接交渉がなくなると、このスバイに云つた出鱈目をもう忘れてゐたのである。

「あの仕事ですか、あれは、來て見ると案外面白くないのでしてね、たうとう知り合ひの奴と喧嘩をしてやめつちやいましたよ。」

「仲々氣が疾いですね。——そりやさうと、この間の晩、たしか貴方かと思つたんですが、あのユー



カリといふカフェがありますね、あそこでちらと御見受けしたやうな気がしますが、さうぢやなかつたでせうか？——」

やはり同じ齒で食ひしばるやうな物の云ひ振りである。圖星を突かれた田中は、思ひ切つて立留まつて、相手の顔をじつと眞面に見据ゑた。岡部も、思ひなしか、すこし氣色ばんで、眼鏡のむかうから田中をじいと思返へした。田中の顔には颯と血がのほつた。

「——糞ッ、あなたといふ人は、どうしてこのわしのことを一々聽きたがるんかね！ いいよ、わかつてる。あなたがどんな商賣だか知つてるさ。これから、わしはあなたの用のあるところへ行かうぢやないか！ 行つてすつかり何も彼も云つちまへばそれツきりのものだ。こつちに何も暗らいことアないんだから、いつだつて日本へ照會すりやわかるさ。さア行きませう！ 連れてつて下さい！」

岡部は尠からず意外であつたらしい。しかし、その瞳が二三度くるくると廻轉しただけで、彼れの表情は別に變らなかつた。

「ど、どうしたんですか？ 急に、又、そんなことを云つて、ははア、この僕が貴方をどうかしようとも考へて居られたんですね。貴方は、ちつとばかり神経が昂ぶつて居られるんぢやないですか？

——僕は、貴方の考へられるやうな、變な職業の者ぢやありませんよ。どうも可怪しいね。」

「だつて、林幸作のことも貴方は知つてるぢやないですか、それから、あのカフェへだつて來てるたぢやありませんか！ 今日だつて、いつの間にかわしの背後に立つてゐたでせう！——何の爲めにそんなことをするんですか？ わしをそんなに怪しいと思ふなら、領事館へなりと何處なりと行きませうよ。」

語氣がすこし荒かつたので、支那人の通行人が四五人立停まつて見かへつた。岡部は兩手を差し出して、田中をくるりと前へ向かせて、和らげるやうに云つた。

「誤解だ——誤解だ。さア、こんなところで立つてゐたつてしようがない。そこまで一緒に行きませう。その公園がいい。」

押されるままに田中も歩き出した。

「俺にアちやんと直感でわかる！」

彼は、燃え上がった怒りの持つて行き場を失つて、獨り言のやうに呟いた。

「とすりや、貴方の直感が、一度だけ間違つたことになりませう。」



この言葉は、暫らく田中に物を考へさせた。

岡部は鐵柵の塌きたところで、低い門へ出ると、門脇の受付で銅貨を十枚ほど拂つた。その傍のベンキ塗りの立札を何氣なく讀むと、英語で、

「犬と支那人入るべからず」

と書いてあつた。

同じ文句が丁寧に支那語で反語されてあつた。

「畜生ッ、非道いことをするもんだな！」

「これですか？」岡部は園内へ這入りながら同じ札を指先で弾いた。「これだから、支那人が外國人を殺したり、ストライキをやつたりするんですよ。」

綺麗に刈り込んである芝生は、この季節でも青々としてゐて、その上に眞赤に枯れた木の葉がしきりに降り積いだ。微風に誘はれて、落葉してゐる木は、まるで一刻も早く着物を脱いでしまはうとしてゐる人間のやうに見えた。セメントの徑を歩るいてゐると、陽を浴びた方が熱く、河にむかつた方は冷え冷えとした。

長く幾通りものベンチを置いた河岸には、絶えず水の撥ねる音がして、その向ふには黒い鐵管のやうな荷物船が無數に繋がつてゐて、一艘つづ別々な動きを圓い船體に見せてゐた。

「まあお掛けなさい。——で、どうして貴方は、この僕をさういふ風に考へられたんですか？」

あらためて岡部は眼鏡を指先で震り上げた。二人はベンチへ腰をおろした。

「さあ——別にこれといふこともないんですが、ともかく、貴方から貰つた名刺ですがね、ありや心當りを訊ねてもそんなものがないといふ話ぢやありませんか。」

今度は先方ですこしうろたいたらしい。

「あの北四路の番地ですが、あれは、實は、店を任して置いた支那人が最近行方不明になり、おまけに目ほしい物はすつかり賣り飛ばされてしまつたので、閉ぢてしまつたのですよ。閉店と同時に、あの通りの區劃整理とかで、家主が賣るとか賣らぬとかでゴタゴタしてゐるさうです。ですから、僕は目下のところ浪人で、フランス租界のホテルに住んでゐます。そんなこんなで、もう一度船の出次第僕は日本へ歸らにアならんと思つてるところなんですよ。」

さう云はれて見ると、別にこちらからさうでないと押切つて反駁するわけにも行かないので、田中



は頭を下けた。

「それぢや失禮しました。どうも船でお一緒になつた時から、實は、下らないことを想像してゐるたもんですから。」

「下らんことと仰ると、どんな人間と僕を見て居られたのですか？」

「——その警察の方の、」

「刑事ですか？」

「まあ高等の方の——いづれ下つ端ぢやないとは思ひましたが。」

岡部要之介といふ男は、容易に感情を表はさない人間と見えて、よほど可笑しかつたにちがひないが、ここでも齒を食ひしはつたやうな口元から、微かにくすりと息を洩らしたに過ぎなかつた。

「すると、貴方御自身に、何かかう日本の警察——高等ですか、その方面を警戒する必要がお有りなんでしょうか？」

「いや、今だから御話しますがね——」田中はかう云つて、煙草にマッチを摺つた。それから、ところどころ省略しながらも、ハルピンの出来事や、自分の満鮮放浪時代のことなどをざつと話した。

「わしといふ奴は、こんな具合で、何一つ自分の思ふところへは行きつけないで、その外側ばかりぐるぐる廻つてる人間なんでせう。——何と云ひますかな、つまり空想に憑かれてでもゐるやうな。」

その間、無言で聽いてゐた岡部は、急に眼を上げて田中の思ひも及ばぬことを訊ねた。

「今日あすこで殺された、あれが共産黨ですよ、知つてますか？」

「さう云つてました。」

「貴方は、ああいふ風になりたいんですか？」

「さア、なりたいとは思ひませんが、あの男だつてなりたくはなかつたでせう。——ただ運動をしてゐりや死は覺悟してゐるでせうが。」

「貴方に、その覺悟はありますか？」

「わしといふ男は、そんな覺悟を持つほどの仕事を持つてないんですよ。」

「だが、あんな横死を遂けても、猶無産階級のために盡す決心がありますか？」

「實際その中へ這入つて働けるやうになりや、わしだつてこんな厄介な生命なんか何でもないです。」



『そりや眞實ですな？——』

硬い唇の間から、かう念を押した岡部は、じろりと田中の顔を窺がつた途端に、何かしら異様な閃きをその瞳に見せて、すぐ傍を向いてしまつた。

『どうです、あの一家族の勞働振は？』

彼はかう遊戯的に云つて、黄浦江の澁のやうな水を、五人の親子らしい支那人家族が、一艘の大きい傳馬船を漕いで行くのをステッキの尖端で指さした。父親らしい辮髪の男が揖を取ると、その妻らしい女と二人の男の子が艫を押し、婆さんは洗濯物を取入れてゐた。甲板と云はず屋根の上と云はず足踏みも出来ぬほど積み載せられた白菜が、四邊の枯れた景色に、眼の醒めるやうな鮮かさで動いて行つた。その黒塗りの、圓るみを帯びたへさきの滑つて行く方向には、斜な日光を浴びて、錨をおろした軍艦の列が、重さうにマストを揺りながら碇泊してゐた。

『貴方、一體、どなたですか？——知らして下さい。わしは決して多言なんかしませんよ？』

田中は、すこしせき込んで、對手の方へにじり寄つた。

『僕？——僕は、先刻も申上げたやうな一個の商人にしか過ぎませんよ。ただ、普通この邊に小店を

持つてる商人よりは、いくらか新しがりやであるといふだけです。』

『嘘だ。わしの直感もものを云ふ。』

『その直感が、既に一度まちがつてゐたではないですか？——兎も角、貴方には非常に物をローマンティックに考へたがる癖がありますね。それは、實際に何かの仕事を見つけてゐないからぢやないですか。御働きなさい！ それから、御序の節、もしあちらへお出でしたら、僕はかういふホテルにも四五日は居りますから御訪ね下さい。——何か、又、御手傳ひが出来ないとも限りません。』

田中は漢字と英字とで印刷した、氣取つた名刺を掌の上に發見した。

## 11. 義 豊 里

田中の窓の下の袋小路は、そこだけで古るい支那みたいなものだつた。

外形から説明すると、表の病院のある通りが氣紛れに、小半町もそこへ横丁を造つたと云ふまでのもので、謂はば盲腸みたくに餘分な格好をした町である。支那風な門壁を這入ると、すこし曲りくね



りながら丸石の敷道が何かの倉庫のやうな高い煉瓦壁の下を傳はつて、殆ど家と家の廂が額を突き合はせるところで行詰まりになつてゐる——これが義豊里なのである。

従つて、家の数もものの二十軒とはない。そしてそのうちの最も大きい建物と云へば、田中の二階を借りてゐる家具屋禹平珍の、世にもみすほらしいまつ黒な破ら家である。

すべての物が、この町へ來ると、禹平珍の家で行き停まりになる。風でも、物賣りでも、悪戯小僧達のゴム毬でも、仲買人でも、上海警察の布告でも——。そこで、日本ならば疊の五つも敷けるかと思はれる小部屋から、田中は、興味さへ感ずるなら、一日でも町の動きを観察してゐることが出來たのである。

裏通りとこの袋小路を繼なく支那風な厚い壁の門には、處から不必要に思はれるほど仰山な鐵柵の門扉があるが、その閉ざされることは絶対にないと云つていい。門のすぐ側の右手の煤ほけた家は駄菓子や蓮の果などを賣つてゐる小店で、その隣は素性の知れぬしもたやになつてゐて、どこかの商館にでも勤めてゐるさうな中年の男が、朝になつて新聞配達が新聞を持つて來る時、「申報」を受取りながら表の方へ出て行く姿が見受けられた。

次には、物置同然にいつも戸の締まつてゐる腐れ小舎がある。この小舎から、毎朝、一人の老人が木の箱と木の馬を肩にして、どこかへふらりと出掛ける。老人は夜更けでないと歸らない。

その地續きの、何かを取り毀はしたあとらしい空地をへだてて、藁の間に箒草のやうなものを茫々と生やしてゐる六棟の長屋が數へられる。これらは、はつきり家根を戴いてゐながら、往來から見ると十戸にも十二戸にも別れてゐて、どこの家に誰が住んでゐるのかもはつきりしないほど、軒下も土間も壁も共通してゐるのだ。長春やハルピンなどにある土方小舎をすこし古く、家らしく見せてゐると左程にちがひがない。この町から、日夕どこかへ出稼ぎに行く苦力達の巢なのである。町の右側は、これで禹平珍の家になつて留まりである。

反對の側は、大部分が倉庫めいた、憂鬱な煉瓦の壁で占められたあまりを、古道具屋とか、鑄掛師とか、葬儀用の棺箱を拵へる大工とか、綿屋とかがうぢやうぢや押し合ひへし合つて、行留まりまでつづいてゐる。何と云つても、この並びで一番人氣のある店は、禹平珍のすぐ左隣りの、残飯を粥にして賣つてゐるめし屋でなければならぬ。

總體で、これらの家々に住む人間は、近所の大きい町に兩側から押されてぺしやんこになつてゐるの



で、家の中に人間と商品を藏つて置く餘裕がないので、いつも町の三分の一ほどの場所へ膝を乗り出して生活してゐるのだ。しかも、その町と來たら、狭くて、暗らい上に小便臭くて、工部局の掃除人などは月に一度來るか來ないかといふほど不潔なので、いつもごろた石の上にはびちやびちや尿水が溜つてゐる、あらゆる種類の紙屑が軒下から軒下へと絶えず移動してゐるのである。

六軒長屋の向ふの間の空地は、この盲腸のやうな町の唯一の塵埃棄却場であつて、いつもうづたかい穢物が、けもの、内臓みたいな悪臭を放つてゐる。——そんなでありながらも、底の知れぬ支那の貧乏の奥から、夜となく晝となく、無数の襤褸布を着た人間がやつて來て、この貧乏人の滓だけ残つてゐる塵埃溜をせせり廻すのである。

こんな狭苦しい義豊里に、人間の數が百五六十人もゐて、それが、二六時中一方口の廣い通りから何かを漁りにここへやつて來る無数の通行人や、物賣りや、乞食小供の類といつしよになつて騒ぎ立てるので、そのやかましさと云つたら一と通りではない。

すべてこの近邊の噂といふものは、ここから糞溜を飛び立つ蠅のやうな勢ひで、四方の町へ飛んで行つた。もともと、むづかしい文字で書いたり、文字を通じて考へたりするよりも、こここの住居人達

には、口でしやべつて耳で聞いた方が、物事が早くわかつたらしい。めつたに仲間入りをすることのない、角から二軒目の勤め人らしい男以外には、新聞などといふものを絶対に讀むことのない彼等は一切のことは口傳に解釋した。そのせいか、聴きつけることも敏感であつたし、それを他人へ傳へる術にも長じてゐたらしかつた。

わけても、一切の流言の策源地となつてゐるのは、めし屋の店であつた。

めし屋は、山東人らしい頑強な男と、尻の大きい、家鴨そつくりな恰好をしたその妻君と、うす汚い小僧との三人家内であつた。田中は、夜になると、この店の夫婦が揃つて南京米袋を肩にして、どこかへ出掛けて行つては、夜おそく二人で背負ひきれぬほどの残飯を、力かぎり根かぎり店の中へ運び込んで來て、朝までにそれを大鍋の粥にしてしまふのを目撃した。いつも、南京米袋は、途中に流れ出た粥のためにぐしよ濡れに濡れてゐて、夫婦の背中には、白い糊のあとがべつとりついてゐた。これは、どこかの料理屋とでも特約して貰つて來るのにちがひない。——ともかくも、さうした廢物が、朝になると、葦やら、菜つ葉やら、豚の臍物やら、腐つたやうな豆腐やらを切刻んだ一と通りの粥になつてゐて、ぷーんと食物らしい香りを放つと、それを慕つて、袋小路のそちこちから猿の掌の



やうに硬ばつた手に銅貨を敷へながら、苦力や婆さん達や子供の群が店先へ殺到するのである。( )  
煤つほけた、壁の落ちないやうに丸太で支へた洞穴のやうな店には、三列のベンチが据ゑてあつて、ほど良い場所に年功で黒く光つた餉臺が横はつてゐる。そこへ陣取る苦力達や、近所の衆は、三枚の銅片を置いて一椀の粥を貰ひ、澁のやうな茶を樂罐から注いで、世の中のあらゆる新現象について話し合ふのである。食べ終つた者がさつさと歸ればいいが、話に果が入ると、めし屋の前が一杯に人だかりのするほど椀と箸とを抱へた人間が立つてゐて、直立状態で粥を啜つてはしゃべり、手振身振をしては箸を動かすといふ光景なのだ。

大概のものが、このめし屋の厄介になるのだが、禹平珍の一家と、棺桶屋の大家の一家とだけは、妙な虚榮心から、そこで食事をすることはなかつた。かういふことは、支那人の封建主義的偽善だと云はれてゐる。しかし、禹平珍一家が、よしそのおかすは鹽鱒の切身一つであらうと、往來へ向いて、これ見よがしに白い飯を掻込んでゐるところは、内心いかに満目の貧困のうちに自分達はそれに敗けてゐないんだぞ、と、經濟的優越感をもつてゐたかがわからう。よしんば、棺桶屋の嬪に、めし屋の店先のもやしの煮付だの、白菜の漬物だの、太刀魚のあらなどが見えようと、彼女の食卓には徒

弟と三人で十分に食へる一鉢の肉片湯があつたではないか！

そして、このことは、決して家具屋と棺桶屋とを、この袋小路からブルジョア扱ひさせて、仲間外れにさせたのではなかつた。彼等も、同じ時刻に食事をすれば、めし屋の餉臺にむかつて、箸を動かし、口を開けて、どんな話題にでも自由に参加することが出来た。そして、それと同じことが、めし屋の一家の食事についても云はれた。彼等は客の食べ物である粥には滅多に手をつけなかつた。それは商品である。商品にはそれだけの尊敬を拂ふ必要があつた。そこで、めし屋の家族も、客とは別な白飯を禹平珍や棺桶屋の方を向いて、これ見よがしに掻込む自由と自負心とを持ち得たのであつた。雨でも降り出すと、めし屋には、湯氣と、人いきれと、阿片臭い空氣と、話聲とが一日ちう立籠めてゐた。知らない人が來たら、こんなところにも茶館があつたかしらと怪しんだかも知れない。さういふ日には、きつと表の木の馬を背負つて出掛ける老人も一座の中に加はつてゐることになつた。一度、寶昌路の通りをぶらついてゐると、田中は、この老人が街の一隅に立つて、熱心に豆本を讀んでゐるのを見受けた。傍らには、例の木の馬があつて、それに組立式になつてゐる木の箱を棚にして、小型の石版刷の繪草紙や、續き物の小説などが載せてあつた。それから以後、田中は、この老人



をも町のインテリゲンツィアの一人として考へた。

老人は、物置同然の自分の家よりも、勿論、賑かなめし屋の方を好んだ。雨の降る日に、噺れてはゐるが、どこか氣品のある聲で、小説や軍談などを、苦力達に續んで聴かせてゐるのをそれとなく耳にする田中は、こんなのが清朝時代の儒者といふものであつたらうと想像した。

一體かうやつて、毎日々々同じ顔を突合はせながら、彼等は何を物珍らしさうに、事改まつた聲で話し立てるのだらう？——かういふ疑問は言葉がはつきりわからなければわからぬほど、他國人の心を撲つものである。

よく耳を澄まして聴いて見ると、それらの話題は、大概、嫁入の行列だとか、その配り物だとか、棺桶屋の註文はどこから来たのかとか、昨日は米を少し荷揚の時抜き取つたとか、漢口にストライキがあつたとか——やはりそれ相應な時局問題をも引くるめて、各人各様に、それぞれの驚愕と、新しい發見とをもつて、わいわい報告し合ひ討議してゐるのである。たまに、この雑談の洪水の中に、政治的な問題が加はつたとすれば、それは誰かの讀んだ新聞の記事とか、他人に聞かされたピラの内容とかの、又聞きのままを秩序も前置もなくほつんと傳へるのであつて、いい加減な時が経つと、他に

波紋を描いた石のやうに再び取り上げられるといふことはなかつた。

よく觀察すると、この町の住居人は、どれもこれも目前の現象にだけ非常な狼狽や恐怖を感じるであつたが、その騒ぎが濟むと一切をけろりと忘れる風習を持つてゐた。その代り、一度、何かの事で騒ぎ立てたら、實にしつこく、繰返へし繰返へし同じ言葉を大きい聲で云つて見たり、小さく囁いたりして、つとめて自分達の感動を揉み消すまいとするのであつた。

田中は、いつもこの一團の群集の傍觀者であり、傍聽者であつた。彼は、どうにかして彼等とへだてのない氣持で交際して見たいと思ふのだが、自分のかたくなな自負心と、日本人であるといふ意識とがすくなからず邪魔をして、思ひ切つてめし屋の餉臺まで進出させないのを齒痒く思つた。それに、考へて見ると、彼等と同じ生活をしないことが、何よりも双方の共通を缺いてゐる主な原因であつたらしい。

或る晩、すこし近所で酔つぱらつて戻ると、表の門壁のところ、どやどやと仕事から歸つて來る苦力達といつしよになつた。

『東洋。』



擦れちがひさまに、考へたことをすぐ口に出して云ふものもゐた。

「オハヨウ！」

日本人慣れのした男が、かう云つて擲擲つたりした。

素足で露地の小便溜りの上を、びちやびちや音を立てて過ぎ去つた彼等のあとには、垢と大蒜と脂汗の臭ひが、尻尾を曳くやうに漂つた。

カンテラで燻つた、寢床のほかには何一つ見えない六棟の家の壁を思ひ出しながら、ちよつとどう呼び掛けていいかに迷つた田中は、黙つてそのあとからついて行つた。

彼等は、その足でいきなりめし屋へ這入り込んだ。續かうか續くまいかとためらつてゐる矢先に、禹平珍が夕飯の卓からこちらを覗いて、

「や、今晚は遅いね。」

と大聲で呼び掛けた。

田中はきまり悪くなつて、そのまま自分の家へ駆け込むと、仰山な身振で、  
「酒を飲んだからな。」

と告げた。

「ほ、頂好！ 頂好！」

額も顔も四角な禹平珍の女房が、煽てるやうな聲で彼れの背後からはやし立てた。田中は、この女房が次の拂ひに、家賃が滞つた時どんな顔をするかを心に描いて、大急ぎで二階へ上がった。

朝になつて眼を醒ますと、苦力達は、もう小舎をあけて仕事に出拂つてゐた。長屋の前には、いつも留守居役として残つてゐる、「リヤング」と呼ばれる爺さんが、擦り切れたささらで糞桶をがらから掻き廻はしてゐた。

「おい、みんなは、どこで働いてるんだね、リヤング？」

田中は立停まつて訊ねた。

その聲に怯えたやうに、金尊らしい老人は一足あとへ退きつて、頭を振つた。

「知らねえ！」

「夜になつたら遊びに来るが、いいかね？」

「知らねえ。」



はつきりした人種観も國家思想もないのだが、かういふ連中は、本能的に異人種を恐れたり嫌つたりしてゐるのだ。

その日は、日華紗廠といふ紡績會社の缺員募集の廣告が邦字新聞に出てゐたので、押掛けて行くと、三人の缺員にもう三十人からの日本人が受付から廊下まで一様に立塞つて待つてゐたのに面喰つて呆れて歸へつて來た。

「俺は、一體、何しに支那へやつて來たのか？」

「當り前さ、支那の革命へ近づきにやつて來たんぢやないか！」

「そんなら、さうらしく、もつとはきはきしろい！」

「だつて、これから食ふことも心配だ。正月を控へた寒空に外套一つないさまぢやどうとも出來やしないぢやないか！」

「しよりのねえ奴だな、何でもやれ。土方でも、車引でも何でも出來るぢやねえのか。」

「——まあ、待て、困りや俺だつて一仕事するわい。さうあはを食はずに、もうすこし周圍を見廻はすさ。」

「そのちんちくりんな洋服なんか脱ぐんだな。支那人みたいな上衣とズボンだけで澤山だ。それに支那靴と——」

「ともかく、俺には支那のプロレタリア運動へ身を投ずるといふ決心はこんなに堅いんだから、それを受入れないといふ法はなからう。——一度はボクラチニーヤナの國境で弾ねつけられ、もう一度は東京の學生主義者に問題にされなかつた、が、今度こそ三度目だ、どうにかなるさ。今に見とれ！」

楊樹浦の通りを、ゆきすりの黄包子に冷やかされながら、田中功は、悲痛な氣持で、こんなモノローグを心の中で繰返へして來た。

そして、屠殺場へ立寄つて見たり、蘇州河の荷役を見たりして、義豊里に近い安料理屋で晩めしを済ますと、重たるい氣持で家へ足を引摺つた。

「さうだ、明日は、岡部さんそこへ行つて見よう！」

岡部と別れてからも四日ほどになつた。何かしら先方の意味ありけな言葉が、どこかまだ田中の心に一本の糸のやうに引絡まつてゐた。——いづれにしろ、あの人物の正體を見届けることだけでも、ひろく何でも見て置かうといふ田中の主義には反しないことである。



『やア、オハヨウ！』

めし屋の水浸りになつた丸石の舗道に大きい影が動いて、苦力の一人が、通せんほのやうに腕を突き出した。何気なく店の中を覗き込むと、六七人の苦力がブリキ罐で酒を温めながら廻し飲みをしてゐるのに眼が留まつた。

『酒か——？』

『老酒さ——老酒さ！』

一人がはしやいだ聲で叫んだ。もう酔つてゐるらしい。しかし、支那人は酒の上だけは安心だ。日本人みたいに、酒を飲んで喧嘩を吹掛けるなどといふことは殆どない。

『何かあつたのかね、御祭でも——？』

田中は、その場のにぎやかな空気に同化されて、思はずベンチへ掛けてゐた。

『おい、ボーイさん、老酒を一本買ふて来い！』

かう云つて、彼は店の小僧に二角の銀貨二枚を投つてやつた。めし屋の夫婦は、例の買ひ出しに出たかして留守だつた。

『ストライキさ！』

『オハヨウ』専門のあばた面の巨漢が、頓狂な聲で叫んだ。小僧は、何かその男に訊きかへしながら、表へ出て行つた。

『どこの？』

『碼頭だよ。』

田中は、思はず聴耳を立てた。

『賃銀のことでかね？』

すると、もう一人の、坊主のやうにつるつると頭を刺つた男が答へた。

『勿論。俺達——一人について苦力頭から五百文づゝ頭をはねられる。——収入を考へて見てもら

ん。——鐵石炭一噸運ぶ——銅片三十枚だ。だから一日どうしても八噸ぐらゐる運ばねえとめしが食へ

ねえ。——あぶれが月に七日と八日はきつとある。一ヶ月どうしたつて十五六元は必要——たつた十

二三元手に這入る——一體どうして生きて行くのか？』

すると、もう一人が更らにその言葉を強調するらしく、手を振つて説明した。



「俺達働く——損する——何の爲めに働くか？ 働く、儲けるのは買辨と頭、俺達働くの休めて見ろ——買辨と頭困る。その時、頭はねない。よろし。又働く。——さうでないと、どうして生きて行けるか、皆知らない！」

「オハヨウ」が附け加へた。

「俺達一千人——組合になつてゐる。一千人明日から汽船の荷物おろさない——船大變損する。金持の船 損するのは構はない。俺達人間食ふものがない——生きられない——金がない。金持の船とちがふ！ だから、ストライキ！」

田中は、眼の前に、陽に焼けた、さほど賢くさうでもない、その或る者は動物的に獐猛な顔をさへしてゐるこの日傭労働者の群に、かうした鞏固な階級意識があらうとは思はなかつた。

「組合は何かね？」

「上海總工會。」

一人が白い歯を見せて叫んだ。

小僧は買つて来た酒と剩錢を田中の前へ差し出した。彼は、瓶の口をあけながら、小僧に飲む眞似

をして見せると、苦力達はにやにや笑ひ出して、しきりに田中の噂を低聲でやり初めた。

すると、今まで黙つて隅つこに引込んでゐた、一番年少らしい青い顔の苦力が、うるさそうに仲間の話をつつて五本の指をひろけながら田中にむかつてかう警告した。

「日本人——五・卅事件知つてゐるか？——東洋の資本家最悪だ。俺達これから外國の金持を支那から追拂ふ。そのため闘ふ。戦争する。其時、お前、味方になるか？」

田中は大部分の細かい意味を失つても、言葉の輪廓だけは擱んだので、にやりと笑つた。

「味方だ！ 打倒土豪劣紳だ！——打倒帝國主義だ！」

「好！ 好！」

そこへ、暖められた老酒が、三つの空き罐に分配されてあらはれた。

「乾盃！」

田中が茶呑茶碗を取り上げると、二三の者は立ち上がり、又ほかの者は意外な出來事に出遇はしたやうにかう囁いた。

「老酒！ 老酒！」



この時、心配さうな顔をして、闇の中から、うつそり店のカンテラの光に、吝嗇家らしい顔を突出したのは、家具屋の禹平珍であつた。

## 12、林幸作といふ男

岡部要之介の名刺の指定してゐる場所は、霞飛路の中央旅社であつた。

田中は、傳單と警察の布告との入り亂れて戦争をしてゐるやうな街々を、黙つて傍目もふらずに急いだ。——これは、上海にすこし慣れると、自然と覺えたことだが、一々道傍の黄包車の掛け聲に氣を取られてゐた日には、いつかはその一臺に乗らなけりやならぬことになるのである。黄包夫だつて注意もしない人間にどこまでも乗用を強請する筈はないのである。

中央旅社は、支那人經營の旅館ではあつたが、田中が飛び込んだ馬孟飯店などと比較にはならぬほど洋化してゐた。受付で訊くと、番號を教へてくれたので、その二階の「二十七號」室を尋ねて行くと、廊下の支那人ボーイが、案内してドアをノックしてくれた。

「名前は何かですか？」

ボーイは英語で訊いた。

「タナカ。」

稍あつて、ドアが内から細目に開かれて、全く見も知らぬ日本人が、そつと眼だけを覗かせた。

「何だね？——何か用か？」

これも英語のきつい口調でボーイになじるのであつた。

「この方に、御面會。」

「面會？——」日本人は半身を扉口にあらはした。二三寸の隙間から見たとはちがつて大柄な、髪を短かく刈つた、手裏劍のやうな細い眼付の男である。

「はて、ちがつたかな？」

田中は、ぎよつとしてボーイを振り返つた。

先方も、意外な面持で、ろくに電燈の届かない小暗がりから田中の様子を窺つてゐるたが、やがて、腹の底から出るやうな錆びた聲で疊みかけてかう訊ねた。



「貴方——どなたですか？ 誰に御面會ですか？」

「いや、間違ひでしたら御免なさい。わしは田中ちうもんで、こちらに御滞在の岡部さんに御目にかかりたいので上がったわけなんです。御在でせうか？——岡部要之助さんです。」

「岡——ふむ、わかつた、岡部君ですね？」

この人間の癖らしく、ちよつと小首を捻ねると鼻柱に無数の小皺が寄つた。

それから、取次の任務をはたしたと思つて、廊下のベンチの方へ取つて返へすボーイを見つけて、彼は、もう一度ぶつきら棒な英語を使つた。

「面會の人は、必らず帳場の電話で一應こつちの都合を訊ねるんだぞ！ 断りなしに人を上げちやん可ん！ わかつた？」

ボーイは、水を掛けられた仔犬のやうに、小腰を屈めてすごすごと自分の席へ戻つた。

「岡部要之介君は、只今非常に多忙ですが——何か御用なら私が承つて置ませう。」

その男は、「岡部要之介」へむやみと力を入れて、のしかかるやうに、扉口へ立ち塞がつた。どこか「二十七號」の内部で、西洋人らしい聲で、何かを話してゐるだけはひがした。

「では、やはり御在でなんですね。わしは部屋をちがへたかと思ひまして。——何、なんでもないの、ほんの通りすがりに御寄りしたままでですが御忙しいのなら、又後で御伺ひします。」

「はて、可怪しいな。岡部君が貴方——田中さんでしたな、貴方と御會ひする約束でもあつたんですか？」

「いや、別に約束といふ程のことではないので。」

「何か御持ちですか？——紹介状とか、その、名刺とかいふものを……？」

「名刺なら戴いて持つてますが。」

田中は、内のポケットから、霞飛路十三番地中央旅社とした、岡部の名刺を取り出した。

「——ぢや、ちよつと待つて下さい。田中何と仰言るんですか？」

「田中功です。」

「都合を訊いて見ます。——今、取引上の話で随分忙しいもんですから……」

かう云つて、刑事然とした壯漢は、手首に力を入れて扉を締め切ると姿を隠した。

廊下には、どんな西洋風なカーペットも、ドアも、掩ひ切れぬ阿片の臭ひが、破船に水の浸み込む



やうにどこからともなく流れ出た。田中は、噓をしいしいその邊を歩るき廻つた。

『二十七號』からは、容易に人の出て来る様子がなかつた。ボーイは、ベンチと壁へぎこちない角度を作つて、居睡りをしてゐる。しきりに阿片の臭ひが、どんよりした空気を犯して、底から底から湧いて来る。……

と、誰かが、階下から、疾足に、カーペットを敷いた階段を踏んで来るのが聞えた。人間がこの二階へ上がつて来るには、階段を歩いて來なけりやならぬのは當り前の話だが、すこし苛々しかつた田中の神経に、その蹙音が妙に氣に觸つた。

振り向いた途端に、田中は、阿片の臭ひも、蹙音も、その前のいろいろな物の感覺も、すつかり吸ひ取られたやうになつてゐる自分を感じた。——彼は、眼の前に近づいて來る一人の紳士體の日本人を、魅せられるやうに瞞めてゐたのである。

鼠色のエロア帽をまぶかに被り、細身のステッキを突いた、やや蒼白い中肉中背の男であつたが、階段を上りきると、歩調をびたりとゆるめて、平常通りに振舞つたのが、いかにもわざとらしく思はれた。それといふのも、先方は、田中の姿を廊下のまん中に發見したからであつた。

支那人ボーイが眼をあけて、立ち上がった。ボーイが何か云はうとした時、一步先んじたのは田中であつた。

『もしや、貴方は、林さんといふ方ぢやありませんかね？』

非常に驚きが、先方の顔に見出された。

『どうして——いや、全くちがひますが……。』

『いや、貴方は、林幸作といふ方にちがひないと思ひますがな。——ごらんなさい、このわしの顔を。わしは自分で自分の姿恰好はよく知つてます。あんたのために、一度なんか途徹もない拷問にかけられたことがあります。貴方とまちがへられたんですよ。ハルピンの領事館警察ですよ。——しかし、大丈夫、わしといふ奴は、決して怪しいもんでも何でもありません。この通り、岡部要之介さんに面會しに上がつてゐるものなんですから。名前は、田中功といふもので。』

田中にさう名差された男は、暫らく息を殺して、孔のあくほど田中の脱帽した顔を熟視してゐたが、やがて、もの靜な聲で語尾を曳摺りながら云つた。

『さう仰言ると、よく似てゐますな、御互に。しかし、聲はさうぢやない。妙なことがあるもんです



ね。——實は、私もね、今そこへ上がつて来て、ちよつと氣がついたことなんです。へ——え、田中さんと仰言るんですか？ ハルピンで？——すると、何か、貴方はハルピンにお在でだったのですね？』

『え、ハルピンには永いことうろついてました。どうにかしてロシアへ行きたいと思ひましてね。』

『ロシアへ……？』

『わしはもう震災當時の内地の事情を見まして、日本の運動はとても國際的に伸びなけりや發展性が無いと——』

『いや、さういふ御意見は、いづれ別の機會にゆづることにしませう。今日は、私は急ぎますから、これで失禮させて戴きます。……と、貴方は、どなたに御會ひになり御出ですつて？』

『岡部要之介さんですよ。』

『岡——はてな。いや、いろんな仲買關係の人が集まりませうから、さういふ人もゐるでせう。ちよつと私が訊いて見て上げませう。』

さう云ひ捨てて、前からの約束らしく、林といふ男は、ドアに向つて、三つノックをした。先方の

返事がないので、もう一度同じノックをつづけたのち、彼は振り向いて、

『ハルピンでやられたのは、御氣の毒でしたなア。』

と慰め顔に云つた。

『何、なんでもないですよ。これも貴方にどこか似てゐるわしらの光榮と感じてるわけなんです。』

『飛んだ光榮です。——私もすこしこれから氣をつけませう。』

『一體、貴方は……』

そこへドアが細目に開いて、先刻の大きい男が、もう一度廊下を覗いて見た。

『や、君か？——』

『ちと手間どることが起つてね。居るか？——』

大きい五分刈頭が、陰影になつて頷ぐくと、ステッキの紳士はついと中へ這入つてしまつた。一度閉されたドアの向ふに、大きい男の聲らしい笑聲が爆發して、暫らく二た言三言の會話が、どもどもとドアに響いた。

『や、御待ち遠う。』



ぎしぎしした聲で出て来たのは、岡部要之介であつた。彼は、用心深くドアを締め切つて、外出する時のやうに帽子をま深くかぶつて、先に立つた。

表へ出るのかと思ふとさうではなくて、階段の曲がり角からちよつと階下の方を窺いて、そのままどンドン三階への階段を上りはじめた。四階の廊下の中央に、この旅館の食堂があつて、大食堂を通り抜けると、家族用に仕切つた小房がいくつもあつた。

その一つへ這入ると、岡部は、窓のカーテンの下へ陣取つて、メニュー・カードを取り上げた。「定食でいいですか？」

導かれるままについて来た田中に、異議のある筈はなかつた。

影のやうにつき纏ふてゐた白服の給仕が、ナイフ、フォークを揃へ、註文を取つて引退がると、岡部は何気なくカーテンから空を瞻上げ、それから、じつと電車通りに眼を注いだ。田中も、何かしら気がそわそわして、岡部の落着かぬ態度を、不意に自分が訪問して、邪魔になつたせいだらうと解釋した。

『どうも突然御訪ねして、何だか大變御迷惑を掛けたやうですが——。』

「いや、そんなことはありません。唯、今後は、御出になる前に、ちよつと電話なり、前以て日を定めるなりして戴いた方がいいやうですな。端書などは御出しにならなくとも——それほど重要な商賣でもないんですから。今日はよく來られましたね。あすこにゐたのは、僕の友人でしてね、支那人の物賣やら淫賣婦などが、しよつちう廊下をひやかし半分にうろついてうるさいもんですから、あややつて番をしてくれるのですよ。……」

最初に出會つた時分よりは、幾分かうちとけて話してくれる様子であつたが、それでも、この男の健康な齒で咬み切つて云ふやうな言葉つきには、まだ何かのよそよそしさがあつた。

「——岡部さん、貴方は、あの社會主義者の林幸作さんと御懇意なのですか？」

「あ、あの林君ですか？ 先刻見えた？——え、前から知つてゐます。實は大學が同窓だつたものでね。あの男も、今はすつかり運動から身を引いて、紡績會社の祕書をやつてゐますが、一と頃は旺んに暴れたらしいですな。現に、時代遅れな領事館警察あたりぢや、まだ、あの先生に眼をつけてるといふ話ですよ。——あれ、あすこにゐるのが、その何と云ひますか、尾行でせうな。あの日本人がさうですよ。』



かう云つて、岡部は、カーテンの背後から、街の向ひ側に立つてゐる一人の日本紳士を四角い顔でしやくつた。田中がカーテンへ手を掛けようとする、岡部はあわててそれを遮つた。——田中の見た眼には、日本人は一人ではなかつた。旅館のすぐ下の、表口のガラス屋根の下にも、英字新聞か何かを讀む振りをして立つてゐる胡麻鹽服の男が眼についた。よく考へると、その男は、曾て田中に「日本人倶楽部」への道を教へたことのある人間らしかつた。

彼は、思はず、腿のあたりにスポーツ選手のやうな跳躍を感じた。

「岡部さん、貴方は、失禮ですが、このわしに誠意がないと思つて、すつかり陰くして御出になるやうですが、わしだつてすこしは感づいて居りますよ。——大體、先刻も伺つたのですが、岡部要之介といふ御名前は、貴方が同志の間では通用しないぢやありませんか？ それに林さんにしてからが、非道くあわを食つて居られた様子でしたぜ。」

かう云ひつゝのつた田中は、卓の下で、岡部の靴がペダルを踏むやうに自分の足を踏んでゐるのを感じた。

「どうぞ、靜かに！ その話はあとで！」

胸にニッケルの給仕番號をつけた別な白服の給仕がスープレ皿をささけて音もなく兩人の傍に立つた。

「ここは、洋食だけは一通りのことをしますよ。——それやさうと、この間から貴方は失職されて御困りでしたね！」

給仕は、日本人紳士の會話を妨げないやうに蹠音を偷んで去つた。

「——え、何とかして勞働したいと思つてゐるんですが、どうも、」

「金はありませんか？」

「ちつともないので。」

「すこし御融通しませうか？ 澤山といふわけには行きませんが。」

「……實は、そんな目的で御訪ねしたんぢやありませんかね。」

「わかつてます。どうです、百元だけ御持ちなすつちや？」

「百弗ですつて——？」

「御貸するのですよ。」



「それや、もう、金はいくらでも使つて使へんことはないんですが。しかし、わしに貴方からさういふ御好意を戴くわけがないのでして……」

「外國にゐて、困りや日本人同志は御互さまですよ。——どうです、その金で、一つ上海を引揚げて、内地へ御歸へりになつては？ 御見受けしましたところ、こちらで別に貴方に適した御職業もなさそうぢやありませんか？ 人間は手ぶらで遊んでる時は、一番金がかかるもんで、又、一番氣が揉めるもんですよ。」

給仕は、皿を引いて行つては、別に皿を運んで来る。その間、田中は夢中になつて、相手の氣持を理解しようとして、何を食つたかも覚えてゐなかつた。

「——歸りたくないです！」

最後に、彼はきつぱりと氣持のあるところを告げた。

岡部は、その刹那には眼でじろりと彼の表情を眺めたが、すぐと食卓のクロースの皺を舒すやうに両手を動かした。

「やはり、支那にゐて、運動とかに御這入りなさるんですか？」

「何をしますか、見當はつかんですが、わしらの道はどうせどん底からやつて行かなア駄目だと思ひますから、もうすつぱりと日本人であることを止めて、苦力にでもならうかと思ひます。——ですから、御金もあつていいやうな、なくともいいやうな、まア、そんな氣持なんです。——それよりも、岡部さん、わしの本當の決意を一つゆつくり御聽きなすつて下さいませんか？」

「運動——といふやうな方面に對してのですか？ 成るだけ簡單に、どうぞ靜かにやつて下さい。大きい聲では云へませんがね——この支那人の給仕なんか、よく日本語がわかるんですからね。」

「ぢや、手取り早く申しませう。——このわしを、貴方がたの仲間にして戴けませんかね？ 黨員の下つ端といふ風な？」

呆れて物が云へないといふやうに、岡部は顔の表面に明かに變化を見せた。そして、彼は軽い聲で、ははア……と笑つた。

「何か僕等が黨だとか——結社だとかいふものでも組織してゐると御考へになるのですね？ 誤解です。飛んでもない！」

田中は手にしたナプキンを皺にした。



「だつて、現に、林さんは、モスクワから、歸られたんぢやないですか？」

と、眼前に笑つてゐた岡部は、異様な刺戟にびりつとした風に、屹と頭を擡げた。彼れの隻手は、ポケットを捜がしてゐた。

「どこから聴きましたか？」

「實は、そのことですがね——」田中は、急に上半身に角度を作つて聲を落とした。

彼れの話したことは、日本人倶楽部に於ける松山と大友との誘惑であつた。

「つまり、わしを林さんに仕立てて、總工會の中へ潜ぐり込めと云はんばかりの計畫なんです。わしは、先方がその切り札を出すと、席を蹴つて飛び出したものです。」

そこへ、黒珈琲と果物の鉢を持つて、給仕が這入つて來た。岡部はポケットから出した右の手でバナナを取り上げた。

「仲々面白い。松山君とやらも、細工師ですね。」

かう云つたきりで、岡部は、又カーテンの蔭から街上を瞰おろしはじめた。給仕が傳票を書いて去つた。そして、言葉の上の憎性でもあるか、

「——ふむ、さうですか？……」

と深く息を吸つた。

次の瞬間、岡部要之介は、によきつと椅子から立ち上がつて、窓の下を後ろ手をしながら歩きはじめた。

「貴方は、林幸作に事實上よく似て居ますよ。ただ、聲量が貴方の方はすつと大きい。——ふむ、聲なんかどうでもいいんだが、聲はさほど問題ではない。」これは徘徊しながらの獨り言らしくもあり、半ば田中に話し掛けてゐるやうでもあつた。突然、岡部はその手を田中の肩の上へ置いた。

「どうです。」彼は囁いた。「一つ御相談があるんですがね。貴方これから林の代りになつてくれませんか？ 身代りです。いや、どうせ大したことはないのですが——その、御覽の通りスパイが尾行して先生閉口しとるらしいんだ。いいですか、これは、貴方を百パーセント信じて僕から御頼みするんですぞ！——つまり、何だ、結局、貴方が身代りになつて、本物の林が活動し得るやうに、奴等を撒いて下さるといいんだ。どうですやれますか？」

「——と仰曰ると、即座に檢束でもされるのですか？」



「いいや、僕達の——その、事件はそこまで進展してゐないんですよ。今度、この都會か漢口かどちらかに會議があるのですね、その會議は林が列席しないと、どうも正式な相談が定まらないわけですよ。ですから、場合によつては、奴等は貴方を檢束したり送還したりするかも知れませんが、私の考へちや、貴方さへじつとしてゐて、不審な行動に出なけりや單なる監視をつづけるだけのものと思はれるんです。」

「影武者ですね、つまり？」

「それですよ。ここに、先刻御話した百元ありますから、御持ちなさい。そして、服はそのままの方がいいと思ひますね。すりや、先刻尾けて來た林幸作が、わざわざこのホテルで變装して、どこかへ高飛びする心算だと早合點して、貴方をどこまでも尾けて行くにちがひないです。それでいいんだ。そして、貴方は、現在の場所にじつとして居られりや、向ふでも安心して見張りをしてゐますからね。」

「何か、かう表で帽子でも脱いで見せるんですか、わざと？」

「いや、そんなことせんでよろしい。なるべく自然にして、本物の林になりきつて居られればいいの

です。出來のなら、すこし變化のある生活を見せてやる必要もありますね。それは貴方の才覚一つで、そして、金が必要とあれば、かういふ番地を上げますから、これを覚えてゐて、誰にも知られないやうに御出でなさい。」

ここで、岡部は、名刺の裏に、エヴァーシープで一行の番地を走り書きした。

「佛租界貝勤路一〇九號」

その字はかう讀めた。

「これはフランス語では、ルウ・アマラル・ベイユといふ街の名です。いいですか？ よく字と番號を暗記してゐて下さい。書きちや駄目です。——そして、そこに住んでゐる俄德といふ支那人に會へばいいんです、俄德とはかう書きます。日本語がよくわかりますから安心です。必らず、その番地を誰へも聽かせちやいけませんよ。さういふ反則はすぐと知れますからね。その時は、もう貴方と僕達とは何の關係もなくなつてゐるんです。何等の紹介もない貴方を、僕が獨斷でこんなことに御願ひするの、實は、この間から貴方といふ人の動かない階級意識を知つてゐるからですよ。」

田中は、貝勤路一〇九號俄德——と繰返へしながら、眼の前で、同じエヴァーシープが、幾度も



幾度も名刺を塗りつぶした上に、マッチが擦られて灰皿の上で焼き捨てられるのを見成つた。

「どうです、葉巻を一つ？」

岡部にすすめられるままに、田中は、皮のケースから一本の葉巻を抜き取つて火をつけた。そして、ケースの下から、十元紙幣を重ねて二つに折り疊んだのを十枚受取つた。

「さあ立ちませう。——久し振りで愉快な御話を承りました。また、僕の方もそのうちに手明きになりますから御遊びにいらつしやい。」

岡部は、かう云つて、食卓の上へ二枚の銀貨を置いて、傳票を持ちながら帳場の方へ歩み出した。

「ちよつと、一言。貴方は一體何と仰曰る方ですか？」

「——崎山です、運動では。では、直感を働かしてやつて下さい！」

田中は、最後の皮肉を握手と共に受けた。立ち上がると體中がほてりきつてじつとしてゐられないので、勢よく階段を一氣に玄關まで駆け降りた。

玄關の押扉を開くと、彼は、わざとらしく怒つたやうな顔をして、さつさとポケットに手を突込んだなりに歩き出した。

身なりに不相應な葉巻を啣へた青年を、二人の日本人が、街の兩側から眼で挟み打ちをした。田中は、ふふんと小鼻で笑つて、黄包車の一臺を呼び止めた。

13 擾

亂

田中功は、不圖、上海へついた當日、むやみと恐怖心にかられて崎山を黄包車で撒いて失敗したことを懐ひ出した。

今日は、正當な理由があつて、あとからつづく一臺の車を、どうして困まらせてやらうかと、意地悪く横丁から電車道へ、電車道から裏通りへと乗り廻はしてゐる彼であつた。彼は、時折、マッチを摺る風をして横を向いて、まなじりにスコッチの服が映ると、乗つた車夫に、

「おい、急げ！ 一弗やるぞ！」  
と叫んだ。

恐らくあとの車だつて、同じ言葉で鞭撻されてゐるにちがひない。双方の距離は、車夫が汗みづく



になつて疾走しても、一向に減りもしなければ殖えもしてゐなかつた。

彼はわざわざ愛多路へ抜けて、競馬場のわきを、大世界の下から南京路——福建路——北京路——蘇州路——自來水橋を渡つて、まつすぐに靶子路へ突當り、それから惡戯氣になつて吳淞路を「上海毎日新聞」の前からどこまでも曲がり曲がつて、黄包身の這入れさうにもない狭い裏町まで出た。さすがの車夫も、もう一步も歩けないといふ顔をして、車上の垢じみた洋服を着た暴君を恨らめしそくに幾度も見返へつた。

『よし、降ろせ！』

車夫は汗を拭ふ暇もなく、飛び降りた客の前へ掌を突き出すと、差出された一弗銀貨を、糸切齒で検査して見なくてはならなかつた。皮肉な田中は、わざと今來た道を、徒歩で取つてかへした。

はたして、五分ほども遅れて、スコッチが何か車夫と問答しながら急いでやつて來るのが眼についた。

田中の姿を見るや、先方では、あはてて英字新聞へ顔を押してたまま何やらもう一度車夫に命ずるのが、口の動きによつて推察出來た。

田中は、口笛を吹きながら、その傍を通り抜けて、ちようど其處にあつた吳淞市場の人混みの中へまぎれ込んで、一と隅の錢莊で十元紙幣を銀貨に替へて貰つた。

それから、見たくもない豚の頭の陳列棚や、血を凝らせた四角い箱の列の間を、いかにも分別くささうな顔をして歩き散らして、別な出口から北四川路をめがけて歩き出した。

スコッチ服も、英字新聞も、その影は消したやうになくなつてゐた。

そこから今度は逆に蘇州河近くの崇明路へ出て、そこの一軒の廣東料理へ上がつて、熱いタオルで顔を拭いた。——長い小旅行であつた。

給仕が註文を取つて去つたあとで、一と隅にある支那語の新聞を手にとつて見れば、ミダシに「南軍總司令蔣介石が南昌へ行つた」とか「孫傳芳は天津に密かに入つた」とか「張宗昌が安徽へ向け出兵する」とかいふ電報が、大きい活字でべた一面に出てゐた。

それらの記事は明かに、北伐軍と、張作霖、孫傳芳、吳佩孚の聯盟とが、江蘇浙江の商業的產業的中心點である上海をどう攻略するかについての、双方の勢力の動きを報告してゐるものにちがひなかつた。——南方政府が上海まで進出して來て、いよいよこの揚子江の喉首を締めつけて「打倒帝國主



義』、『實行對日經濟絶交』、『廢除不平等條約』などといふ共產黨、國民黨左翼の政治を實現する段になると、一層困るのは、差し當り日本でなければならぬ。

『それにしても、あの連中は、一體何の用があつて上海へ集まつてるのだらう？——會議があると言つた。何の會議だらう？』

田中は知らず識らずに、自分も捲き込まれて居つた今日の出來事と、つひ眼の前に置かれた新聞記事との間に、何かの聯絡を求よとするやうにいろいろと考へて見た。

もし、南方革命政府と、日本の社會主義者の間に、何等の聯絡もないとすれば、崎山や林の活動は、半ば以上田中にとつては意味のないものではなかつたか？——それとも、崎山達は、この上海を舞臺にして、ソヴェート・ロシアの誰かとも面會してゐるのではないか？

たしかに、先刻も、ホテルの内部で外國人の話聲が聞えたではないか！ アメリカ人ではなささうだし、——これは、てつきりロシア人にちがひない。

『トロツキー、ジノヴィエフ兩氏の反對運動中止を聲明す。——ジノヴィエフ氏第二インターナショナル執行委員長辭職。——スターリンの支那革命援助説。』

つひ二日前に讀んだ、邦字新聞の政治記事が頭へ浮んで來た。そして、そこに報告されてゐた十月二十六日にモスクワで開かれた第十五次全聯邦共產黨大會の席で、ブハーリンが世界の革命狀勢を説いて、第一に支那數億の民衆が前へ進み出したことを擧げたことが、今鮮かに、彼れの頭の中に新しい光を帯びて閃めいた。

田中は、むさほるやうに、支那新聞の外國電報欄を漁つた。しかし、それには蘇俄モスクワ電報として十一月二十二日から開かれる第七次擴大幹部大會に譚平山が出席するといふことが三行載つてゐただけだつた。田中の求める記事はそれではなかつた。

田中が、かうやつて血まなこになつて、支那新聞と闘つてゐる最中、隣室には、ボーイの尤もらしい挨拶の聲といつしよに、日本語で話し合ひながら這入つて來た客があつた。

『や、どうも、あの通りですからね……』  
一人が椅子へ掛けたらしく、言葉の後半がわりに強まつて響いた。

『實に御忙しいやうですね。でも、今度はもう何でせう、お退けなんでせう？』  
『え、もう、これ以上働かせられて堪りませんよ。何しろ、今度の戦争だけは、日本方面でもかなり



重大視してゐますしね、それに、貴方、大阪方面なんかの動搖と來たら大變なものでせう。——」

「まあ、田中さんが頑張つてくれるから、チャンコロも流石に手は出せないんでせうがね？」

田中は、自分と同じ名が呼び出されたことに對して、忌々しい氣持になつた。猿のやうな顔をした軍人が、ふと心に思ひ出された。

「——しかし政府もわかりませんよ。今日あたりの電報ぢや、どうも南方政府を型ばかりも承認しなけりやならないと云つた輿論が多いやうですからね。」

ここで、田中は、會話の主人公の一人が、新聞記者らしいことを悟つた。

「もう一行は御歸へりになつたやうですね？」

「え、もう着いたらしいですな。——どうですか、清浦氏もうまくこの新しい支那の事情が日本の頑固屋連に傳へられますかしら？ 尤も祕書がしつかりしてゐるから。」

「すると、貴方だけひとり御残りになるといふわけですね。——勿論、これはインコグニトオでせうね？」

「まあ、大體そんなところで。ちよつと、調べかけた事もありますから、いづれその方の底を突き次

第歸へるつもりです。何しろ、この分ぢや險呑ですからね。いつ、貴方、上海で市街戦でもおつぱじめられないもんとも定まらんでせう？」

「まあ、そんな御心配はないでせう。あの通り軍艦が睨んでゐますからね。随分と英國なども陸戦隊を送つて來てるやうですよ。」

「ですが、北京の外交團は一向に活動せんやうぢやないですか？」

「さア、そりやね、ちよつと御耳を……」

ここで、二人の話は途切れて、階下の厨房で支那人達が何かわめき立てる聲が、調子ツ外れの音樂のやうに響いた。

音を偷むやうな足取りで、田中の室へ、ボーイが、錫の壺と冷菜を運んで來た。

田中は、黙つて琥珀色の酒を注いで、隣室の様子に耳を傾けた。

「ここは、廣東料理ですか？」

「と、まあ、稱するんですが、もう上海の料理と來たら、一流どこへでも行かんと、から駄目でしてね。味母だけで胡麻化すんですからな。」



『ははア、鈴木商店の出店みたいなもんですね……。』

こんな小ブル的な軽口から、二人は、散漫な支那觀をはじめた。——田中は、すっかり興味がなくなつたので、自分の料理が出次第引上げることにした。

と、新聞記者らしい方が、突然こんなことを云ひ出した。

『郵船も今度はストライキで、大打撃らしいですね？』

『郵船もさうでせうが、それより困るのは、社外船の連中でせうな。私の聞いた話では、外國船の船長などは、陸の苦力のストライキの最中に、支那人船員やボーイを上陸させると、一緒になつてストライキをする恐れがあると云つてからに、本船へ監禁同様にしてるさうですよ。その連中が又上陸させてくれと云ふて船の中は割れるやうな騒ぎだといふことです。その河口に碇泊しとる荷物船や汽船が大概それでもめてるらしいですよ。』

『へーえ、こりや面白い話ですな。早速一つ當つて見ませう。——だが、しかし、こんなことは、一體列國の武力でもつて何とか解決出来んもんですか？ 考へりや、わけもなささうな話ですがね。現在、私達の聞いているだけでも上海には英國が千五百の、米國が千二百ですか、それから、日本が千

人、佛伊と合せてかなりの陸戦隊もありますし、それに上海義勇團といふのが二千人からあるんですからな。』

『この間、フェッセンデンといふ男に會つた時に、これから上海の治安維持方法は、可なり今迄とは違ふだらうなんて云つとつたがね。……何せ、あの汽船の監禁問題だけは、うつかりすると共產黨の連中につけ込まれますぜ。』

『うつかりすると、ね。……』

ここで、二人の話題は、獨得な小ブル的散漫性を帯びて、席上へ支那藝妓を呼ばうか、呼ぶまいかといふことに移つて行つた。

田中は、この料理屋へ上がつてから、もの三言とも云はずに、そこを切り上げた。

義豊里へ歩いて行く間に、街々に配置された巡警の數のいちじるしく増加したことに驚いた。

——フェッセンデンといふ英國官憲の治安維持方法でもあらう。現に、巡警の一人は、袋小路の門壁に、蝙蝠のやうにくつついて表を窺つてゐた。

めし屋の餉臺には、いつもの元氣のいい苦力達はどこかへ出て行つたらしく、『リヤング』や、老翁



れた連中だけが、古新聞の吹きまくられてゐる露地の闇を眺めて淋しさに掛けてゐた。禹平珍の家からは、半分閉ざされた扉の奥に、麻雀牌を掻きあつめる響がした。

『みんなはどうしたね？——』

田中は立留まつて、苦力達に漫然と訊ねた。

『知らない。どこかへ行つてしまつた。』

めやにだらけな老人がさう無愛想に答へて、寒そうに綿服の袖へ両手を深く入れた。

『罷工が長くなつたりすると、俺は安徽省まで歸へらにやめしが食へぬてな。——』

坊主頭の男が、煙脂だらけの長い煙管の音を立ててゐる爺に話し掛けた。

『なんでもいいから、もつと變つてくれないと駄目だ。——早く革命が來るといいな。』

『南軍は、もう浙江省を取つたさうだ。』

『しかし江蘇省には、まだまだ遠いぞ。』

寒い風が、表通りから颯と切れ込んで來て、行留まりの露地を、精一杯に膨らますやうに吹きつけた。店の貼り紙が鳴り、カンテラは蛾のやうに羽搏きした。

どこからか、黄ろい木の葉が舞ひ落ちて來る。もう、すつかり冬である。

『あーア、すべては幻影だ。——革命、放伐、もとこれ夢さ。歴史——支那二十四朝の興亡みな榮枯盛衰の儚ない芝居だ。——萬物流轉、あーア。……』

だしぬけに、隅にうづくまつてゐた木馬の老人が、頭をもたけると、物語り風な口調でかう嘆息した。今夜はどうした加減か、すこし酒に酔つてゐるらしく、眼の縁の赤らんだのが、頭の白髪と際立つたコントラストを見せてゐる。

『寒い。寝るとするかな？——』

欠伸まじりに、齒のない齧の間から、「リヤング」が獨り言のやうに云つて立ち上がった。

そこへ、めし屋の亭主と女房が、いつもの仕込みから歸つて來た。日本人みたいに、何から何まで掛け聲で動作するのところが、黙つて一定の仕事をする支那人を見てゐると、力の籠つた動物のやうな感じがした。めし屋夫婦の加勢と見えて、今夜は、背丈の高い苦力がズツクの袋をかついで、二人のあとからつづいて這入つて來た。

『湯！湯！』



這入るといきなり女房は店で何か頬張つてゐる小僧を吐りつけた。小僧は、立ち上がると、藥罐と銅錢を擱んで、表の賣湯屋へばたばた駆け出した。

「大變めしを仕入れるな？」

坊主頭が亭主に訊ねた。

「なに、同じことよ。だが、この男は途中で俺達に出遇はして、いつしよになつたんだ。あの袋は、めしぢやなからう。」

すると、今かついで来た袋に跨がつてゐた苦力が云つた。

「こりや、南京から逃げて来た男の荷物を、途中であづかつたのだ。——リヤング、部屋の中へぶち込んで置いてくれよ。」

「リヤング」はそれをしほに重さうな袋を背負ふと、小舎へ、歸つて行つて、それから二度と出ては來なかつた。

その時、がやがや云ひ合ひながら、ほかの苦力達も歸つて來た。

「五省聯盟も駄目になりやがつたぞ！」

「浙江省の陳儀はびつくりして全省に自治を布いたさうだ。」

「もう一息といふところさね。」

「年内には、この上海に戦争がきつとあるぜ！」

「やあ、東洋、寒いね！ オハヨウ！」

「魯沈、お前、先刻の袋を持つて來たな？」

かう賑かになつたところへ、藥罐を下けて飛んで來た小僧が、すぐ背後を指さして告げた。

「巡捕がやつて來る！」

「なに、巡捕が？——來たつて構はねえ。粥でも欲しいんだろ。」

「おい、夥計、酒買つて來い。寒いや。」

「酒なら、俺が買ふ。」

田中は一元銀貨を投り出した。

小僧は眼を圓くして、銀貨に飛びついた。田中は、その眼の前へ指を突出して見せた。小僧はまた口調で訊いた。